

「ナイル」河ヲ遡ルト所々ニ急流ガ出來テ居ル、今之ヲ瀧ト譯シテ申シマスルト第一瀑布第二瀑布トイフヤツニ幾ツモアル、今ハ其一ノ瀑布ノ「アツシユワン」マデ鐵道ガ出來テ居ル、又南ノ方面ハ「ケーブ、タウン」ノ方カラダン／＼進ンデ「ブラフヨ」トイフ所マデ往ツテ居ル、彼ノ「セシル、ローズ」ガ經營シタ「ローデシヤ」トイフ所ガ縱貫鐵道ノ通過スル處デアアル、昔ハ獅子ガ澤山居ツタ所デアアルガ今日ハ汽車ガ通ル、他日ハ「アツシユワン」ト連絡サセルコトニナツテ居ルノデアリマス、サウスルト「亞弗利加」ノ縱貫鐵道ガ出來ルソレカラ小亞細亞デ申シマス、土耳其古ノ「コンスタンチノーブル」ノ對岸「ハイダル、パシヤ」カラ波斯灣迄鐵道ガ出來ル筈ダ、今實際「ハイダル、パシヤ」カラ「アングラ」マデ出來テ居ル、サウスルト獨逸人ハ更ニ又ソレヲ「コーニヤ」トイフ所マデ延シテ居ル、後ニナルト「コーニヤ」カラ段々ニ波斯灣マデ延バスコトニナツテ居ル、ソレガ「バクダッド」ヲ通ズルコトニナツテ居リマスカラ之ヲ「バクダッド」鐵道ト稱シテ居ル、此鐵道ハ大ニ歐羅巴人ノ注目シテ居ル所デ是ガ成レバ獨逸人ノ勢力ガ大ニ小亞細亞ニ加ハツテ來ルカラ注目セザルヲ得ナイ、日本ノ中學ノ教科書ナドニハ

「バクダッド」鐵道ノコトガ少シモ書イテナイガ、此鐵道ハ能ク注目シテ置カナケレバナラス鐵道デアアル、又米國ノコトヲ申シマスルト「イフト」御承知ノ通り東カラ西マデ鐵道ガ貫イテ居ル、其間ガ三千哩アルト「イフト」譯デアリマス、又支那ノ鐵道ヲ申シマスルト北京ト漢口ノ間ニ鐵道ヲ拵ヘツ、アル、所謂蘆漢鐵道、今ノ京漢鐵道デアリマス、此鐵道ハ未ダ十分ニ出來上ツテハ居ラス、ソレハ黃河ニ橋ヲ架ケルノガ非常ニ困難デアルカラデ、未ダ直グト「イフト」譯ニハ行キマセヌガ、來年マデニハ悉ク開通スルカモ知レヌデス、此橋ガ出來レバ「イフト」鐵道ハ餘程出來テ居ル、サウ致シマスルト「イフト」漢口カラ北京マデ鐵道デ行ケルヤウニナル、ソレカラ獨逸人ガ經營シテ居ル、山東鐵道即チ膠州灣カラ濟南府マデ行ツテ居ル、之ハ段々延バシテ唯今ノ蘆漢鐵道ト連絡サセル積リト見エル、其他大分前ニ出來タノヲ申シマスルト北京カラ天津、天津カラ海岸ニ沿フテ牛莊マデ行ツテ居ル、是ニハ支線ガアツテ溝幫子カラ新民屯マデ出來テ居ルノデアアル、此外ニ日本人モ隨分鐵道ヲ經營シテ居ルノデアアル、日本人ノ拵ヘタ鐵道ト申シマスルト汕頭カラ潮州マデノ鐵道、社長ハ支那人デアアルガ總

支配人ハ法學士ノ愛久澤トイフ人デアリマス、ソレノミナラズ未ダ鐵道ヲ澤山敷ク積リテ矢張り臺灣ノ對岸カラ他日ハ漢口マデ鐵道ヲ布ク積リト見エルデス、計劃ノ詳シイコトハ存ジマセヌガ其位ノ計劃ハナケレバナラヌコト、思フノデス、ソレカラ緬甸ニ於テハ英吉利人ガ鐵道ヲ拵ヘテ居ル、其鐵道ハ「ラングーン」カラ「マングレー」マデ行キマシテ「マングレー」カラニツニ分レマシテ東北ヘ行ツテ居ルノハ「ラツシヨ」トイフ所マデ行キ眞直ニ北ヘ行ツテ居ルノハ「ミートキーナ」トイフ所マデ行ツテ居ルデアリマス、「ラツシヨ」ノ方面ヲ延長シテ行キマスルト雲南ヲ通ルコトニナル、又「ミートキーナ」ノ方面ヲ進メテ行キマスルト雲南ヲ通ツテ四川マデ鐵道ガ延ビルコトニナル、英國人ハサウ云フ鐵道ヲ作リツ、アル又佛國人ハ東京ニ於テ鐵道ヲ拵ヘテ居ル、其ハ「ナムデン」カラ「ハノイ」マデ行キ「ハノイ」デニツニ分カレ一方ハ「ハノイ」カラ「ラシチヨ」ニ進ミ他ノ一方ハ老開マデ延ビテ居ル「ラシチヨ」ノ方面ヲ更ニ一府延長スレバ其鐵道ハ廣西ヲ通過スルコトニナリ老開ノ方面ヲ延長スレバ雲南ニ行クコトニナル此方面ハ既ニ少シク延長シタル筈デアリマス斯ノ如ク

佛國人英國人ハ鐵道政策ヲ取ツテ段々支那ノ南西ノ方ニ侵入シテ行カウトイフ譯デアリマス、又斯ノ如ク鐵道ガ澤山出來ルト旅行モ非常ニ容易ニナツテ來ル、昔ハ旅行ガ中々困難デアリマシテ少シ餘計旅行シタ者ハ非常ニ有名ナモノニナル其有名ナモノヲ舉ゲテ見ルト支那人デハ張篤ガ有名デアル、伊太利人ノ「マルコポーロ」及「モロツコ」人ノ「イブン、バツター」等モ有名ナ旅行家デアアル中ニモ「イブン、バツター」ハ「タンジエル」ノ人デアツテ亞弗利加ノ北カラ亞細亞マデ來テ遂ニ支那マデ來タ人デアリマス、餘程永イ間旅行シタ、一千三百二十五年カラ一千三百五十五年マデ先ヅ三十年近ク旅行シテ居ルサウイフ譯ダカラ「モロツコ」ノ方カラ埃及ノ邊マデ來ルニモ餘程永イ年カ、テ居ル、其間ニ三度バカリモ妻君ヲ貰ツタトイフコトガ書イテアル、中々呑氣ナ人デアツタ、ケレドモ今日ハ旅行スルニ左程ニ永クカ、テヤルニ及バヌ、世界ヲ週遊スルニモ雜作モナク出來ル。

更ニ電信ノコトヲ申シマス、電線ヲ始メテ架設シタノハ一千八百三十七年デアアル、即チ日本ノ天保八年デアリマス、海底電線ヲ始メテ拵ヘタノハ一千八

百五十一年デアリマシテ、佛蘭西ノ「カレ」ト英吉利ノ「ドーバー」トノ間即チ「ドーバー」海峡ノ間ニ始メテ海底電線ヲ拵ヘタ是ハ我が嘉永四年デアル「ペルリ」ガ浦賀ニ來タノガ嘉永六年ニ當ルカラソレヨリ二年前ニ始メテ出來タノデアル、ソレカラ一千八百五十六年ニ太西洋ノ「アイルランド」カラ「ニューフワウンランド」マデ出來タノデアアル、今日デハ太西洋ニハ十五六線モ出來テ居ル、紐育ノ新聞社ハ自身デ海底電線ヲ持ツテ居ル新聞ノ論說ヲ書ク人ガ倫敦ニ住ンデ居テサウシテ一語々々ツ、海底電信ニ依リテ新聞社ヘ言葉ヲ送ツテ居ルサウ云フ工合デ亞米利加ノ新聞ヲ倫敦デ書クコトガ出來ルヤウニナツテ居ル、斯ノ如ク今日ハ電信ハ勿論海底電信ガ澤山出來タ、又電話ヲ申シマスルト中々長距離ノ電話ヲ造ツテ居ル、紐育カラ市俄古マデ既ニ長距離ノ電話ガアル、其間ハ一千哩アルトイフコトデアリマス又大仕掛ノ電話ヲ申シマスルト匈牙利ノ「ブダベスト」ニ於テハ一ツ所デ話ヲスルト諸所ニ其話ガ通ズルトイフヤウニナツテ居リマス、其他無線電信ナドモ極ク近頃用キラレルコトニナツタノデ、御承知ノ通り日露戦争ニ於テハ彼我艦隊共之ヲ用キテ居ル、曩ニ日

本艦隊ガ仁川ニ於テ「ワリヤーグ」コレ一ツヲ撃沈スル際我艦隊ハ無線電信ヲ用キテ居ツタノデアリマス、又旅順攻撃ノ時殊ニ間接射撃ノ時日本艦隊ハ大ニ之ヲ用キテ居ツタノデアリマス、話ガ後ヘ戻リマスガ電話ハ陸軍ノ方デ重ニ用キテ居ル司令部カラ軍隊ヘノ號令デサヘモ電話ヲ以テスル、斯ノ如キ「ハ日露戦争ガ始メデアツテ其以前ノ戦争ニハ電話モ無線電信モナカツタノデアアル詰リ十九世紀ノ間ニ色々ノ學問ガ非常ニ進歩シテ從テ交通機關モ亦進歩發達ヲシタノデアツタ、ダカラシテ二十世紀ノ始マリト十九世紀ノ始メト比較スルト非常ナ遠ヒデアアルノデス、假令バ「ナポレオン」時代ニ於テハ燐寸モナカツタノデアアル、幾ラ「ナポレオン」ガ豪イトイフテモ燐寸ヲ知ラヌ、汽車ニ一ツ乗ツタコトハナイ「ナポレオン」ハ電報一ツ受取ツタコトハナイ「ナポレオン」時代ト今日ト比較スルト「ナポレオン」時代ハ中古時代ミタイナモノデアアル、近世ハ何時カラ始マルノデアアルカトイフト即チ二十世紀カラ近世ハ始マツテ往クノデアアル私ハ中古時代ニ生レタノダ諸君ノ多クモ中古時代ニ生レタノデ二十世紀ハ今始マリツ、アルノデアリマスサウイフ譯デアアルカラ二十

世紀ノ趨勢ヲ能ク考ヘテ置カナケレバナラスノデス。

十九世紀カラ二十世紀ニ跨ツテ商業ヤ工業ガ餘程大規模ニ行ハレツ、アル
 デス、自分一人ノ財産ヲ利用シテ商工業ニ從事シヤウトシテモ極メテ不便デ
 アルカラ會社ヲ作ル、會社デモ小サイカラ亞米利加デハ「ツラスト」ヲ造ルトイ
 フ譯ニナツテ居ル倫敦モ昔ノ狀態今ヨリ三四十年前ニ於テハ馬車ナドハ澤
 山ノ人ニ屬シテ居ツタノデアアル、即チ馬車ノ持主ガ澤山デアツタガ今日ハ大
 會社トナツテ僅カノ數ニナツテ居ル勿論馬車ダケデナク靴屋デモ牛乳ノ配
 達デモ同ジデアアル、洗濯屋ノ如キモサウイフ風ニナリツ、アル、私ノ目撃シタ
 所ヲ申シマスルト、洗濯屋ガ倫敦市外ニアルノガアル、倫敦ノ洗濯物ヲ流車ニ
 乗セテ持ツテ行ク大概一週間ニ一度洗濯物ヲ集メテソレヲ洗濯シテ次ノ週
 ニ持ツテ來ルヤウニナツテ居ル、大抵中流社會デ申シマスルト日曜日ノ前ニ
 洗濯ノ品ヲ渡シテ前ニ渡シタ品物ヲ受取ルトイフヤウニナツテ居ル、サウイ
 フコトヲ取扱フニハ小サイ會社モアルガ併シナガラ倫敦外ニ大キナ會社ガ
 アツテ倫敦ニ運ンデ居ル、斯ノ如ク大キイノガ又合同シテ益大キクナル傾キ

ニナツテ居ル、亞米利加モ矢張りサウイフ狀態デアツテ鐵道ニ致シマシテモ
 「ニューヨーク」ト「バツファロー」間ノ鐵道ノ如キハ種々小サナ鐵道會社ヲ合併
 シテ一ツニシタモノデアアル、ソレガ爲ニ流車ノ速力ハ早クナツテ居ル、今日デ
 ハ一時間五十一哩位ノ速力ヲ有ツテ居ル、日本ノ流車ヨリハ非常ニ早イ又「ロ
 ックフェラー」ノ拵ヘタ「スタンダード、オイル、カンパネー」アノ石油會社モ非常
 ニ大キナ規模デヤツテ居ル、日本ノ越後マデ手ヲ出シテ居ル位デアアル、麥粉ノ
 「ツラスト」ハ今日ハ未ダ起ツテハ居リマセヌケレドモ他日ハ大キナ「ツラスト」
 モ段々起ルダラウトイフ傾向モアル或ハ銀行ノ「ツラスト」等モ他日必ラズ出
 來ルダラウトイフ豫測モアルノデス、現在出來テ居ル大キナ「ツラスト」ハ船ノ
 「ツラスト」デアアル、是ハ大西洋ニ行ハレテ居ル併シナガラ段々太平洋ニモ船ノ
 「ツラスト」ガ勢力ヲ及ボス、ダラウト考ヘラレルノデアリマス。
 要スルニ今日ニ於テハ工業ヤ商業ニ從事スルニハ大規模ニナリツ、アルノ
 デス、蘇士運河ハ一千八百六十九年ニ開通シタ、日本人デモ古イ時代ニ洋行シ
 タ人ハ蘇士ハ通ラナカツタ、又「バナマ」運河ハ未ダ出來テハ居リマセヌケレド

モ數年後ニハ必ラズ出來ルニ相違ナイアノ「バナマ」運河ハ古イ時代カラ計劃ガアツタノデアリマシテ一千八百五十年ニ英國ト米國トノ間ニ「クレートン、バルワル」條約ガ成立ツテ三十年バカリ經ツテ英國人カ其條約ヲ實行シテ南北亞米利加ヲ切斷シヤウトカ、ツタ所ガ亞米利加ニ有名ナ「ブレーション」トイフ豪傑ガアツテ英國ノ要求ヲ容レナカッタ「ブレーション」ノ考テハ米國ト英國トノ二國ガ造ツテハ損デアル、故ニ米國ガ一手ニ引受テ造ツタラ宜カラウトイフ計劃ガアツタノデ英國ノ要求ヲ容レナカッタ、極ク近頃ニナツテ元ノ條約ヲ改正シ「ヘーボン」スフオート「條約」ガ出來タ、ソレニ依ツテ愈南北亞米利加ノ間ヲ開鑿セラル、コトニナツタ、ダカラ數年後ニ必ラズ出來ルニ相違ナイ、船ノ噸數ガ大キクナリ速力モ早クナリ、既ニ蘇士ノ運河ガ出來テ居リ「バナマ」ノ運河モ出來ルヤウニナレバ、又諸所ノ船着場モ大キクナル傾ニナツテ居ル、露西亞人ノ造ツタ青泥窪ノ船着場ハ中々計劃ガ大キナモノデアリマス、明治三十五年ニ私ハ滿洲ニ行キマシテ哈爾濱ニ滞在シテ居リマシタ、アノ時ニ青泥窪旅順モ見テ參リマシタガ青泥窪ノ船着場ハ中々大キイ、長サヲ申シマスルト

二千八百呎、幅ハ七百呎深サヲ云ヒマスルト吃水二十八呎デアツテ如何ナル大船モ自由ニ着ケルコトガ出來ルトイフ譯デアリマス又幅ガ七百尺モアルカラチヨツト見ク所船着場ダカ何ダカ分ラヌ位デアル其位幅ガ廣イトイフト鐵道ガ二線マデ中ニ持ツテ來ルコトガ出來ル即チ瀛車ガ二ツ並ンデ中ニ這入レル私ノ行キマシタ時ニハ未ダ鐵道ガ十分ニ出來テ居リマセデシタケレドモ、併シナガラ計劃ハ能ク分ツテ居ルノデアツテ一方ノ瀛車ハ輸出、一方ハ輸入ノ爲デアル非常ニ贅澤ナモノデアリマス、私ハ人ニ案内サレテ行ツタノデアアルカラ是ガ船着場デアルト始メカラ承知シテ居ツタカラ少シモ疑ハナカッタガ私ヨリ前ニ露西亞語ノ上手ナ人ガ一人デ自分ノ言葉ヲ常テニシテ行ツタ人ガアル、其人ガ船着場ニ着イテ有名ナル青泥窪ノ船着場ハ何處デスト聞イタ所ガ是ガ船着場デストイハレテ其人ハ非常ニ驚イタトイフ話ガアル、船着場トイヘバ横濱ヨリ外ニ見タコトノ無イ人ノ驚クノハ無理モナイ青泥窪ノ船着場ハヤリ方ガ非常ニ大キナモノデ人造石ヲ以テ船着場ガ出來テ居ル其人造石ノ重サガ一個三十二噸モアツテ其價ガ一箇九百何十留、ザ

ツト日本ノ千圓バカリデアリマス、此大キナ人造石デ港ヲ埋メテ船着場ヲ拵ヘテ居ルノデアアル、其青泥窪ノ港ヲ大ニ利用シヤウトシタモノハ露西亞人デアルガ、之ヲ實際ニ利用シタモノハ日本デアアル誠ニ面白い、青泥窪ノ船着場ヲ見テ今度神戸へ來テ見ルト日本人ノ規模ノ小サイノハ憫笑ニ堪ヘナイノデス、神戸モ改築スルトイフ話デアアルガ其豫定ヲ聞イテ見ルト、御承知ノ通り湊川ノ爲ニ地面ガ突出テ居ル、アレガ邪魔ニナルカラ切ツテ仕舞フトイフ考ダサウデス、即チ神戸ト兵庫トノ間ヲ突抜ケテ行ケルヤウニシタイトイフノダ之ヲ稱シテ築港ト云フテ居ルノデアアル、ケレドモ湊川ノ爲ニ突出テ居ル所ノ地面ヲ悉ク船着場ニ拵ヘタラ却ツテ宜カラウト思ハレルサウシテ神戸ノ方面モ深ク掘リ兵庫ノ方モ深ク掘ルノデス、サウスレバ如何ニ大キナ船ガ何時デモ着クコトガ出來ル、サウ云フコトニシタラ青泥窪ト競争スルコトガ出來ルダラウト思フ、コトニヨルトソレ以上デアアルカモ知レヌ、然ルニアンナモノヲ切ルヤウナ小サナ計劃デ築港ダナドト云フテ居ルノハ甚グ憫笑ニ堪ヘナイノデアアル。

世界ノ事物ガ總テ大規模ニナリマストイフト今度ハ又富ガ所々ニ出來テ來ル、新富源ノ發見ガ方々ニ出テ來ル新富源ノコトヲ云フテ居ルト限リナク時間ガカカルカラ、其一例ヲ石炭ニ取ツテ申シマスト英國ニ於テハ餘程澤山ノ石炭ヲ採掘シテ世界ニ出シテ居ル、サウスルト亞米利加ニ於テモ所々デ石炭ヲ採掘シテ方々へ持出シテ居ル米國デ石炭ノ出ル所ヲ申シマスト「ペンシルベニヤ」、「バルヂニヤ」、「ジョルジャ」等デ此石炭ハ太西洋ニ於テ大ニ用キテ居リ升他日南北亞米利加ノ間カ切斷サレルト此石炭ガ東洋ニ來ルニ相違ナイ今日東洋ニ於テ用キテ居ル石炭ハ重ニ日本ノ石炭デアアル香港以東ハ日本ノ石炭ガ非常ニ多イノデアアル香港以西ニナルト英國ノ石炭ヲ用キテ居ル、ケレドモ他日亞米利加ノ石炭ガ入り來ツテ日本ノ石炭ト競争ヲ始メルダラウト思フ、支那ノ石炭ヲ申シマスト唐山炭ガ世ノ中ニ現ハレテ居ル唐山炭ハ大規模デ採掘シテ居ルカラ中々澤山出ルケレドモ支那ノ石炭ハ唐山ガ一番トイフ譯デハナイ是ヨリモ未ダ良イ石炭ノ層ガアルソレハ即チ山西省ノ石炭デアリマス、山西省ハ最モ良好ノ石炭ガ出ル所デ殆ンド全省皆石炭層デアルト

云フテ宜イ位デアアル何處カ石炭ガ多イトイフテモ山西省ニ敵フモノハ滅多ニナカラウト思フ、恐ラク世界第一デアアルカモ知レヌ然ルニ今日ニ於テハ山西省ノ石炭ヲ大ニ採掘シテ居ルモノハナイノデアリマス、其他印度ニハ「ベンゴール」ニ石炭層ガアル、滿洲ニ於テハ露西亞ガ採掘シ始メタ烟臺ノ石炭ガアル、又撫順ノ附近ハ非常ニ大キナ石炭層デアルト云フコトデアリマス、斯ノ如ク石炭ヲ大ニ採掘スルトイフノハ皆近世デアアル、十九世紀カラ二十世紀ニ跨ツテ大ニ採掘スルヤウニナツタノデアリマス、其他米ニ致シマシテモ日本デハ勿論米ヲ作ツテ居ル、支那デモ作ツテ居ル、近來亞米利加デモ大ニ米ヲ作ツテ居ル、亞米利加ノ米ハ即チ南ノ方デ作ツテ居ルノデアリマス、米ヲ作ラウトスレバ澤山出來ル、テキサス」デ米ノ出來ルコトハ御承知デアリマセウガ併シナガラ米ハ「テキサス」ニ限ツテ居ルノデハナイ南ノ方ノ墨西哥灣ニ頻シタ所ナラバ作りサヘスレバ幾ラデモ出來ルノデアアル、現在作ツテ居リマス、而カモ日本ノ米ノ種ヲ蒔イテ作ツテ居ル、ア、云フ所デ米ヲ作ルニハ日本ノ米ガ宜イト云テ居ル、何故カトイフニ外國ノ米ハ形ガ長クシテ毀レ易イガ日本ノ米

ハ短イカラ毀レナイ、甚ダ經濟デアルトイフコトデアリマス。
 世界ノ總テノモノガ大規模ニナリマス、ト今度ハ國ノ形モ大キクナルノデアアル、英吉利人ハ濠洲モ取ツテ居リ、加奈陀モ取ツテ居リ、印度モ取ツテ居ル、其他緬甸モ取ツテ居ル、又其他ニモ取ツテ居ル場所ガ澤山アル、佛蘭西人モ矢張り澤山ノ領土ヲ持ツテ居ルノテス、佛蘭西ガ西貢ヲ取ツタノハ一千八百五十九年デアアル、ソレカラ以後東京ナリ安南ナリ「カンボチヤ」ナリ或ハ取り或ハ保護國トシテ居ルノデアアル、獨逸人モ先程申シマシタ通り小亞細亞ノ方ニ段々ニ勢力ヲ及ボシツ、有マスガ又膠洲灣ヲ取ツテ支那ノ方ニニノ勢力ヲ作りツ、アルノデアリマス、又露國ニ至ツテハ侵略主義ヲ以テ有名ナル所デアリマス、スカラ餘程澤山ノ地面ヲ取ツテ居ル、現在西比利亞ヲ取り其他中央亞細亞モ取ツテルノミナラズ支那ノ方ニ大ニ勢力ヲ及ボシツ、アルノデアリマス、露西亞人ハ蒙古ノ橫斷鐵道ヲ造ツテサウシテ北京ノ方ヲ壓迫スル積リデアアル、西比利亞ノ「キヤクタ」カラ蒙古ノ中ノ「クローン」マデ鐵道ヲ布イテ、ソレヲ又張家口マデ延シテソレカラ北京マデ鐵道ヲ作り、蒙古橫斷鐵道ヲ以テ北京ヲ壓迫

スル積リテ前カラサウイフ計劃ニナツテ居ルノデアリマス、蒙古トイフモノハ事實上露國ノ勢力ノ爲ニ非常ニ壓セラレテ居ル、蒙古デ用キラレテ居ル所ノ錢ヲ申シマス、支那ニ近イ方デハ支那ノ錢、日本ノ文久錢又ハ寬永通寶ノヤウナ穴ノ明イタ銅錢ガ使ハレテ居ル、北京デ用キテ居ル所ノ錢ト張家口邊デ用キテ居ル錢トハ違ツテ居ルガ形ハ能ク似テ居ル、又所謂「ヤンチエン」トイフ弗ノ方アレハ支那内地デハ通用スルガ張家口外ハ一文モ通用シナイ、蒙古人モ貨物トシテハ取扱フガ錢トシテハ通用シナイ、併シナガラ「クローン」邊デハ露國ノ貨幣紙幣ガ通用スルソレカラ露西亞人ハ蒙古ニ於テ色々ノ貿易ニ從事シテ居ル、張家口ニ於テモ已ニ一ノ勢力ヲ有シテ居ル、張家口ハ蒙古ト支那内地トノ間デアル、私ハ先年張家口カラ蒙古ニ少シ這入ツタ、其時ノ事柄ヲ申シマス、張家口ヨリチヨツト先ノ方即チ蒙古ノ入口ニ「ユワン、パウ、ジャン」即チ元寶山トイフ所ガアル、其處ニ露西亞ノ會社ガ三ツ位アルソレハ和信、隆昌、^{チヤンシヨウ}昌、^{シヨウ}三ツデ是等ガ露國ノ貨物ヲ取扱ツテ居ル、張家口邊ニハ露國ノ會社ガ澤山アツテ露國ノ勢力ハ實ニ豪イモノデアアル、此勢力ヲ叩キ附ケレバ格別

デアアルガ、サウデナケレバ二三年後ニハ北京ヲ壓迫スル積リニナツテ居ルノデス、又米國ノ方ヲ申シマス、ルト元ハ「モンロー」主義ヲ實行スル積リデアツタガ今日ハ領土擴張主義ヲ取り或ハ布哇ヲ取り或ハ菲律賓ニ手ヲ伸シテ居ル譯デアアル、今後領土擴張主義ヲ取ルヤ否ヤハ別問題デアアルガ、併シナガラ亞米利加ノ富ノ力ヲ以テ今度ハ船ヲ澤山東洋ニ派遣シ、東洋ニ於テ商權ヲ握ルトイフコトニハ無論從事スルニ違ヒナイ、今ハ故人ニナツタガ英吉利ノ「シーレ」ハ斯ウイフコトヲ云フタ、世界ノ大國ハ三ツシカナイ、即チ露國、米國、英國デアアル、露國ト米國ハ盛ニナツテ來ルカラ英吉利人ガ是ニ對抗スルニハ英吉利ノ本國ト領土トノ合併ヲ圖ラナケレバナラストイフノデス、即チ濠洲ヤ加奈陀ヲ英吉利ノ本國ト併セテ一ノ大帝國ヲ造ラナケレバナラスト云ツテ居ル、殖民地デモナケレバ保護國デモナイ皆一ノ帝國トシナケレバナラストイフノデアリマス、ソレヲ一ノ帝國トイフノハ可笑シイヤウニ聞エルガ併シナガラ今日ニ於テハ決シテ可笑シクナイ昔羅馬ノ領土ハ非常ニ大キナモノデアツテ西カラ東マデ行クニハ餘程澤山ノ日數ヲ費シタガ、今日英吉利カラ濠洲

へ行カウガ加奈陀へ行カウガサウ多クノ日數ハ要シマセヌ昔コソ太西洋ヤ
 太平洋ハエライモノデアツタガ今日ハアンナ所ハ小サナモノデ至ル所溝ノ
 ヤウナモノデアルトイフ如ク世界ガ變ツタノデアリマスカラ今云フタヤウ
 ニ英國ト其領土殖民地トヲ合併シテ一大帝國ヲ造ラナケレバナラストイフ
 説ガアル其説ガ果シテ好イカ悪イカハ別問題トシテ兎ニ角世界ニ於テ國ガ
 小サイノハ不便デアルカラ國ヲ大キクシナケレバナラス大キクシナイ國ハ
 損デアル世界ハ廣イカラ固ヨリ非常ナ例外モアル例ヘバ佛蘭西ト西班牙ト
 ノ間ニ「アンドラ」トイフ國ガアル「アンドラ」ノ人口ハ先ヅ六七千位シカナイ此
 静岡ノ人口ガ五万ダトイヒマスカラ其七分ノ一位ノ所デアルソレガ獨立國
 ト稱シテ居ルノデアリマスサウ云フモノハ固ヨリ例外デ世界ノ寄生虫ミタ
 ヤウナモノデアリマス併シナガラ世界ノ大勢ヲ申シマスルト皆國ガ大キク
 ナリツ、アルノデアリマス。
 而シテ國ノ競争場ヲ申シマスルト太平洋ガ競争場トナルノデス昔ノ歐羅巴人
 ハ地中海ヲ以テ競争場トシテ居タガ亞米利加ヲ發見シテカラ後ハ太西洋ヲ

以テ競争場トシテ居リマシタ今後ノ競争場ハ何處カト申シマスルト此太平
 洋デアリマス實ニ此太平洋ハ英吉利人モ來リ獨逸人モ來リ亞米利加人モ來
 リ日本人モ亦交ツテ大ニ競争ヲヤラウトイフ所デアル此日本ノ地勢ヲ申シ
 マスト此太平洋ヲ睥睨シテ立ツテ居ルノデアルカラ日本人ガ奮發シタナラ
 バ其他ノ國ヲ壓倒スルノハ容易デアルト思ヒマス故ニ日本ノ運命ヲ申シマ
 スルト將來望ガ多イト云ハナケレバナラス且又日本ノ人口増加ノ割合ヲ見
 ルニ非常ニ早ク増加スル明治二十四年ニハ日本ノ人口ハ二十六万増加シタ
 二十五年ニナルト壹年ノ間ニ三十七万増加シタサウシテ二十六年ニナルト
 少シ減リマシタガ二十九万ダケ増加シテ居ルソレカラ十年バカリ經ツテ明
 治三十四年ニナルト日本ノ人口ハ一年ニ六十二万増加シタ三十五年ニナル
 ト五十八万増加シテ居ル三十六年ニハ七十一万ノ増加トイフノデアリマス
 日本ノ人口ガ年ニ五十万増加スルトイフコトハ數年前ノ話デ今日ニ於テハ
 六十万以上増加シテ居ルノデアリマス日本ハ位置ガ好ク又人口ハ益増加ス
 ルノデアリマス斯ノ如ク人口ノ増加スル國ハ餘リナイノデ露國モ人口ガ非

常ニ増加スル、獨逸モ人口ガ非常ニ増加シテ日本ヨリハ一層上デアリマシタガ、今日デハサウデナイ大抵似タモノデアリマス、要スルニ東洋ニ於テハ日本ヨリ外ニ他ニ望ヲ屬スル所ノ國ハ無イ白色人種ノ全體ニ付テ見マスルト十九世紀ノ始メニハ白色人種ガ一億七千万アツタソレガ、二十世紀ノ始メ即チ先達テアル、其數ガ五億アル、ナポレオン時代ニハ一億七千万シカナイソレガ今ハ五億トナツタ、二十一世紀ニハ二十億位ニハナルダラウトイフコトデアル、白色人種モ中々増加スルガ、併シナガラソレト對抗シ得ルモノハ東洋ニ於テハ日本人デアルト思フノデアリマス、ダカラシテ日本人ハ大ニ覺悟ヲ定メテ置カナケレバナラヌト思フ。

斯ノ如キ次第ダカラ日本ニ於テハ小サイコトバカリ考ヘテ居ツテハイケナイノデス、世界ノ競争場裡ニ立ツテ世界ヲ併呑スル位ノ考デナケレバナラヌ、侵略主義モ行ハナケレバナラヌト思フノデアル、侵略主義ト申スト言葉ガ甚ダ悪イノデアレハ帝國主義トイフ字ヲ用キテ居ル、所ガ帝國主義トイフノハ歐羅巴ノ翻譯デアツテ實ハ誤譯デアル、原語ハ「ナシヨナル、インベリヤリズム」

是ハ拉甸語ノ「インベリユム」即チ權力トイフ所カラ來テ居ル、「ナシヨナル、インベリヤリズム」トイフ言葉ハ國權主義デアル、國權擴張主義デアリマス、ケレドモ誤譯ノ帝國主義トイフ言葉ガ日本デハ能ク分ツテ居ルカラ帝國主義デモ宜シイ、其帝國主義ヲ日本デモ實行シナケレバナラヌノデアリマス、獨逸人ノ用キテ居ル言葉ノ「ヅエルト、ポリチーク」即チ世界政策デアル、ソレヲ大ニ行ハナケレバナラヌ、サウイフコトヲスルニハ大ニ富ヲ作ツテ行カナケレバナラヌ、殖産興業固ヨリ必要デアリマス、必要テアルト共ニ殖産興業ニ適當スル人物ヲ作ルコトガ教育家ノ大ニ注目シナケレバナラヌ點ト考ヘテ居ル。

其殖産興業ニ從事スルニ就テモ帝國主義ガ必要デアリマス、小サナ國デハ如何ニ巧ミニ廉イ品物ヲ澤山拵ヘマシテモ其品物が世界ニ出ルトイフ譯ニハ行カナイノデス、總テ廉イ良イ品物ヲ拵ヘタナラバ、必ラズ世界ニ向ツテ供給スルコトガ出來ルダラウト思フガ、其實ハ決シテサウデナイ、ナゼナラバ今日ハ所々ノ國デ大分關稅ヲ重クスル傾ガアル、ソレデ品物ヲ廉ク造ツタカラトテソレガ世界ニ廣マルトイフ譯ニハ行カヌ、私ガ浦鹽斯德ヘ行キマシタ時ニ

日本ノ麥酒ヲ見ルト先ヅ八十錢カラ一圓位デアアル、露國ノ領土滿洲ニ接シテ居ル所デモウ其通りデアアル、日本ノ麥酒ノミナラズ諸外國ノ麥酒モ非常ニ高イ、ナセナラバ露國ノ關稅ガ非常ニ高ク麥酒一本ニ付テ先ヅ日本ノ三十錢位關稅ガカ、ル日本デ麥酒ヲ拵ヘルニハサウ高クハカ、ラナイ、一本買ツテモ三十錢以下デアアルガ、向フデハ關稅ガ高イ上ニ運賃モカ、ル商人モ儲ケナケレバナラス、ソレデ一本ノ價ガ八十錢カラ壹圓ニ上ル譯デアリマス、故ニ日本デ品物ヲ廉ク拵ヘルバ必ズ、露西亞ノ領土ニ澤山行クトイフノハ間違ヒデア、ル、稅ガ非常ニカ、ルカラ仕末ニ行カスノデアリマス、英吉利ノ「チエンバーレン」ハ近頃關稅同盟トイフコトヲ唱へ出シタ、關稅同盟トイフノハ本國ト領土ノ關稅同盟デ即チ英吉利ノ本國カラ殖民地へ行ク品物ニハ稅ヲ課セナイ、又殖民地カラ本國へ來ル物品ニモ稅ヲ課セナイ、併シナガラ外國カラ這入ル物品ニハ大ニ稅ヲ課シタラ宜カラウト云ツテ居ル、サウ云フ工合ニ本國ト殖民地トノ關稅同盟ヲ作り英吉利ノ品物ヲ外へ出サウト思へハ他國カラ重イ稅ヲ課セラレルカラ其竹筵返シヲシナケレバ英吉利ノ富ハ減ズルトイフコト

ヲ云フテ居ル、「チエンバーレン」ノ說ノ果シテ善イカ惡イカトイフコトハ別問題デアリマスガ、兎ニ角日本ガ今マデノ領土ヲ以テ只品物ヲ巧ミニ且ツ廉ク拵ヘルバ其品物が世界ニ廣マルト考ヘルノハ大ナル間違ヒデアリマス、出來ルダケ日本ノ領土ヲ擴張シテ行カナケレバ都合ガ宜シクナイ、今滿洲ヤ西比利亞地方デ日本ノ麥酒ガ一本八十錢壹圓トイツテモ、滿洲ヤ西比利亞ヲ日本ノ領土トシテ仕舞ツタラ高イ關稅モ取ラレナイデハアリマセンカ、ダカラ我輩ノ考デハ日本ノ富ヲ増進スルニハ方々ノ國ヲ侵略シテ行カナケレバナラスト思フノデアリマス

ソレカラ今度ノ日露戰爭ニ於テ日本ハ大ニ勝ツタノデアアルカラ此序ニ滿洲ナドハ固ヨリ日本ノ領土トシテ宜イ、支那ニ還附スルトイフノハ名義上デ名義ハ還附ニシテ置イテ實ハ日本ニ取ラナケレバナラスノデス、サウシテ日本ガ自カラ農業モ遣レバ漁業モヤル裁判モ亦サウデアアル、靜岡ニ居レル裁判官ガ滿洲ニ於テ裁判權ヲ執ツ、テ見ルモ面白イト思ヒマス、漁業家デモ同ジコトデ好キナ漁業ヲ遣ル、立法モ何モ支那ニハ餘リ頓着セズ日本人ガ滿洲ニ適當

ナ法律ヲ作ツタガ宜イ、サウシテ滿洲ヲ支那ニ還ストイツテモ其實ハ日本ニ取ツテ仕舞フノデアアル、アンナ所へ法理ヲ擔ギ出ス人モアルガ兎ニ角日本ノ權力ヲ押ヘテ仕舞ヘバ日本ガ勝ツタノデアアルカラ勝テバ官軍デ何デモヤレル、ソレカラ西比利亞モサウデアアル、矢張り「バイガル」以東ハ早く取ツテ仕舞ハネバ損デアアル「バイガル」以東ノ如キハ未ダ大キクナイ世界併呑ノ考デアレバ「バイガル」以東位ハ何分ノ一ニナルカ兎ニ角小サイモノデアリ升、ケレトモソレモ取ツテ置カナケレバ他日取ルノハ不便デアルカラ此際遣ルノガ適當デアリマス、日本人ガ口ヲ開クト早く和睦ニナレバ宜イ、平和ニ早クナラナケレバ困ルト云ツテ居ルガ早く平和ニナツテハ「バイガル」以東ガ取ラレヌデハアリマセスカ、日本ノ兵ヲ「ハルビン」マデ進メテ置イテソウシテアノ所ニ持久ノ策ヲヤル、滿州モ日本ノ領土ト同ジャウニシテ持久ノ策ヲ遣ツタナラバ露國モ遂ニ屈シテ「バイカル」以東ハ悉ク取ルコトガ出來ル、サウナルト「オコツク」海ノ漁業モ日本ノ好キナ通リニ漁業ヲ遣ツテ年ニ三千萬ヤ四千萬ハ利益ガアル、又「バイガル」以東ニアル金鑛ヲ申シマスト金鑛ハ所々ニアル「アムグ」ニノ

金鑛「ゼーヤ」ノ金鑛、或ハ「チタ」ノ近傍ニモ金鑛ガアル、是等ガ日本人ノ手ニ這入レバ年ニ二千萬圓ヤ三千万圓位ハ今デモ取レル日本デハ金貨本位ヲ實行スルニ朝鮮ノ金鑛ヲ當テニシテ居ルガ、朝鮮ノ金鑛ハ年ニ僅ニ三百萬圓位シカ出ナイ、密輸出マデ合セレバ五百萬圓位ニハナルカモ知レヌトイフテ居ル、三百萬ヤ五百萬ノ朝鮮ノ金鑛ヲ當テニシテ金貨本位ヲ實行スルナドハ大ニ間違ツテ居ル日本デ金貨本位ヲ實行スルナラバ西比利亞ノ金鑛位ヲ當テニシテカ、ラナケレバナラヌ、ソレカラ防備ノ點カラ云ツテモ「バイカル」ヲ取ルノガ非常ニ都合ガ宜イデス、「バイカル」湖ハ北カラ南ニ長イカラ露西亞ノ兵ハ北ニ廻ツテ東ニ來ル譯ニハイカヌ、露西亞人ガ西比利亞ヲ侵略シタ時ハ北ヲ迂回シテ來タ「モアル」ガ日本ト戰爭スルニハ南ヲ通ラチバ都合ガ惡イ、所ガ南ノ方ハ道ガ狭イノデス、ダカラアノ所へ幾ラカ日本ノ兵ヲ置イタナラバ露西亞ヲ防グノハ譯ノナイ「デアアル」斯ノ如ク防備ノ點カラモ「バイカル」ヲ取ルノハ都合ガ宜イ、尙ホ東西比利亞ノミニ満足スル「ハ出來ナイ、他日マタ西ノ方へ行カナケレバナラヌ」デアリマス、早く戰爭ガ濟メバ宜イ滿州ヤ西比利亞

ハ取ラナクテモ宜イ、先ツ樺太位デ宜カラウナドト云フモノモアルカ、樺太ノヤウナチツボケナモノガ何デアルカ、バイカル¹以東ヲ悉ク取ルトイフナラ樺太ハ熨斗ノヤウナモノデアアル、樺太ハ形ガ長ク恰モ熨斗ノヤウデアアル日本ガ領土ヲ取ラウトイフニハ日露戦争ガ幸ニ起ツタカラ、此際大ニ侵略主義ヲ遣ツタラ宜カラウト思フノデアリマス、且又只今申シマシタ通り滿州ノ地勢ハ非常ニ便利デアアル、滿州ヲ取レバ朝鮮ヲ治メルニモ至ツテ易イノデアリマス、滿州ガ何處ノ領土デアツテモ朝鮮ハ屢々侵略ヲ蒙ツテ居ル人民デアアルカラ、滿州ガ外國人ノ手ニアル以上ハ朝鮮ヲ治メルノハ不便デアアル、日本人ハドウシテモ滿州ヲ押ヘテ居ラナケレバイカスノデス、滿州ヲ取ツテ仕舞ヘバ朝鮮ヲ治メルノハ容易デアアル今度愈々「バイカル」以西ニ進撃スルトイフ時ニハ滿州ガ策源地トナラナケレバナラスノミナラズ、滿州ハ支那ノ直隸省ノ隣デアアルカラ支那人ガ愚圖々々云ヘバ直隸省モ取ル、直隸省ヲ取レバ支那ハ瓦解シテ仕舞ヒ都合好クバ直隸ニ入レタ兵ヲ以テ支那全體併吞スル形勢ニナツテ來ル、決シテ可笑シイ議論デハアリマセス、若シモ日本ノ力が足り、ナクツテ南

清ヲ取ル¹ガ出來ナカツタナラバ南清ハ聯邦トシテ置イテモ宜シイ、日本ガ直隸省ヲ取ツタラ之ヲ以テ其聯邦ニ加入スル、日本ノ本國ヲ以テ加入スルノハ損デアアルガ直隸省ヲ以テ加入スルノハ差支ナイ、サウシテ支那ヲ押ヘタ以上ハ支那人ヲ以テ滿州其他ノ兵隊トスル¹ガ出來ル、其上ハ日本人ノ好キナ通りニ出來ルノデアリマス。

一體支那トイフ國ハ取ツテ治メ易イカドウデアアルカト申シマスト外國人が治メタ所デ一向差支ナイ所テス、支那ノ歴史ヲ見ルト分ル、支那ノ西晋ノ末ニ至ツテ劉淵ガ興ツテ漢ト稱シテ帝位ニ就イタ、劉淵ハ匈奴ノ子孫デアリマス、サウシテ山西省ナドヲ能ク治メテ居ル其次ニハ東晋ノ始メニ劉曜ガ前趙ヲ興シ石勒ハ後趙ヲ興シテ帝ト稱シタ、コノ劉曜、石勒ハ匈奴ノ仲間デアリマス、斯ノ如ク匈奴ガ支那ノ民ヲ能ク治メテ居ル、其他西晋ノ末カラ東晋ノ始メニ跨リ鮮卑ノ慕容氏、拓跋氏等ガ支那ニ侵入シテ居ル、サウシテ拓跋氏ハ他日支那ノ北部ヲ悉ク治メテ居ル、即チ拓跋氏ハ燕ノ西ノ代及ビ代ノ北方ニ割據シテ蒙古地方ヲ征服シ、東ハ濊貊ヨリ西ハ破落那¹ニ及ビ南陰山ヲ距ヘ北ハ沙漠

ヲ盡シテ率ネ皆歸服シタ、其國號ヲ魏ト改メテ非常ニ盛ンデアツタ、所謂拓跋魏デ其盛ンナ時ハ江北ノ諸州ハ悉ク是ニ屬シマシタ、此時支那ハ南北ニ分レ江南ハ南朝デ江北ハ北朝デアル其他滿州及ビ蒙古、西藏地方カラ支那ニ侵入シテ支那人ヲ治メタ者ハ尠クナイ、即チ五代ノ時ノ契丹ノ阿保機ガ遼ノ國ヲ興シテアル、ソレカラ北宋ノ徽宗ノ時ニ女眞ノ阿骨打ハ金ノ國ヲ興シテ居ル、是等ハ皆支那ノ一部分ヲ治メタモノデアリマス、元モ亦支那ニ侵入シテ支那ヲ取ツテ居ルトイフ譯デアル、今ノ清朝ニ致シマシテモ其通リデ滿州ノ方カテ興ツテ支那ヲ取ツテ居ルノデアル、ア、云フノハ支那民族デナク通古斯民族デアリマス、斯ノ如ク支那民族デ無クテモ旨ク支那ヲ治メタ例ハ澤山アルノデス、支那人ヲ治メル途ハ或ル程度マデハ支那人ニ同化サレテ、支那人ノ所謂王者ノ政ヲヤレバ支那人ハ満足スルノデス、ダカラ日本ガ滿州カラ直隸省ヲ取ツテモ之ヲ治メルニハ一向差支ナイノデス。

要スルニ日本人ハ成ルタケ侵略主義ヲ取ツタラ宜カラウ、即チ領土ヲ擴張シタラ宜カラウト思フノデアリマス、ダカラ教育ノ方針ヲ論ズルニ就テモ此點

ニ着目シナケレバナラス、是ガ何處マデモ諸君ニ御話シナケレバナラス點デアツテ、日本人ハ今後大ニ侵略主義ヲ取ラナケレバナラス國民ノ膨脹ヲ圖ラナケレバナラス、ソレヲ忘レテ貰ツテハ困ル、國民ノ膨脹ヲ圖ルニ就テハ殖産興業モ益大規模デヤツテ行カナケレバナラス、大規模ノ事業ニ従事スルニハ會社ヲ起スノモ必要デアル、會社ナドヲ澤山起シテ資本ヲ集メテ仕事ヲシヤウトイフ時ニハ所謂公德ヲ重ンズルヤウニナラナケバナラス、私利ヲ圖ツテ會社ノ損ヲ顧ミストイフヤウデハ大國民トナルコトハ出來マセヌ、會社ノ利益ヲ圖リ公德ヲ重ンジテ行カナケレバナラス、ソレカラ大規模ノ商工業ニ従事シヤウトイフコトナラ矢張り海外ニ目ヲ放タナケレバナラス、海外ニ着目シナケレバナラス、幸ニ静岡縣ハ物産ガ大抵輸出向ノヤウデアリマス、静岡人シガ海外ニ着目セラレテ居ルトイフコトハ大ニ満足スベキ状態デアリマス、更ニ一層静岡ヨリ澤山ニ殖民ヲ送ツタ方ガ宜カラウト思ヒマス、日本人デアツテ所々ニ殖民スルモノヲ申シマスルト先ヅ山口縣、廣島縣、和歌山縣等ガ海

外ニ澤山行ツテ居ル、静岡縣モ多イ方デアリマスガ尙ホ今後益奮勵シテ諸國ニ移民スルヤウニシタラ宜カラウト思ヒマス。

又教育制度ヲ設クルニシテモサウデアアル、日本ノ中流社會ヲ改造シナケレバナラヌ、中流社會ヲ改造スルニハ中學教育ニ餘程重キヲ置カナケレバナラヌ、今日ノ日本ノ中學ヲ見ルト是ハ即チ高イ學校へ這入ル階梯ノヤウナ姿ニナツテ居ル、文部省ニ向ツテ中學ノコトヲ論ズルト決シテソレヲ階梯ニスル積リデハナイト誰デモ答ヘル、ケレドモ其實中學校ハ高イ學校ノ階梯ノ姿ニナツテ居ル、殊ニ大學ノ階梯ノヤウニナツテ居ル、アノ中學ノ善イ惡イヲ論ズルニハアノ中學カラ高等學校へ何人這入ツタトイフヤウナコトヲ標準トシテ居リマスソレハ標準ガマルデ間違ツテ居ル中學ハ中流社會ヲ改造スルノガ目的デアアル、中學ヲ高等學校ヤ大學ノ階梯トスルトイフコトハイカヌ、中學其モノハ別ニ目的ヲ有ツテ居ルノデアアル、日本ノ中流社會ヲ改造スルニハ唯今申シマシタ通り侵略主義ヲ執リ、從テ大規模ノ商工業ニ從事スルトイフコトデアアルナラバ實用的人物ヲ作ルコトヲ目的トシナケレバナラヌ、今ノ中學ヲ卒業シ

テ世ノ中ニ出テ殖産興業ニ從事スルニ便利カト申スト決シテ便利テハナイ、中學ヲ卒業シテ産ヲ破ツタモノハ澤山アルガウシテ中學ヲ拵ヘタ所テ役ニ立タヌ、成ルベク實用的ノモノヲ澤山作ラナケレバナラヌ、今ノ中學ヲ教ヘテ居ル代數ナドハ多クハ實用ニナラヌノデアリマス、總テ今日ノ中學ノ教ヘ方ガ惡イト思フ。

ソレカラモ一ツ日本ヲシテ大國民タラシムニハ大人物ヲ澤山作ラナケレバナラヌ、大人物ノ缺乏シテ居ルコトハ今日ノ通弊デアアル、日本ニ大人物ヲ拵ヘルニハ教育ノ力デ出來ルカト疑フ人モアルガ、私ハ出來ル考デアアル、成ルベク日本國民ヲ元氣旺盛ニスル、積極的人物ヲ作ルヤウニスル活動的人物ヲ作ル積リデ遣ツタナラバ其中ニ大人物ガ自カラ出來ルノデアリマス、今ノ大學ノ制度ナドハ大人物ヲ作ルニハ餘程惡イ、學年制度ヲ設ケテサウシテ一年ヲ卒業スレバ二年、ソレカラ三年四年ト段々刻ンテ遣ツテ居ル、ソレダカラ人ハ試験バカリニ注目シテ居ル、ソナコトデアハ大人物ヲ作ルコトハ出來マセヌ私ノ考デアハ學年制度ハ悉ク廢シタ方ガ宜カラウト思フ、勉強シタイ人間ハ飽ク迄勉強

シ遊ビタイ者ハ遊ブト云フヤウニ自由ニシテ置ケバ積極ノ人物ハ勉強シテ上ニ行キ消極ノ人物ハ後ニ殘ルトイフコニナル、人ノ助ケヲ籍ラナケレバナラヌヤウナ人物ハ下ル方ガ宜イノデアリマス、積極ノ人物ノミガ上ツテ仕事ヲスレバ元氣旺盛ニナツテ大キナ人物ガ澤山出來ル、今ノ弊ハ消極ノ人間マテ助ケラレテ上ニ出ルトイフコデアルト思フ、併シナガラ今後ノ日本ハ大ニ活動シナケレバナラス、元氣旺盛テナケレバナラス、ダカラ私ハ中學制度大學制度等ニ就テハ最モ古イ時代カラ文部當局者ニ向ツテ話シテ見タガ可愛想ナコニハソレガ分ラヌノデス、私ハ諸君ニ向ツテ能ク言フテ置クノテアル、ドウカサウ云フ次第テアルカラ今後日本ノ教育制度ヲ改造シ、實業ヲ盛ニシ其規模ヲ大ニシテ貰イタイト思フノデアリマス。

私ガ態々東京カラ静岡ニ出テ參リマスニ就テハ其事ヲ重ニ申ス積リテアツタ、少シ政談ニ亘ツタコモアリマスガソレハ二十世紀ノ趨勢ヲ論ズルニ就テ必要デアツタカラテゴザイマス、要スルニ斯ノ如キ趨勢デアルカラ唯今申シタヤウナ方針ヲ探ツテ教育制度ヲ改良シタイト云フ趣旨デゴザイマスカラ

永ク御記憶アラシコトヲ望ムノテゴザイマス(拍手大喝采)

此日理學博士坪井正五郎氏モ演説ス静岡ニ於テ面會シタル人物ハ同縣知事龜井英三郎氏、及事務官戸田恒太郎、丸山熊男、末松偕一郎ノ三氏、前代議士同縣教育會長星野鐵太郎氏、静岡市長長島弘裕氏、安倍郡長小川省治郎氏、農學校長細田多次郎氏、師範學校長角谷源之助氏、及小田切協三、村井二郎吉、阿部龜彦、横田俊夫、榛澤彦三郎、手塚彦太郎、國枝鎌三、石山逸八、中田驥郎、伴野秀堅、井上豊作、遠田清、橋瓜誠義、狩野辰男、北村誠太郎、市川啓三郎、國井輝三郎等ノ諸氏ニシテ余ハ坪井氏ト共ニ十四日歸京ノ途ニ就ク

第二節 講和當時ノ大勢、著者ノ休職

此ノ時ニ當リ講和將サニ政府部内一部分ノ人ノ爲メ計畫セラレンスルノ報頻々トシテ耳朶ニ達シタルニ由リ二十三日渡邊子爵及渡邊千冬、寺尾、金井、松浦、藏原、岡田、建部、中村ノ諸氏ト共ニ南佐莊ニ會シ戰爭持久策ノ宣言ニ關シ決議スル所アリ但渡邊子爵ハ此決議ニ加ハリタルニアラス吾輩ノ決議ハ二十六月日ノ諸新聞ニ見ユ即チ左ノ如シ

○戰局持久ニ關スル決議

七博士運動以來時局ニ關スル問題ヲ熱心ニ講究シテ國家百年ノ大計ヲ畫セントシツ、博士學士並ニ其他二三ノ同志ノ士ニシテ組織シタル某會ニ於テ一昨日寺尾亨、戸水寛人、金井延、岡田朝太郎、建部遜吾、中村進午、渡邊千冬ノ諸氏大要左ノ如キ決議ヲ爲シ尙今後ニ於テモ屢々會合ヲ重テ詳細ノ研究ヲ繼續スト云フ

第一 我國ニ向ヒ速ニ戰局ヲ結ブ可シトノ忠言ヲ爲スモノアルモ斷然之ヲ

選者曰決議第二
項戰局ノ持久ニ
ヨリテ多クノ問
題ニ實地ノ解釋
ヲ與フルノ利アリ
ナリ國民ハ既ニ持久戰ノ已ムベカラザルヲ自覺スルニ至リタレバ當局者
ニシテ若シ些細ナル情實ニ制セラレテ媾和ヲ苟クモスルガ如キノ希望ヲ
懷クノ傾アラバ我等一同ハ輿論ノ貫徹ニ必要ナル行動ヲ採ルベシ
第四 堅忍持久ニ必要ナルモノ、二ハ財力ナリ開戰後十ヶ月ノ日子ヲ閱シ
テ内債數億ヲ募リ餘剩尙ホ豊富ナリ外債既ニ幾億ヲ得テ其ノ將來ニ於ケ
ル應募甚ダ有望ナリ有史以來空前ノ大兵ヲ動カシテ而モ生産力ノ能ク我
武力ニ應ズルモノアルハ我等ノ確認スル所ナリ
第五 外來ノ事ニ至リテハ敵國以外ノ國家ト和親ヲ重ンズルコト論ヲ俟タ
ズト雖モ若シ陰ニ陽ニ敵國ヲ幫助シ戰局ヲ擴大シ世界ノ秩序ヲ攪亂スル
モノアラバ我等幾タビカ之ニ警戒ヲ加ヘテ尙ホ且反省ノ實ヲ舉ゲザルノ

排スルヲ要ス

第二 戰局持久スルトキハ初メテ開戰ノ目的ヲ貫徹スルコトヲ得ルノミナラズ之ニ依テ多クノ問題ニ實地ノ解釋ヲ與フルノ利アリ

第三 堅忍持久ニ最モ必要ナルモノ、一ハ國民ノ決心ト政府ノ不屈心ト是ナリ國民ハ既ニ持久戰ノ已ムベカラザルヲ自覺スルニ至リタレバ當局者ニシテ若シ些細ナル情實ニ制セラレテ媾和ヲ苟クモスルガ如キノ希望ヲ懷クノ傾アラバ我等一同ハ輿論ノ貫徹ニ必要ナル行動ヲ採ルベシ

第四 堅忍持久ニ必要ナルモノ、二ハ財力ナリ開戰後十ヶ月ノ日子ヲ閱シテ内債數億ヲ募リ餘剩尙ホ豊富ナリ外債既ニ幾億ヲ得テ其ノ將來ニ於ケル應募甚ダ有望ナリ有史以來空前ノ大兵ヲ動カシテ而モ生産力ノ能ク我武力ニ應ズルモノアルハ我等ノ確認スル所ナリ

第五 外來ノ事ニ至リテハ敵國以外ノ國家ト和親ヲ重ンズルコト論ヲ俟タズト雖モ若シ陰ニ陽ニ敵國ヲ幫助シ戰局ヲ擴大シ世界ノ秩序ヲ攪亂スルモノアラバ我等幾タビカ之ニ警戒ヲ加ヘテ尙ホ且反省ノ實ヲ舉ゲザルノ

曉ニ於テハ之ニ向ヒ敵ノ與國タルノ待遇ヲ敢テスルノ已ムヲ得ザルヲ主張ス信賴スベキ同盟國ノ好意ニ訴ヘ其共同ノ働キヲ受クルニ努ムベキハ固ヨリ論ヲ俟タズ

此ノ決議ニ關シ寺尾氏ハ電報新聞記者ニ語リテ曰ク

○寺尾博士ノ談

今度ノ七博士決議一件デスガ之ハ今更ラ始マツタ問題デハナイノデ夫ノ奉天役ノ前後カラ既ニ之ヲ主張シツツアツタノダガ戰局持久ノ必要ト云フコトニ就テハ既ニ國民一般ニ承知セル所デアツタカラ我々モ特ニ決議シテ輿論ノ喚起ヲ促スト云フ必要モナカツタ。

然ルニ近頃ニ至ツテ露探ノ所爲カ何ダカ知ラヌガ思モ寄ラヌ風説ヲ立テル者ガアルヤウデアルカラ我等モ沈黙シテ居ル譯ニ行カヌノデ特ニ爰ニ決議シテ堅忍持久ノ輿論ヲ承認的ニ發表スルトイフ必要ニ迫ツタノデアル。固ヨリ我々一個人ノ意見ヲ云ハシムレバ單ニ決議文ニ現ハレタ位ニハ止マ

ラスノダガ其大體ニ於テ一致セシムル必要ガアツタカラ決議文ハ我々ノ意見ヨリモ餘程穩カニナツテ居ル。

既ニ大體ニ於テ我輩ノ意見ハ決議文ニ一致デアルガ個々名々ノ詳細ナ意見ハ之カラ述ベルノダ否我輩ハ既ニ業ニ地方ニ於テハ之ヲ述ベツ、アツタノダガ尙ホ旺ンニ之ヲ主張スルノ必要ガアルノダ。

單ニ之ヲ主張スル丈ケテハナイ堅忍持久トイフコトニ就テハ充分我國力其他ノ點ニ就テ調査スルノ必要モアルカラ我等ハ其等ニ就テモ着々從事シテ居ルカラ之カラ先キニ至ツテ詳細ナ説明ヲ施スコトモ出來ルヤウニナルデアラウ。

然リ出來ルヤウニナルデアラウガ其大體ノ歸結ハ既ニ今日ニ於テモ定マツテ居ルノダソハ決シテ悲觀的デハナク大々的樂觀的デアアル即チ我國力ハ之カラ先數年ノ間戰爭ヲ打續ケテモ大丈夫維持ガ出來ルトイフ結論ダ。

我輩ガ財政論ヲヤルノハ金井君ノ範域ヲ犯スヤウダガ併シ亦我輩ハ我輩ノ財政意見モアル即チ大々的借金政策ヲ以テ飽マデヤルノダ見ヨ世界ノ列國

中、我國ホド借金ノ尠ナイ國ガ何處ニアルカ、之ト云フノモ從來大キナ國難ガナカツタカラデアツタラウガ、今度ハ愈々大々的借金ヲスル必要ニ迫ツテ來タノダ。

ナニ!! 大キナ借金ヲ怎シテ返済スルカト、凡ソ我國力デ三十億、四十億ノ公債ガ返ヘセヌ道理ガアラウカ、萬一其ガ返ヘセヌ場合ニハ、不動産ヲ賣却シテモ借リル必要ガアルノダ、若シ今ノ場合、碌々マ借金モセズ、姑息ナ平和ヲヤツテ見ロ、賣却ハ愚カ、我領土ハタゞ奪ラレテ仕舞フ運命トナルノダ、況ヤ萬々不動産賣却ノ必要ナキニ於テハ、我ハ飽マデ持久シテ戰爭ノ目的ヲ貫徹セヌケレバナラヌヂヤナイカ。

之ヲ小サナ事業ヲ起ス場合ニ就テ考ヘテモ見ヨ、社債ナリ其他ノ名目ヲ以テ借入金ヲ運轉スルトイフコトハ必ラズ必要ナシ、況ンヤ國家的の大事業ヲ起ス場合ニ於テ、三十億、四十億ノ借金ニ辟易スルヤウデ、怎シテ大戰爭ガ出來ヤウカ、今ノ時ハ他日ノ大生産ノ爲メニ、大資本ヲ投ジツ、アルノ時期ヂヤ。此振古未曾有ノ大切ナ時機ニ於テ、兎角膽ツ玉ノ小サナ元老輩ガ出シヤ張ツ

テ、彼是ト當局ヲ掣肘スルヤウナ傾キアルハ甚ダ不都合極マル話ダ、ナシトシテ、民後援會デ鼻糞程ノ義捐金ヲ集メタカラトテ、一カドノ大金ヲ拵ヘタヤウナ顔ヲシテ居ル元老輩ニ何ガ出來ヤウ、國家千年ノ大計、今日ニ於テ定マル、政府タルモノ、國民タル者、断々乎トシテ飽マデ持久戰ヲ行フノ悟覺ガナクテハナラヌノダ云々。

余モ亦同記者ニ語リテ曰ク

○ 戸水博士ノ談

何ダカ妙ナ所カラ平和風ヲ吹カスヤウヂヤアリマセンカ、尤モ今ノ米國大統領ハ霸氣滿々タル人デスカラ、何かノ機會ヲ捕ヘテ功名シヤウ位ナコトハ思ツテルデシウ。

ガ併シ、別ニ「ルーズベルト」氏ガ平和忠告ヲ試タトイフノデハアリマセン、只何トナクソコイラ危險ナ風説ガアルモノデスカラ我々平生ノ主張ヲ今度決議文ニシテ發表シタ譯ナシテス。

戰爭終局ノ目的之ヲ哲學的ニ解釋スレバ可ナリ六ヶ敷コト、ナルデシヤウガ、兎ニ角今度ノ戰爭ニ就キマシテハ少ナクトモ哈爾賓ヲ占領シテ浦鹽ノ背面ヲ陥イレ波羅的艦隊ヲ打壞シテ海上ノ平穩ヲ復舊セシムルト云フ事丈ハ是非共必要ノコトデス

固ヨリ之丈デ露西亞ガ屈服スルカ怎カト云フコトハ疑問デスガ、先ヅ爰迄ヤツテ置ケル地勢上、滿洲及ビ西伯利亞沿海洲ハ我勢力ノ下ニ屬スルコト、ナルノデス。

蓋シ哈爾賓以北ニ於テハ露軍如何ニ勇猛ナルモ長ク大軍ヲ集中セシムルニ適スル土地ガナイデス、又哈爾賓ヲ占領スレバ浦鹽モ勢屈服セザル譯ニハ行キマセン、ソレトモ尙ホ頑強ニ抗拒シタナラ、旅順ノ如クニヤツ、ケテ仕舞フノデス。

我軍ニシテ爰迄進メバ、露軍ノ勢力殆ンド「ゼロ」トナリマスカラ、我軍事費ノ上ニ於テモ、餘程經濟ガ樂ニナツテ來ルニ相違ナイデス而シテ滿洲ヤ西伯利亞ヘハ戰時中デモ宜イカラ旺ンニ行商人ヲ容レテ平和的ノ經營ヲモセシムル

コト、ナレバ假令露西亞ガ屈服セズトモ我國ハ其ニ頓着セズ、平氣デ堅忍持久、モ出來ルヤウニナルデアラウト思ハレマス。

之ヲ要スルニ、露西亞ノ東方經營ヲ根本的ニ打壞シテ、十年、二十年ヲ經ルト雖モ、最早我國ニ對シテ復讐ノ出來ナイヤウニスルマデハ戰爭ノ目的ハ達セラレタトハ云ハレマセン。

若シモ今日ノ場合、ツマラス平和ヲ結ムダナラバ、ソレコソ三年ヲ出デナイ中ニ、忽チ復讐ヲヤツテ來ルニ相違ナイデス、其復讐ヲ恐レタナラバ今日ノ時ニ於テ他マデ戰爭ヲ繼續シテ根本的ニ露西亞ヲ挫イデ置ク必要アリト云フ事ハ何人デモ是認スル所デシヤウ。

若シ私ノ意見ヲノミ云ヘバ、之ガ爲メニ「バイカル」湖以東ヲ我勢力下ニ屬セシムル必要アリト思フノデスガ先ヅ哈爾賓マデ進メバ、其カラ先ハ凡テノ點ガ樂ニ行クデス。

又今日他マデ戰ヒ置ク必要アリト云フコトニ就テ、列國ノ干涉力ヲモ考慮シ置カヌケレバナラヌノデス、試ミニ世界軍艦表ヲ御覽ナサイ、何レノ國モ未製

軍艦ガ澤山アリマス、三年、五年ノ後、此等ガ製造サレタ曉ニハ必ズ、東洋ニ持つテ來ルニ違ヒナイデス。

今日マデコソ、日本ヲ劣弱ナリトテ侮リ居リシモノ、此ノ戦争ノ結果、列國ハ必ラズ日本ニ重ヲ置テ軍艦其他ノ兵備ヲ東洋ニ嚴ニスルコト、ナレバ前途露國復讎ニヤツテ來ル頃ニハ今日ニ比シテ列國ノ干涉力ハ非常ニ増加スルコト、ナルニ違ヒナイ、之レ決シテ我國ノ利益デアリマセン、即チ今日列國干涉力ノ比較的少イ時ニ於テ飽マデ戦ヒ置クノ必要アル所以デス。

凡ソ此等ノ事ニ就テハ我國民我輿論ハ均シク之ヲ是認スル所ダト思フノデスガ、兎角政府ノ腰ガ弱イ様子デ動モスレバ姑息ナ平和風ニ誘ハレナイトモ限ラヌ様デス。

尤モ今ノ政府ハ強イ積デモ側ニ弱イ元老ガ附イテ居ル何カノ事ニ就ケ彼是容喙制肘スル傾ガアルデス、之ハ甚ダ慨嘆ナ次第デスガ、怎モ元老ヲ全ク無キモノニスル譯ニモ參ラズ、甚ダ厄介ナ次第デスガ、之ヲ制スルハ輿論ノ力ニ俟ツ外ハナイト思フデス。

私ハ常ニ考ヘテ居ルノデス、政府ト、元老ト、輿論トハ三縮ニナツテ居ルト蓋シ政府ハ元老ヲ恐レマスガ、輿論ハ一向構ハナイデ甚ダシキハ警察力デ之ヲ壓迫シヤウトシマス、然ルニ元老ハ政府ニ向ツテコソ、彼是イラヌ世話ヲ燒イテ、國政ヲ妨ゲマスガ、只輿論ニ對シテ丈ハ多少恐レ氣ヲ持ツテ居ルヤウデス、サレバ今日ノ場合益々輿論ヲ勃起セシメテ弱腰ノ元老ヲ排斥シ、飽マデ持久シテ開戦當初ノ目的ヲ貫徹スルコトガ肝要デス云々。

又寺尾氏ハ讀賣新聞記者ニ謂テ曰ク

○決議ト寺尾博士別項七博士ノ決議參照

開戦後何時ノ頃デアツタカ、君ノ所ノ新聞デ「七博士今如何」ト題シ吾輩ノ同志ガ開戦前ニハ種々ヤカマシク言ヒ乍ラ近頃ハ杏トシテ聲ナシ——眠ツテ居ルノカトイフ嘲リヲ受ケタコトガアルガ決シテ眠ツテ居タ譯デヤナイ、戦争開始後モ絶エズ問題ハ研究シテ居タノデアツテ、戦争ノ成リ行キ如何其ノ終局如何、又戦後ノ經營如何——要スルニ當初開戦ノ目的ヲ達スルニハ如何ニ

スベキカテフ問題ハ、潜心考慮ヲ費シテ居ル所デアアル開戦當初ノ目的ヲ達スルニハ勿論舉國一致デ堅忍持久ノ策ニ出ヅルヨリ外ナク、又吾ガ兵力及ビ財力ノ點ニ於テモ必ラズ持續スルコトヲ得ルモノト確信スルノデアアル然ルニ振古未曾有ノ大事件ノ端緒タル戦争ヲ開始シテヨリ僅カ一年二三ヶ月ノ今日ニ於テ、或ハ姑息ノ終局ヲミヨツトノ説モアル様デアアルガ此ハ甚クシキ間違ヒデアアルカラ吾輩ハ益々輿論ヲ喚起シテ、他クマデモ戦争ノ持續ニ盡力シヤウト思フノデアアル

余モ亦同記者ニ謂テ曰ク

○決議ト戸水博士(同上)

日本政府ノ方デハ然ウデモナイデセウケレ共歐洲デハ餘程平和風ガ吹イテ居ル様デス現ニ私モ日本政府ガ亞米利加ヲ通ジテ媾和ノ申込ミヲ受ケタトイフ事ヲ聞テ居リマス、トイフノガ元來佛國ハ露國ノ外債——或ハ内債ヲ引受ケテ居ルコトガ非常ニ多額デ現ニ開戦前既ニ七十億圓ニ達シテ居タトイフ

状態ニ立至ツテ居ルカラ日露戦争——殊ニ露國ノ敗戦ガ自國ニ不利ナルタメニ亞米利加ノ「ルーズヴェルト」ニ依頼シテ、講和ノ申込ミヲ試ミ、タモノトモ見エルシ或ハ又露國自カラ「ルーズヴェルト」ニ頼ツテ内々講和ノ申込ミヲ試ミ、タノカモ知レヌ、兎ニ角歐米ニ於テ平和風ノ吹イテ居ルノハ事實デ先頃モ滿洲ニ居タ或者ノ如キハ此ノ平和風アルヲ聞テ、態々歸國シテ來テ、案外日本デハ然ウイフ風ノナイノヲ喜ンデ居ル者モアル固ヨリ日本政府ガ斯カル風説ニ動かサレナイノハ明カデアアルガ、假令動かサレナイニシテモ、政府トイフモノハ、元來人民ヲ後口楯ニスルモノデアアルカラ、國民ハ此ノ際特ニドツシリトシタ態度ヲ執ル必要ガアルト思フ今更ラ言フマデモナク、戦争ノ目的ハ、絶東ヨリシテ露國ヲ驅逐シ去ルニアルノデ此ノ事業ヲ完フシナケレバ、戦争ノ目的ハ達シラレナイデ、私共ハ是非露國ヲ貝加爾湖マデ追撃シナケレバナラヌト思ツテル尤モ哈爾濱ヲ取ツテ了ツタラ、或ハソコデ双方睨ミ合ヒニナルカモ知レヌ然シ睨ミ合ヒハ日本ノ利デアアルカラ、彼所デ睨ミ合フトイフコトヲ恐ル、必要ハナイ何ゼ睨ミ合ヒガ日本ノ利デアアルカ……ソレハ言フマデモ

ナク、日本ガ持久ノ策サヘ執レバ、其ノ間ニ東部西比利亞ヲ征服スルコトガ出來ルノミナラズ、滿洲ヲ擧ゲテ日本ノ權力下ニ立タシメアルコトヲ得ルカラデ、然ウナレバ假令名義上滿洲ヲ支那ニ還ヘスニシタ處デ、其ノ實同地ニ於ケル日本人ノ權力ヲ樹立スルコトガ出來ルカラデアアル。

尙ホ又滿洲ヲ開放スルニシテモ、現時ノ儘コレヲ開放シタ處デ日本ハ勿論列國モ差シテ利益ヲ得ル譯ニハ行カスト思フカラ、此ノ際日本ハ是非持久ノ策ヲ執ルノ必要アルノミナラズ、戰爭シテ利益ヲウル代ハリニ早ク和ヲ媾ズル如キ事アラバ、却テ數年ノ後露國ガ再ビ其ノ權力ヲ回復センガタメニ捲土重來シテ戰ヒヲ再ビスル様ナコトニナル、勿論私ハ戰ヒヲ再ビスルコトヲ厭ヒハセス、厭ヒハセスガ然シ滿洲ニ於テ再ビ戰フコトハ好マヌ少クトモ再戰ノ地ハ貝加爾湖以西タルベシト思ツテ居ル、殊ニ今日ニ於テハ日本ノ海軍最優勢デ、露國ノミナラズ、佛モ獨モ但シハ米モ左程優勢ナ艦隊ヲ東洋ニ有シテ居ナイ有シテ居ナイケレ共、海軍年鑑ノ示ス所ニヨルト、新タニ其ノ建造中ニ屬スルモノ少クナイ、デアアルカラ若シソレ等ノ軍艦ガ成就シテ、彼等諸外國ガ一

クビ其ノ優勢ナル勢力ヲ擁シ來ル曉ニナツタナラバ、假令日本ガ勝利ヲウルニシテモ、充分ニ其ノ戰勝ノ利益ヲ獲得スルコトニ遠慮シナケレバナラヌコトニナリ、或ハ獲得シ能ハヌコトニナルカモ知レヌ、デ、此ノ點カラ言ツテモ、日本ガ今日戰フノ利ナルコトハ明カデアアル……日本ガ斯クマデ……現ニ今日ノ如ク強イトイフコトハ、コレマデ露國其ノ他列國ノ知ラズニ居タ所デ、彼等ガ眠ツテ居ル内ニ充分強大ナ艦隊ヲ率ヒテ戰ヒエタノハ、ドコマデモ日本ノ利デ、今後若シ列國ガ眼ヲサマシテ充分優勢ナル艦隊ヲ有スルニ至ラバ、假令日本ガ勝利ヲウルニシタ處デ、其ノ今日ノ如キ利益ヲウルコトガ出來ナイノハ明カデ、要スルニ今日ハ好機逸スベカラザル秋デアルト思フ、勿論久シク戰フニハ財力モ亦充分豊カデナカラネバナラス、然シ此ノ點ニ於テモ、日本ハ幸ヒ私共ノ想像シテ居タ以上——單ニ私共ノミナラズ、其ノ道ノ人ノ想像以外豊カデアルトイフコトデアアルカラ、旁々此ノ際持久ノ策ヲ執ラナケレバナラヌ。

日本ノ實業家中ニハ早ク和ヲ媾セント考ヘテ居ル人モアルカ知ラヌケレ共

一體實業家トイフ者ハ、常ニ眼前ノ事バカシニ若目シテ、永遠ノ事ニ思ヒ及バナイモノデアアルカラ、此レ等ノ人ニ聞カズ、國民ハ永遠ノ利害ヲ慮ツテ他クマデ持久ノ策ヲ立テンコトヲ希望スル

寺尾氏ノ言ハ載セテ二十六日ノ電報新聞及二十六日ノ讀賣新聞ニ在リ而シテ余ノ言ハ載セテ二十六日ノ電報新聞及二十六日二十七日ノ讀賣新聞ニ在リ

五月二十七日東郷大將ノ率ユル所ノ艦隊對馬沖ニ於テ「ロゼストウエンスキ」ノ艦隊ト戰ヒタリトノ報ニ接ス

五月二十九日又城南會ヲ南佐莊ニ開ク渡邊子爵、渡邊千冬、中村、建部、金井、寺尾、松浦、藏原ノ諸氏余ヲ并セテ九人之ニ出席シ而シテ時事新報ノ白石氏亦來リ會ス此日「バルチック」艦隊殆ンド全滅シタリトノ報ニ接シタルヲ以テ南佐莊ノ會合ハ期セズシテ祝賀會ヲ兼ヌルニ至レリ然レトモ吾輩尙之ヲ以テ足レリトセズ別ニ六月五日ヲ以テ祝賀會ヲ芝紅葉館ニ開ク此ノ日ノ出席者ハ渡邊

子爵、渡邊千冬、鹽川三四郎、立作太郎、藏原惟禎、岡田朝太郎、松浦厚、寺尾亨、建部遜吾、中村進午ノ諸氏余ヲ併セテ十一人ニシテ同處ニ於テハ松浦氏ヨリ高橋作衛氏ノ書面ヲ示サル之ヲ見ルニ曰ク南佐莊及城南會トノ關係ヲ絶タント欲スト夫レ高橋氏ハ數年來吾輩ト相提携セシ人物ナリ然ルニ些細ノ事ニ關シ感情ノ衝突ヨリシテ松浦厚氏ニ對シ意平カナラザル所アリテ南佐莊及城南會トノ關係ヲ絶タント欲スルハ吾輩ノ遺憾トスル所ナリ何レニモセヨ吾輩トノ私交上ノ關係ハ之カ爲メニ毫末モ變更ヲ受ケタルニ非ズ

果然六月五日ニ至リ寺尾、金井兩氏ヨリ手紙來ル曰ク八日一橋學士會ニ於テ時局問題ニ關シ有志者ノ會合ヲ催サント此手紙ノ末尾ニ贊成者ノ姓ヲ記ス富井、戸水、金井、岡田、中村、箕作、建部、立、高橋、寺尾、秋山是ナリコハ名義ヨリ云ハハ寺尾、金井兩氏ノ手紙ナリト雖其實ハ高橋氏ノ首唱ニ基キタルモノナリ而シテ余ハ固ヨリ贊成者ノ一人ナリト雖日時ノ撰定ハ之ヲ高橋氏等ニ一任シタルヲ以テ此手紙ヲ得タルナリ然ルニ生憎八日ニ差支アリテ此ノ會ニ出席セズ

其翌々日即チ六月十日ニ至リ東京朝日新聞ノ號外來ル曰ク

○露國乞和

在本邦米國公使ハ本月九日附ヲ以テ帝國外務大臣ニ對シ左ノ照會ヲナセリ
 本使ハ國務長官ノ電訓ニ從ヒ閣下ニ對シ左ノ通牒ヲナスノ光榮ヲ有ス
 大統領ノ所感ヲ以テスレバ今ヤ人類一般ノ利益ノ爲メ目下ノ慘慄タル且
 痛歎スベキ戰爭ヲ終局セシムルコト能ハザルカヲ見ンガ爲メ大統領ニ於
 テ努力セザルベカラザル秋方ニ至レリ合衆國ガ日露兩國ト友好親善ノ關
 係ヲ保ツヤ久シ合衆國ハ此兩國ノ繁榮福祉ヲ祈ルト共ニ此二大國民間ノ
 戰爭ニ依リ世界ノ進歩阻礙セララル、ヲ感ズ
 故ニ大統領ハ日露兩國政府ニ於テ兩國自己ノ爲メノミナラズ文明世界全
 體ノ利益ノ爲メ相互間ニ直接ノ媾和談判ヲ開始センコトヲ切望ス
 右媾和談判ハ全然兩交戰國間ニ於テ直接ニ之ヲ行フベク換言スレバ即チ
 日露兩國ノ全權委員ハ何等仲介者ヲ設ケズシテ會見シ以テ此等兩國ノ代
 表者ニ於テ媾和條件ヲ協定スルコト能ハザルカヲ見ルニ至ランコトは大

統領ノ勸告スル所ナリ

大統領ハ熱心ニ日本政府ニ請フニ同政府ガ此際如上ノ會合ニ同意センコ
 トヲ以テシ又露國政府ニモ等シク同意ヲ求メツ、アリ大統領ハ媾和談判
 其モノニ關シテハ何等ノ仲介者ヲ要スルヲ見ズト雖モ若シ兩關係國ニシ
 テ會合ノ日時及ビ場所ニ關シ豫議ヲ整フルニ付大統領ノ力ヲ假ルヲ利ア
 リトスルニ於テハ大統領ハ正當ニ爲シ得ル限リ何事ニテモ欣然其任ニ當
 ラントス然レドモ右ノ豫議トテモ若シ兩國間直接ニ又ハ其他ノ方法ヲ以
 テ之ヲ整フルコトヲ得バ是レ大統領ニ於テ固ヨリ憚ブ所ナリ何トナレバ
 大統領ノ目的トスル所ハ唯文明世界全體ガ依テ以テ平和ヲ來サンコトヲ
 禱ルベキ會合ノ成立ニ外ナラザレバナリ

本使ハ此機ニ附シ云々

右ニ對シ帝國外務大臣ハ本月十日附ヲ以テ左ノ回答ヲナセリ

本大臣ハ國務長官閣下ノ電訓ヲ通牒セラレタル本月九日限貴翰ヲ受領ス
 ルノ光榮ヲ有ス尙ホ帝國政府ノ覆答トシテ左ノ趣ヲ貴國政府へ電致セラ

レンコトヲ請フ

帝國政府ハ貴翰ニ記述セラレタル合衆國大統領ノ勸告ニ對シ極メテ慎重ナル考量ヲ加ヘタリ是其發言者ト其内容トニ顧ミ素ヨリ當然ニ屬ス露國トノ平和ハ其確實ヲ充分ニ保障スルニ足ルベキ條件ノ下ニ之ヲ復立センコトハ世界ノ利益ノ爲メ將又帝國ノ利益ノ爲メ帝國政府ノ希望スル所ナルヲ以テ帝國政府ハ大統領ノ勸告ニ應ジ全然兩交戰國間ニ於テ直接ニ媾和條件ヲ商議決定スルノ目的ヲ以テ相互ノ意ニ適シ且ツ便宜ト認メラルベキ日時及場所ニ於テ露國全權委員ト會合センガ爲メ帝國全權委員ヲ任命スベシ

本大臣ハ此機ニ附シ云々

尋テ時事新報ノ號外余ノ家ニ達ス其趣旨亦右ニ同シ察スルニ他ノ新聞モ亦號外ヲ發シタルナラン
 何レニモセヨ此ノ如キ報ニ接シテヨリ日本ノ政海商海共ニ活氣ヲ帶ビ其結果トシテ兩三日中ニ余ノ家ニ達シタル手紙忽チニシテ數十通ノ多キニ達ス

松浦厚氏ノ手紙等其中ニ在リ此ノ日夕刻時事新報社ノ對馬機氏來ル講和ニ關シ余ト談話センガ爲メナリ夜ニ至リ高橋作衛氏余ニ手紙ヲ送ル此手紙翌十一日ノ朝余ノ手ニ入ル其餘ノ手ニ入ルヤ否ヤ高橋作衛氏來リ尋テ讀賣ノ坂口二郎氏來リ日本ノ早乙女勇五郎氏來リ報知新聞ノ高田知一郎氏來リ電報新聞ノ野村龜藏氏來ル其他余ノ家ニ來ルモノ曰ク某日ク某余ノ客ニ接スル亦多忙ト云フ可キナリ此日松浦厚氏ヨリ電報來ル曰ク
 ヨウダンアリオンニチゴゴ三ジナンサンヘキタレマツラ

松浦氏華胄ノ身ヲ以テ非常ニ熱心ニ時局問題ヲ研究シタルノミナラズ又夙ニ南佐莊ノ首腦ノ一人トナリ藏原氏ト共ニ同莊ノ事務ヲ處辨スルノ任ニ當リタルガ故ニ前記東京朝日新聞及時事新報ノ號外ヲ見テ憂心忡々終ニ此ノ如キ電報ヲ發シタルナリ

余乃チ南佐莊ニ行ク之ト前後シテ來リ會スルモノ曰ク渡邊子爵曰ク松浦氏曰ク寺尼氏曰ク建部氏曰ク藏原氏曰ク中村氏曰ク高橋作衛氏曰ク立氏曰ク岡田氏夫レ高橋作衛氏ハ此頃平常南佐莊ニ來ラサル者然ルニ此ノ日ニ限リ

亨曰此日外務省
 局長ニ面シ和
 事ナ詰リ和官

松浦氏トノ感情如何ヲ願ミルニ暇アラズ新ニ起生シタル大問題ニ關シ非常ノ熱氣ヲ帶ビテ南佐莊ニ來リ又々松浦氏ト感情上ノ衝突ヲ爲シタリ是甚ク遺憾ト謂フ可キナリ

此一小事件アリタルニモ拘ハラズ吾輩ノ討議ハ矢ノ如ク進行シ露國ニ向テ要求スベキ講和條件ニ付テ眞ノ決議ヲ爲ササルニ決シ而シテ之ト同時ニ要求ス可キ最小限度ニ付テ打合セテ爲シ其打合ノ結果ヲ急ニ世間ニ發表スヘキコトヲ決議セリ何故ニ講和條件ニ付テ眞ノ決議ヲ爲サバリシヤト云フニ吾輩各互ニ説ヲ異ニシ如何ニ討議ヲ重ヌルモ到底吾輩全數ヲシテ満足セシム可キ講和條件ヲ決議スルヲ得ザレバナリ然レトモ要求ス可キ最小限度ニ付テ打合ヲ爲スハ左マデ困難ナラズ故ヲ以テ速カニ此ノ如キ打合セテ爲シ急ニ之ヲ世間ニ發表スルコト、爲シタリ

翌六月十二日早朝新聞ヲ見レバ講和ノ時期、講和條件其他談判地及談判委員等ニ關スル余ノ意見ハ日本報知讀賣電報ノ四新聞ニ出タルノミナラズ日夕ニ涉リテ來訪者頗ル多ク終ニ之ガ爲メニ同日開會ノ國際法學會ニ出席スル

コトヲ得ザルニ至レリ

此ノ日夕刻松浦藏原ノ兩氏余ノ家ニ來リ曰ク昨夕打合ヲ爲シタル露國ニ向テ要求ス可キ最小限度ハ明十三日ノ新聞ニ於テ世間ニ發表スルコト能ハス如何トナレバ高橋氏ハ昨夜ノ決議ニ對シテ異議アルニ由リ其發表ヲ見合セ吳ト言ヒ金井氏モ亦異議アルガ如ク建部氏モ亦異議アルカ如シ金井建部兩氏ヨリハ此事ニ付テ未タ直接ニ交渉ヲ受ケタルニ非スト雖高橋氏ノ言ニヨレバ金井氏モ建部氏モ高橋氏ニ賛成シタルガ如シト余兩氏ニ答ヘテ曰ク昨日打合ヲ爲シタルノ件ハ速カニ之ヲ發表ス可シトノ決議アリ一兩名ノ異議ヲ以テ之ヲ取消スコト能ハズ且ツ既ニ決議ヲ爲シナガラ今更趨起逡巡シテ其發表ヲ延期セバ終ニ之ヲ發表スルノ機會ヲ失スルナラン故ニ斷乎トシテ速カニ之ヲ發表スルニ如カズ已ムコト無クンバ異議者ノ姓名ヲ除キ其他ノ人々ノ姓名ヲ發表シテハ如何金井氏ハ昨夕ノ會合ニ出席セザルガ故ニ始ヨリ決議ニ加ハラズ建部氏ハ決議ノ發表ニ對シ異議ノアル可キ筈無シ故ニ建部氏ノ姓名ヲ除ク可ラズ唯高橋氏眞ニ異議アラバ其姓名ヲ除クモ亦可ナラ

ズヤト兩氏曰ク是良策ナリ然レドモ時刻既ニ遲シ明日之ヲ發表スルノ準備ヲ爲シ難シ明後十四日ヲ待ツテ之ヲ發表セント兩氏之ヨリ余ノ家ヲ辭シ直チニ富士見軒ニ行ク如何トナレバ此ノ日富士見軒ニ於テ國際法學會ノ會合アリテ其首腦タル高橋氏之ニ出席ス可キカ故ニ同氏ニ對シ交渉ヲ遂ケント欲セシナリ此ノ如クニシテ松浦藏原ノ兩氏ハ高橋氏ニ面會シ其同意ヲ得テ昨夕南佐莊ニ於ケルノ決議者中ヨリ高橋氏ノ姓名ヲ除クコト、爲シ其ヨリ直チニ所謂露國ニ向テ要求ス可キ最小限度ノ發表準備ニ着手セリ

松浦藏原ノ兩氏去リテ間モ無ク帝國大學書記官中村恭平氏來ル曰ク文部大臣ハ總長ヲ通ジテ教授ニ對シテ時局ニ關シ慎重ノ態度ヲ取ル可キコトヲ嚴命シタリ然ルニ本日貴君等ガ國際法學會ニ於テ時局ニ關シ決議スル所アラントノ事ヲ文部大臣ハ聞込ミ急ニ總長ヲ召喚シ此ノ如キ舉ニ出デザル様教授ニ嚴命ス可キコトヲ達セラレタリ此旨承知アリ度ト中村氏素ヨリ余ヲ詰ラント欲スルニ非ズ唯總長ノ命ヲ余ニ傳ヘタルノミ而シテ此ノ如キ命ヲ傳ヘラレタルモノハ無論余一人ニ非ズシテ同志ノ教授悉ク此ノ命ヲ傳ヘラレ

進午曰ク幸ナル
哉レノ四字味フ
ベシ

進午曰風聲鶴唳

タルナリ余ハ此ノ言ヲ聞イテ奇異ノ感ヲ懷キタリ如何トナレバ前段既ニ述ベタル如ク吾輩既ニ昨十一日ヲ以テ松浦氏ノ電報ニ接シテ南佐莊ニ集マリ露國ニ向テ請求ス可キ最小限定ニ付テ打合ヲ爲シ且ツ之ヲ世間ニ發表ス可キコトヲ決議シタルモ吾輩共同ニ主張セント欲スル眞ノ講和條件ニ付特更ニ決議ヲ爲サハリキ而シテ國際法學會ハ此ノ如キ運動ニ何等關係ヲ有セズ高尙純粹ノ學會ニ外ナラズシテ吾輩ハ此ノ學會ニ於テ時局ニ關シテ毫末モ決議ヲ爲スノ考ヲ有セザリキ然ルニ幸ナル哉文部大臣ハ南佐莊ノ會合ト國際法學會ノ會合トノ間ニ此ノ如キ區別アルヲ知ラズ且ツ昨十一日ノ南佐莊ノ會合ニ於テ如何ナル事ヲ決議シタルヤヲ知ラズ頻リニ十二日ノ國際法學會ニ重キヲ置キ此學會ニ於テ決議ヲ爲スコト勿レト迫リ來レリ比喻ヲ以テ之ヲ説明スレバ南佐莊ハ恰モ生キタル人間ノ如ク國際法學會ハ恰モ藪人形ノ如シ此學會ハ高尙ナル學會ナルコト論ヲ待タズト雖時局ニ關スル決議ノ點ヨリ見レバ恰モ藪人形ノ如シ然ルニ其内情ヲ知ラサル文部大臣ノ目ニハ國際法學會ハ時局ニ關シ決議ヲ爲スナラント見エタリ即チ生キタル人間ナ

ザル可ラズ此ノ自由ヲ制限スルハ猶ホ食ヲ禁スルガ如キノミ今ヤ政府ハ生
等ニ向テ言論ヲ慎メト云ハル、モ恐クハ時局ニ關シ言論ヲ爲スコト勿レト
云フニ非ザルナラン

總長曰ク政府ハ諸君ノ言論ヲ悉ク禁遏スルニアラズ唯外交ノ妨害ヲ爲サ
ル様注意ス可キコトヲ命スルノミ

余曰ク如何ナルコトガ外交ノ妨害ト爲ルカ如何ナル事ガ外交ノ妨害ト爲ラ
ザルカ之ヲ豫知スルコト頗ル難シ隨テ識ラズ知ラズノ間ニ外交ノ妨害ト爲
ル可キ議論ヲ述フルヤモ知ル可ラズト

總長曰ク外交ノ妨害ト爲ルト否トノ標準ハ何人モ之ヲ示ス能ハズ諸君宜シ
ク自己ノ判斷ニ訴ヘ只管適當ノ注意ヲ加ヘテ外交ノ妨害ト爲ラサルコトヲ
期スベシト

余曰ク謹テ命ヲ受クト

總長ハ尙ホ懇切ニ吾輩ヲ諭シテ曰ク諸君ノ舉動大學ノ爲メニ不利益トナル
モ面白カラズ國家ノ爲メニ不利益トナルモ面白カラズト

進午日ク匹夫モ
志ヲ奮フベカラ
ズ況十月水博士
ニ於テナキヤ

余曰ク余ハ今更時局ニ關シ言論ヲ廢スル能ハズ言論ヲ爲スハ即チ國家ノ利
益ヲ思ヘバナリ國家ノ利益ヲ思フテ言論ヲ爲ス心中毫モ疚シキ所無シ若シ
言論ノ故ヲ以テ職ヲ免セラル、コトアルモ余ハ之ヲ悔イズ此ノ如キ一身上
ノ事柄ハ之ヲ眼中ニ置キタルニ非ズ若シ職ヲ免セラル、如キコトアラバ乞
フ適當ノ人ヲ擧ケテ教授ト爲セヨ此ノ如キコトヲ爲サバ大學ニ取リテ何ノ
不利益カ之有ラント

總長曰ク教授大學ヲ去ル是大學ノ不利益ニアラズシテ何ゾヤ余ハ尙ホ此ノ
外ニ不利益ノ點ヲ想像スルモ今之ヲ述ブ可キ時機ニ非ズト

嗚呼此ノ外ニ不利益ノ點アリトハ果シテ何事ゾ余ハ總長ト談話ノ際ニ於テ
之ヲ確知スル能ハサリキ然レトモ總長ハ心ニ於テ深ク決スル所アリタルガ
如ク其容貌態度毅然トシテ犯ス可ラズ

總長ニ對スル建部氏ノ答モ亦余ノ答ト秋毫モ異ナル所無ク其容貌ノ温雅ナ
ルニモ拘ハラズ斷々乎トシテ言論ヲ縱ニスルノ意氣アリ

午前十時三十分余建部氏ト相携ヘテ總長室ヨリ出ツ時方サニ英氣颯爽恰モ

遜者曰容貌温雅
ノ評ヲ受ケルハ
生來コレガ始メ
テナリ
總長トノ談中
一國民ノ大數ハ
國家ノ爲ニ既ニ

生命ヲモ犠牲ニ
セリトシ生等ガ
職ヲ失フガ如キ
何ソ言フニ足ラ
ムヤレノ時ハ一
博士ヨリ出テ一
坐席然タリ

是酣戰ヨリ來ルカ如シ察スルニ其後總長室ニ入リタル寺尾岡田等諸氏亦政
府ノ干涉ニ辟易スルハ男子ノ事ニ非ズト考ヘシナラン
六月十日講和將サニ成ラントスルノ報ニ接シテヨリ以後ハ渡邊子爵寺尾建
部中村ノ諸氏及余ノ意見ハ種々ノ新聞ニヨリテ之ヲ世間ニ發表シ且ツ天下
ノ志士論客ハ此際ニ於テ新聞ヲ利用シ其議論ヲ公ニスルモノ頗ル多ク世論
囂々トシテ底止スル所ヲ知ラズ唯何故カ高橋作衛氏ノ議論ハ新聞ニ於テ之
ヲ見ルコトヲ得ス

六月十四日早朝新聞ヲ見ルニ愉快ナル哉十一日南佐莊ニ於テ相談シタル事
項黒圈點ヲ付シ歷々トシテ紙上ニ在リ即チ左ノ如シ

○講和條件ノ最小限度

外交上ノ風雲漸ク急ナル昨今七博士運動以來時局問題ヲ講究シテ國家ノ長
計ヲ畫セントスル博士學士並ニ其他二三ノ同志ノ士ニシテ組織シタル集會
ニ於テ一昨十一日夜戸水寛人岡田朝太郎中村進午建部遯吾松浦厚渡邊千冬
藏原惟昶外數氏ハ左ノ如キ相談ヲ爲シタルガ是ハ諸氏ノ一致セル最小限度

ノ條件ナルヨシ且ツ朝鮮ニ關シテハ無論ノ事トシテ言ハザル次第ナリト

講和豫備條件

一 講和談判ノ場所

日本ニ於テ他ノ煩累ヲ受ケザル場所ヲ選ブ可シ

一 休戰

豫備條約締結迄ハ休戰セズ其後ハ條件ヲ付シテ休戰ス

講和條件

一 償金 土地割讓ノ外左ノ額ヲ要求ス

參拾億圓

一 土地

(一)樺太「カムチャツカ」ノミナラズ沿海州全部ノ割讓

(二)遼東半島ニ於テ露國ノ有セル權利ヲ讓與セシムルコト

(三)滿洲ニ關シテハ日清兩國ノ決定スル所ニ任スベシ

一 物

- (一)東清鐵道及ビ其敷地ノ讓與
 - (二)新嘉坡以東ニ在ル露國逃竄軍艦其他軍用船ノ讓與
 - (三)滿洲ニ在ル露政府ノ鑛山其他ノ建設物
- 一國際役務

- (一)太平洋並ニ日本海ニ露國ヲシテ艦隊ヲ置カシメザルコト
- (二)貢加爾湖以東ニ於ケル露國守衛兵ヲ制限スルコト
- (三)露國ハ日本ノ承諾ヲ得ズシテ清國ノ土地ニ關スル利益ヲ得ヘカラザルコト

此日夕刻余久保田文相ヲ私邸ニ訪ヒ文相ニ謂テ曰ク余ハ時局ニ關シ今更言論ヲ廢スル能ハズ是甚タ不遜ナルカ如シト雖モ亦之ヲ如何トモスルコト能ハズト久保田氏モ亦余ト利害ヲ異ニスルヲ以テ甚タ遺憾ト爲セリ

南佐莊ニ於テ決議シタル事項既ニ新聞ニ出タル以上ハ吾輩固ヨリ教授職ヲ免セラル、ナラント覺悟セリ然ルニ緩ナル哉漫ナル哉六月十四日文部大臣

ヨリ東京帝國大學總長ニ唯左ノ内訓ヲ爲シタルノミ

東京帝國大學總長

官吏タル者ハ政治問題ニ關スル言動ヲ慎ムヘキハ言ヲ待タズ殊ニ今日ノ時局ニ關スル大學教授ノ言動ハ國際上戦局上影響スル所尠カラサルヲ以テ一層之ヲ慎マザルベカラズ故ニ之ニ關シテハ十分戒告ヲナスベキ旨屢ニ注意スル所アリタリ然ルニ近來其學職員ニシテ時局ニ關シ不謹慎ノ言動ヲナス者往々ニシテ之レ有ルヲ聞クハ甚遺憾トスル所ナリ今後訓戒ノ趣旨ニ違ヒ其言動ヲ慎マサル者ニ對シ遂ニ相當ノ處分ヲ行フノ已ムヲ得サルガ如キコトアラバ此レ本大臣ノ最遺憾トスル所ナリ貴官ハ宜シク此意ヲ體シ不都合之レ無キ様此際嚴ニ訓戒ヲ加ヘラルヘシ

右内訓ス

明治三十八年六月十四日

文部大臣 久保田 讓

而シテ吾輩其蒞蒞版ノ書付ヲ領收シタルハ翌十五日ニシテ後數日ヲ經テ此

進午日「殆ンド」
ノミナラシヤ

内訓新聞ニ顯ハレ徒ニ惡口ニ長シタル京童ノ爲メニ嘲笑セラル、ニ止マリ
吾輩ニ對シテハ殆ンド何等ノ影響ヲ及ボサズ聞ク所ニヨレバ當時桂内閣ハ
吾輩ノ處分ニ關シ屢々審議スル所アリテ終ニ右ノ如キ内訓ヲ出シタルモノ
ナリト云フ然ルニ其苦心ノ結果全ク水泡ニ歸セリ是桂内閣ノ意外トセシ所
ナラン

六月十七日ノ二六新聞ヲ見ルニ曰ク

●博士連ト政府

其筋ニテハ博士連ガ南佐莊ニ會シテ媾和條件ヲ決議シタルヲ以テ不穩ノ舉
動ト爲シ夫夫所屬長官ヲシテ詰責セシムルコト、爲シタル趣ニテ其結果外
務省ハ寺尾亨氏ノ參事官ヲ免ジ高橋作衛、中村進午二氏ノ囑托ヲ解クコト、
爲シ大學ハ山川總長部下教授ヲ監督シ得ザル責ヲ引テ辭表ヲ捧呈セントシ
學習院ニテハ菊池院長ガ中村氏ヲ取調タル由

寺尾氏ハ久シキ以前ヨリ外務省參事官ヲ兼テ高橋中村ノ兩氏ハ輓近外務省

進午日
對池院長ノ余ニ
對シテ命令ハ懸
切チ盛シ鄭重チ
盡セリ是レ余ガ

深ク且永ク同氏
ニ感謝スル所ナ
リ而シテ氏ノ命
今關シテハ時局
絶對的禁止ニ關
フス不穩當及過
激ノ論議ヲ慎メ
長ト云フニアリキ
風者自ラ長者ノ
進午日ク
赤道直下涼風チ
得タリ

ノ囑托ヲ受ケテ國際法ノ論點ニ付意見ヲ述ヘツ、アリタル者而ルニ右ノ報
知ニヨレハ六月十七日ニハ三氏悉ク一時ニ外務省ヲ去ラサル可ラザルコト
、ナラントシツ、アリ而シテ學習院長ガ中村氏ニ時局ニ關シ論議スルコト
勿レト嚴命シタルモ亦事實ナリ唯山川總長云々ノ記事ハ果シテ眞ナリヤ否
ヤ是余ノ知ル所ニ非ラズ六月二十二日頃ニ至リ寺尾氏愈々兼職ヲ免セラレ
高橋中村兩氏亦囑托ヲ解カル

進午日ク
萬石ノ重

此時世人或ハ吾輩ニ向ヒ職ヲ辭シテ大ニ時局問題ヲ論スルノ得策ナルヲ告
グ而ルニ六月十八日穗積陳重氏余ノ家ニ來リ慇懃ノ態度懇切ノ言語ヲ以テ
余ニ謂テ曰ク貴君大學ヲ去ルニ意アリト聞ク是甚タ得策ニ非ズ時局問題ニ
關シ論議スル所アルモ必ズ教授職ヲ辭スルコト勿レト余答ヘテ曰ク謹テ教
ヲ受ク之ヲ聞ク大學教授ハ多少言論ノ自由アリト余ハ此ノ言論自由ノ問題
ノ衝ニ當ラント欲ス自ラ職ヲ辭スルハ是言論自由問題ヲ棄ツルナリ余焉ゾ
此ノ如キ舉ニ出ツルノ愚ヲ爲サンヤト余ハ穗積氏ニ向テ此ノ言ヲ爲セリ如
何トナレバ前段既ニ述ヘタルカ如ク日露戰爭既ニ開始セラレタル以上ハ余

ハ益々時局ニ關シテ意見ヲ發表セント欲スル者而シテ之ト同時ニ帝國大學
爲メニ言論ノ自由ヲ主張セント欲スル者ナリ故ニ自ラ進テ教授職ヲ辭スル
ハ教授職ニ在リテ言論ヲ縱ニスルニ如カズ且ツ「プロフェッソル」トシテノ言論
ハ「エキスポロフェッソル」トシテノ言論ヨリモ勢力アルコト論ヲ待タズ
六月十九日及二十六日ハ月曜日ナルノ故ヲ以テ南佐莊ニ於ケル城南會々合
ノ定日ニシテ此兩日ニモ例ニ從ヒ時局ニ關スル討議甚ク熾ナリ然ルニ一方
ニ於テハ吾輩大學教授等ハ新タニ政府ノ干涉ヲ蒙リテ英氣益ス天ヲ衝クコ
ト稍ホ百練ノ鐵新タニ礪ニ觸レテ益ス光ヲ發スルガゴトク而シテ他ノ一方
ニ於テハ日露ノ關係日ニ益ス非ナラントスルノ形勢アルニ由リ城南會々員
ハ單ニ定日ニ會合ヲ催スヲ足レリト爲サズ六月二十七日ニモ二十九日ニモ
之ヲ催フスコト、爲リ南佐莊ニ於ケルノ會合ハ又々頗ル頻繁ト爲レリ而シ
テ出席度數ノ最モ多キモノハ渡邊父子、松浦、藏原、建部、岡田、寺尾、中村及余ノ九
人ニシテ二十九日ニハ讀賣新聞ノ前橋氏、電報新聞ノ野村氏、日本ノ古嶋氏、時
事新報ノ小山氏亦來リ會セリ

露西日政府者
ニ入學セシハ
頭タル事ハ
然ルモ短所
テ先其短所
政ヲムシテ
須知量直ニ
ヲサシムト
イ

此一二怪事ノ生スルアリ一紳士戰爭以前ヨリ露國ニ滞在シタルニ六七月
ノ交、用務ノ爲メニ日本ニ歸リ暫時横濱ニ住シタリ此人政治ニ何等關係無シ
ト雖亦民間ノ事情ヲ知ル者幸ニシテ余ハ此人ト相識ルコト久シキニ由リ七
月四日晝ヲ同氏ニ送リ六日南佐莊ノ會合ニ出席シ露國民間ノ事情ヲ述ヘン
コトヲ求ム然ルニ同會合ノ愈ヨ催サル、ニ及ンデ同氏來ラズ其後同氏ヨリ
聞ク所ニヨレバ四日ノ手紙ハ八日ニ至リ同氏ノ手ニ着シタリト云フ
七月九日宣揚會ト稱スル會ヲ借樂園ニ開キ喇嘛僧ノルブ「氏」ヲ招キタルコト
アリ宣揚會ハ南佐莊ニ毫モ關係ヲ有セズト雖南佐莊ニ來ルノ人物ニシテ宣
揚會ノ會員タルモノ比々是ナリ此會ノ爲メニ韓旋ノ勞ヲ取ル幹事藏原氏ヨ
リ九日ノ會合ニ關シ中村氏ニ書面ヲ送リタルモ此ノ書面終ニ中村氏ノ手ニ
入ラザリシト云フ
是等皆咄々怪事其後余江戸橋郵便局ノ郵便課長タル二上法學士ニ逢ヒタル
時七月四日ヲ以テ横濱ニ送リタル手紙八日ニ至リ始メテ名宛人ノ手ニ入リ
タルハ甚ク奇怪ナリトノ事ヲ告ケタルニ二上氏ハ東京ニ於テハ此ノ如キ不

都合ノ事無キ筈ナリト答ヘタリ何レニモセヨ是ヨリ先キ明治三十三年頃
始メテ開戦論ノ熾ナラントシタル當時ニ在リテハ余ノ許ニ來リタル手紙一
兩日延着シタルノ例ハ一ニシテ足ラズ

戦争繼續論ヲ公ニシ講和ノ時期未タ至ラサルコトヲ論シテ以來二三箇月ノ
間不穩ノ文字ヲ臚列シタルノ手紙余ノ許ニ達シタル者數箇アリ中ニハ滿洲
ヨリ軍事郵便ヲ以テ余ノ許ニ此ノ如キ手紙ヲ送リタル者アリ是皆手紙ニヨ
リ余ヲ威嚇シテ戦争繼續論ヲ止メシメントスルノ目的ニ出タルモノト見ユ
是果シテ愛國者ノ所爲ナルカ抑モ亦所謂露探ノ所爲ナルカ余ハ之ヲ知ルニ
由無シ兎ニ角奴輩ノ手紙此ニ掲載スルノ必要無キコト論ヲ待タズ

七月十日ノ外交時報ニ左ノ論文ヲ掲ク是余ガ六月二十二日ニ書キタルモノ
ナリ

○媾和ノ時機果シテ到リタルヤ

在日本米國公使ハ本月九日附ヲ以テ日本ノ外務大臣ニ對シ公然米國大統領
ノ意ヲ通ジ日本ト露國トニ媾和談判ヲ爲スコトヲ勸告シタリシニ日本

遜者曰余ハ帝國
軍事郵便ノ爲ニ
之ヲ聴ツ

進午曰
月水博士休職ノ
最近因ハ此論文
ナリ

ノ外務大臣ハ翌十日付ヲ以テ米國大統領ノ勸告ニ應シ全然兩交戦國間ニ於
テ直接ニ講和條件ヲ商議決定スルノ目的ヲ以テ相互ノ意ニ應ジ且ツ便宜ト
認メラルベキ日時及場所ニ於テ露國全權委員ト會合センガ爲メ帝國全權委
員ヲ任命スベキ旨ヲ答ヘタリ日本國民ハ突如トシテ此ノ如キ報知ニ接セリ
其當時一般ニ想像セシ所ヲ述フンバ露國ハ連戦連敗終ニ和ヲ乞フニ至リタ
リ而シテ形式上米國大統領ハ仲間ニ在リテ講和ヲ勸誘シタルニ過ギスト日
本國民ハ一般ニ此ノ如キ想像ヲ懷抱セシガ故ニ大抵ノ人士ハ露國ガ謙讓ノ
態度ヲ示スナラント豫期シタリ唯識者間ニハ露國ハ譎詐的手段ニ出ツルヤ
モ測リ難シトテ警戒ノ言ヲ吐キタルモノ無キニ非ズ然ルニ事ノ成行ハ日本
人ノ豫期ニ反シ露國ハ否イヤナガラモ米國大統領ノ勸告ニ應スルモノ、如
キ態度ヲ示シ談判ノ地ヲ定メントスルニ當リテハ自己ノ與國タル佛國巴里
ヲ撰ハント欲シ全權委員ヲ任命セントスルニ當リテハ第二流以下ノ人物ヲ
以テ之ニ擬セントス

日本政府ハ如何ナル土地ヲ以テ談判ノ場所ト定メント欲シタルヤハ余ノ知

ル所ニ非ズト雖民間ノ志士ガ露國和ヲ乞フナラバ日本内地ニ於テ講和談判ヲ開ク可シト主張シタルニ當テ政府側ノ人物ハ頻リニ其言論ヲ壓抑センコトヲ試ミタル等ノ事實ニ徴スレハ日本政府ハ第三國ノ土地ヲ以テ談判ノ場所ト爲サント欲セシコトハ之ヲ想像スルニ難カラズ而シテ全權委員ヲ任命セントスルニ當テハ第一流ノ人物ヲ以テ之ニ擬セント欲スルノ形跡アルハ亦勢ノ然ラシムル所ト謂ツ可キナリ

夫レ日本ハ戰勝國ナリ露國ハ戰敗國ナリ戰勝國鞠躬如トシテ只管米國ノ勸誘ニ應スルノ態度ヲ示シ戰敗國ハ頑然トシテ驕傲ノ色有リ是實ニ千歳ノ奇觀ト謂ハサル可ラズ余好シテ史ヲ讀ムモ此ノ如キ奇觀ニ遭遇シタルコト少シ強テ其匹儔ヲ求ムレバ戰敗國タル明ノ皇帝ガ豐太閤ヲ日本國王ニ冊立セントセシカ如キハ亦稍之ニ類スル無キヲ得ンヤ

講和談判開始以前ニ於テ既ニ此ノ如キ奇觀ヲ呈ス而シテ愈ヨ之ヲワシングトシテ開クニ當テハ更ニ如何ナル奇觀ヲ呈ス可キゾ日本ヨリ提出ス可キ講和條件ト露國ヨリ提出ス可キ講和條件ヲ互ニ相交換スルニ當テハ兩國ノ全

權ハ此二者間ニ甚シキ徑庭懸隔アルヲ見テ局々然トシテ驚クヤモ知ル可ラズ

日本政府ハ果シテ如何ナル講和條件ヲ提出セント欲スルヤ是余ノ知ル所ニ非ズ然レドモ吾輩ガ屢バ公ニシタル所ノ議論ヲ以テ政府ノ案件ニ比較對照スレバ其間必ズ多少ノ懸隔無カル可ラズ而シテ更ラニ日本政府ノ案件ヲ以テ露國政府ノ案件ニ比較對照スレバ其間必ズ甚シキ徑庭懸隔アラン然ラバ日本ノ陸軍未タ哈爾濱ヲ取ラズ未タ浦潮斯德ヲ陷落セシメザルニ當テ兩交戰國間ニ如何ニ交渉ヲ重ヌルモ適當ノ調和ヲ見ルコト頗ル困難ナラン日露ノ談判ヲシテ調和ニ歸セシムルニハ露國ハ其主張ニ關シテ大讓歩ヲ爲スカ日本ハ大讓歩ヲ爲スカ二者一ナルヲ要ス然ルニ露國政府ノ頑鈍ナル恐クハ過カニ大讓歩ヲ爲スコト無ケン而シテ日本政府如何ニ溫柔ナルモ是亦大讓歩ヲ爲スコト困難ナラン若シ強テ大讓歩ヲ爲サバ日露兩國ノ講和條件ハ實ニ日本政府從來ノ案件ト異ナルノミナラズ又吾輩ノ議論民間志士ノ主張ヲ去ルコト益ス遠カル可キカ故ニ日本國內ノ紛擾恐クハ名狀ス可ラサルニ至

是ニ由テ之ヲ觀レバ戰敗國タル露國ノ政府驕傲ノ態度ヲ示スノ奇觀繼續スル間ハ媾和談判ノ調和ニ歸スルコト到底望ム可キニ非ズ而シテ露國ヲシテ其驕傲ノ態度ヲ拋棄セシムルニハ強銳ナル日本ノ陸軍ヲ以テ更ニ幾層ノ大打撃ヲ露國ノ陸軍ニ加ヘザル可ラズ簡言スレバ今日最モ必要ナルモノハ戰爭ノ繼續是ナリ全權委員ノ口舌ノ如キハ殆ンド何等ノ用ヲ爲サズ元來今回ノ媾和勸誘ハ何人ノ企圖ニ基クモノナリヤ其場合ヲ想像スレバ左ノ四箇ノ場合ノ中其孰カ一ナラザル可ラズ

- 一、列國ハ日露ノ媾和ヲ企圖シ米國ハ事實上列國ニ代ハリテ日露兩國ニ媾和ヲ勸誘シタルカ
- 二、全ク米國大統領ノ發意ニテ日露兩國ニ勸告ヲ爲シタルカ
- 三、露國和ヲ乞ハント欲スルモ露國ノ體面ヲ汚サンコトヲ恐レ竊カニ米國大統領ニ依頼シ媾和ノ勸誘ヲ爲サシメタルカ
- 四、日本政府ヨリ米國大統領ニ依頼シ媾和ノ勸誘ヲ爲サシメタルカ

若シ第一ノ場合ナリトセバ列國ハ日本ニ對スルノ好意アルニ非ズシテ單ニ自己ノ利害ヨリ打算シテ媾和ヲ勸告シ來リタルモノナレバ日本ハ誠意之ニ應スルヲ要セズ假リニ表面上之ニ應スルトスレハ露國ト共ニ談判ヲ開始シタル後之ヲ不調ニ歸セシメテ可ナリ

若シ第二ノ場合ナリトセバ日本ハ米國大統領ノ好意ニ對シテハ大ニ謝セサル可ラズト雖媾和ノ時機未タ到達セザルトキハ充分ニ之ヲ大統領ニ辯解スルノ必要アリ

若シ第三ノ場合ナリトセバ露國ガ誠意正心和ヲ乞フニ至ルマデハ媾和談判ヲ不調ニ歸セシメサル可ラズ然ラズンバ徒ラニ露國ノ爲メニ翻弄セラル、ノ恐アリ若シ第四ノ場合ナリトセバ日本政府ハ自ラ其責任ヲ負擔セサル可ラズ

何レニモセヨ媾和ノ時機果シテ到リタルヤ否ヤハ余ノ大ニ疑フ所ナリ日本國民タルモノハ媾和ノ聲ヲ聞イテ熙々トシテ樂シマンヨリハ寧ロ戰爭ヲ繼續スルノ覺悟ヲ爲シテ可ナリ

進平曰七首一因
人ノ腹心ヲ刺ス

呼シ特ナルノ此君以役遜
ムニ降抑我家四中昔
ル其サムモ國變多殿前日
モ心買ハ人ニ故父年余
カチガニ大對ル際九モ
鳴苦任ス天復スチ

之ヲ聞ク余ガ屢バ時局ヲ論ズルニ當テ外交當局者ハ之ヲ讀ンデ掣蹙管ナラ
ズ六月十日以後特ニ然リト爲ス而シテ七月十日外交時報ニ記シタル右ノ論
文ヲ見ルニ及ンデ大ニ恐慌ヲ來シ吾輩ノ處分ニ付議論紛々タリト云フ
七月二十一日慈母死去ス余ノ悲哀焉ゾ之ニ加フモノアラシヤ東京ニ假葬式
ヲ終リ本葬式ヲ郷里金澤ニ於テ行ハント欲シ二十四日午後六時弟松寺竹雄
當時東京控訴院檢事後、韓國統監府法務院檢察官ト共ニ新橋ヲ出發シテ金澤
ニ向ヒ二十五日到着シ二十七日葬式ヲ終リテ三十日ニ東京ニ歸ル
八月五日午後六時富山縣ニ向テ出發シ翌六日高岡ニ着シ景望樓ニ投宿ス高
岡教育會ニ於テ數日間引續キ法律ニ關シ講演ヲ爲スノ約アリシニ由リ同處
ニ行キタルナリ此約束ハ久シキ以前ニ成立シ八月三日ヨリ講演ヲ開始スル
ノ豫定ナリシガ慈母死去ノ爲メニ一旦此ノ約束ノ解除ヲ求メタルモ高岡ニ
於テハ講演ニ關スルノ準備悉ク整ヒ今更其準備ヲ撤回スルノ困難ナルハ言

ヲ待タズ且ツ余ノ代リニ同處ニ行クノ人物ヲ急速ニ求ムルモ亦困難ナルノ
事情アリ故ニ更ニ交渉ヲ受ケテ四日間講演ヲ延期シ八月七日ヨリ之ヲ開始
スルコト、爲シタルナリ

高岡滯在中東礪波郡教育會ノ爲メニ福野ニ於テモ亦法律ニ關スル講演ヲ爲
シ且ツ高岡ニ於テモ福野ニ於テモ時局ニ牽聯シテ余ノ意見ヲ述ベタルコト
アリ又高岡滯在中伏木ニモ行キ新湊ニモ行キ演說ヲ爲セリ八月十三日高岡
及福野ニ於ケル法律ノ講演ヲ終リタル後富山ニ行キ翌十四日婦負郡ノ教育
會ニ於テ一場ノ演說ヲ爲シ尋テ午後四時發ノ瀛車ニテ金澤ニ行キ金谷館ニ
於ケル學士及有志ノ會合ニ出席シ演說ヲ爲セリ此夜大浦屋ニ投宿シ八月十
六日東京ニ歸ル

高岡ニ於テハ高岡市教育會長志甫三良平氏、高岡市長堀二作氏、射水郡長藤井
務氏、及鳥山敬二郎、大橋十右衛門、石黒準太郎、菅野庄太郎、菅池岩吉、金部爲秋、金
瀬義明、山内秀一、横地永太郎、篠島久太郎、南西一郎、前川喜左衛門、宮崎久、佐伯有
平、小松茂三郎、野尻榮吉、岩崎辰治、沼田勇三郎、柴宏、杉江秀、川崎富次郎、豊本清一、

谷野善成、江守又一、福武知親、梅野安房、中村翰太郎、松島與信、星野隣、磯野小兵衛、谷野治越、關與三郎、山田直道、林喜太郎、富田健助、藤田忠雄、堀田忠義、北六一郎、江尻豊太郎、本郷榮藏、高井源四郎、川田鴻、武内與兵衛、川崎喜太郎、金剛芳太郎、片口安太郎、藻谷伊作、石原壽三、渡邊源太、田中直人等ノ諸氏ニ逢ヒ

福野及其附近ニ於テハ東礪波郡長箕浦元氏、舟木文次郎氏、及木村米次郎、藤田外次郎、岡田直軌、平石延近、片岸友吉等ノ諸氏ニ逢ヒ

伏木ニ於テハ藤井能三、菅谷二平、中西喜久次、岡本普喬、山谷寅松、城川豊吉、野村範家、井口久米吉等ノ諸氏ニ逢ヒ

新湊ニ於テハ吉野幸次郎、山内副忠、泉田與四郎、澁谷英、米林健藏、豊本覺太郎、米田六四郎等ノ諸氏ニ逢ヒ

富山ニ於テハ縣知事李家隆介氏、事務官鈴木隆氏、事務官久保通猷氏、事務官山村辨之助氏、婦負郡長前田則邦氏、及廣瀬謙次郎、梅野安房、矢合彌一等ノ諸氏ニ逢ヒ

金澤ニ於テハ本多政由氏、茂泉敬孝氏、吉村寅太郎氏、稻垣義方氏、河瀬貫一郎氏、

遷葬日當時余ハ
 爲ニ郷里ニ在リ
 八月十八日ハ
 母ノ疾大ニ漸ミ
 一タリシノ日ニ
 祭ヲシテ二十日
 年祭ハ亡父ノ一
 ハ戦死シ兄弟ナ
 儀チ下一家ト共
 リ天下一家ト共
 ニ多故今當日チ
 憶ヘバ胸九週ス

渡瀬政禮氏、西崎順太郎氏、飯尾二郎三郎氏、河合成一氏、西永公平氏、久田濟衆氏、杉中利平次氏、村田庄四郎氏、今井省三氏、本間好茂氏、市村塘氏、藤田外次郎氏、木村孝藏氏、下平用彩氏、久田督氏、市川仙太郎氏、青木儀太郎氏、松井敬勝氏、駒井徳太郎氏、高安右人氏、及中野勇平、清水兼之、小原行修、不破鎮吉、吉岡福忠、横井伊佐美、清水空平、鹿江佐六、石橋養元、林直等ノ諸氏ニ逢ヒタリ、金澤ハ即チ余ノ郷里ニシテ知人頗ル多ク隨テ右ノ外澤山ノ人士ニ逢ヒタリト雖諸氏ノ姓名ハ其當時直ニ之ヲ記録セザリシニ由リ記憶ニ誤謬アラントヲ恐レ逐一此ニ掲載セズ

歸京ノ翌々日即チ八月十八日南佐莊ニ於ケルノ城南會ニ出席シ二十一日新聞記者ト共ニ借樂園ニ會合ス毎日新聞ノ島田氏、日本ノ須崎氏、大阪朝日新聞ノ村松氏、萬朝報ノ圓城寺氏、報知新聞ノ上島氏、帝國通信ノ繁野氏、電報新聞ノ羽仁氏等及渡邊子爵、松浦藏原寺尾等ノ諸氏出席ス而シテ二十四日ニ至リ又南佐莊ノ會合アリ余及松浦藏原寺尾、讀賣新聞ノ前橋、報知新聞ノ上島、都新聞ノ大谷、萬朝報ノ圓城寺、電報新聞ノ羽仁、大阪朝日新聞ノ村松等ノ諸氏出席ス

此ノ日寺尾氏ニ逢フヤ否ヤ氏余ニ謂ツテ曰ク子愈ヨ休職ノ處分ニ逢ヒタリト余ハ職ヲ免ゼラル、ナラント覺悟セシニ休職ノ處分ニ逢ヒタリト聞テ稍ヤ意外ノ感無キ能ハザリキ會合者シヤンバン酒ヲ舉ケテ之ヲ祝シ曰ク子ガ此ノ如キ處分ヲ受ケタルハ以テ名譽トス可シト

翌二十五日愈ヨ休職ノ辭令ヲ受ケ官報ニモ亦休職ノ事ヲ記シ讀賣新聞ニハ早ク既ニ休職處分ノ不當ナルヲ論ズ蓋シ前橋氏ノ手ニ成リタルモノナラン之ヲ聞ク余ガ此ノ如キ處分ニ逢ヒタルノ遠因ハ開戦以前ヨリ桂内閣ノ爲メニ蛇蝎ノ如ク忌マレタルノ一事ニ在ルコト論ヲ俟タスト雖其最近ノ原因ハ七月十日ニ前記講和ノ時機果シテ到リタルヤノ論文ヲ外交時報ニ掲ケシメタルニ在リト云フ桂内閣ハ米國大統領ノ忠言ヲ誘致シ以テ軟弱ナル條件ノ下ニ講和條約ヲ締結セントスルニ當リ余ハ此ノ事實ヲ探知シテ之ヲ非難シ且ツ米國大統領ノ忠言ヲ誘致シタルノ件ヲモ右論文ニ記シタルヲ以テ外交當局者ハ恟々惶々終ニ休職處分ヲ以テ余ニ臨ミタリト云フ

余ノ休職ト爲ルヤ最モ早ク余ノ家ニ來リタル者ハ鈴木券太郎氏ナリ之ヨリ

進午日觀難汝ヲ
 途八九月二十日
 余上陸シメテ
 於テ初メテ
 博士ノ職ヲ
 授ケルニ至リ
 上食ヲ終ヘテ
 色瀆ヲ博シ
 ナリ一箇ノ博
 ナリ當時ノ者
 ヒタリナラシ
 ハニ元ナラシ
 ト元知カレキ
 水元知カレキ
 志元知カレキ
 元同ノ元

數日ノ間土方寧氏、高野岩三郎氏、鹽谷恒太郎氏、中村進午氏、筈克彦氏、小野塚喜平次氏、金井延氏、平沼騏一郎氏、松崎藏之助氏、斯波淳六郎氏、鶴澤總明氏、大隈伯代理副島八十六氏、葛岡信虎氏、後姓ヲ中島ト改ム原田豊次郎氏、武部直松氏、中川孝太郎氏、福田徳三氏等來客頗ル多ク二十八日山川健次郎氏余ノ家ニ來リシ時ノ如キモ大坂朝日新聞ノ村松恒一郎氏、清國人孫逸仙氏、其他種々ノ人士相繼テ來リ之カ爲メニ如何ナル人士モ長キ談話ヲ爲スコト能ハザリキ是等人士悉ク余ノ爲メニ同情ヲ表スル者余モ亦此ニ至リ感激措ク能ハス

休職ノ處分ニ付セラレシヨリ數日ノ間余ノ家ニ達セシ書翰モ亦堆積累々實ニ幾百通ナルヲ知ラス恰モ是元旦賀狀ヲ受ル時ノ如シ而シテ之ヲ開ケハ或ハ余ニ吊詞ヲ送り或ハ余ニ慶詞ヲ送り慶詞ニ續クニ吊詞ヲ以テシ吊詞ニ續クニ慶詞ヲ以テシ其狀頗ル奇ナリ和田垣謙三氏相州片瀨龍ノ口ヨリ余ニ送リタル端書ニハ馬一匹ヲ畫キ其肩ニ雄心亦不受伏擬辱トアリ又農科大學教授本多靜六氏ノ養父本多晋氏ハ余ニ送ルニ左ノ二首ノ和歌ヲ以テセリ

ヲリニフレテヨメル

打ツ、キ長雨フル日ニ落流チキセキ止メナバ行水ノイヤ逆マカムアゲツラ
フコトアルトキニ人ノ口阻ミフサガバ世ノ中ノイヨ々々騒ガムヒトノ口堰
戸ノ水モオノツカラアクニ任カシテ塞カヌゾヨキ

可齋居士

寄ル浪ノウキ瀬ニタチテ難波瀉ミクニノタメトミヲツクシケム

晋

本多晋氏素是彰義隊ニ屬セシ人今ヤ老境ニ入ルト雖國ヲ愛フルノ心昔日ニ
減セス而シテ余ニ寄スルニ此ノ如キ同情ヲ以テセラル是余カ欣々然トシテ
此和歌ヲ珍藏スル所以ナリ其他此際ニ落手シタリシ子爵渡邊國武氏、山川健
次郎氏、穂積陳重氏、富井政章氏等ノ手紙皆之ト共ニ余ノ家ニ珍藏ス

八月二十七日南佐莊ノ會合ニ出席シ八月三十日同志記者ノ爲メニ芝浦竹芝
館ニ招カル當日ノ來會者ハ大坂朝日ノ村松恒一郎氏、萬朝報ノ高畑定次郎氏
二六ノ工藤鐵男氏、時事ノ對馬機氏、報知ノ上島長久氏、都ノ大谷誠夫氏、東京日

々ノ橋本善勝氏、報知ノ大石熊吉氏、毎日ノ川尻東馬氏、實業ノ日本ノ増田義一
氏、同社ノ小林大治郎氏、やまごノ福田常松氏、讀賣ノ前橋伊八郎氏、萬朝報ノ圓
城寺清氏、電報新聞ノ羽仁吉一氏、以上十五名ナリ是等諸氏皆余カ夙キニ休職
處分ヲ受ケタルニ關シテ特ニ同情ヲ表センカ爲メニ此ノ會ヲ催フシタルモ
ノ其懇情今ニ至ルマデ余ノ肺肝ニ銘ス

是等諸氏ニ招カル、ノ前後余ニ對シ辭職ヲ勸ムル者アリ曰ク時局ニ關シ議
論ヲ公ニセント欲セバ先ツ職ヲ辭シテ己ノ身ヲ自由ニスルニ如カス今ヤ子
休職ノ處分ニ逢ベリ之ヲ機トシテ職ヲ辭スル亦可ナラスヤト是等諸氏皆固
ヨリ余ニ對シテ同情ヲ寄スル者故ヲ以テ余ハ敢テ是等諸氏ト抗論セスト雖
此ノ如キ議論ハ余ノ素志ニ反スル者ナリ余ノ考フル所ヲ以テスレバ大學教
授ハ時局ニ關シ議論ヲ爲スモ差支無キ程ニ言論ノ自由ヲ有シ余ハ從來此ノ
言論自由ノ節圍内ニ於テ議論ヲ公ニシタルニ過ギス今ヤ政府ハ文官分限令
ノ正條ニ照ラシテ余ヲ休職處分ニ付ス是不法ニシテ不當ナリ此ノ如キ處分
ハ他日之ヲ取消サシムルコトヲ得可シ然ルニ自ラ進ンデ職ヲ辭スルハは大

遊音日八月二十
六日松浦君
六日松浦君
遊音日八月二十
六日松浦君
遊音日八月二十
六日松浦君

キ當ノ下ニ全重
大ナル職ハスル
シテ位ニ止マシ
テ余ノ朝ニ對シ
ハ余ノ朝ニ對シ
サレテ所ナクハ
テ此ノ時ニ對シ
山川ノ長ク更ニ
三ノ日ノ量ヲ十
念下ノ必善ク此
不爾復スヘキヲ
信回シテ暫ク思
テ止マレリ而シ
ニ總長職ニ就キ
マリ乃此職ニ就
盡キタルハナリ

學教授ノ言論自由問題ヲ拋棄スルノ所爲ニシテ大學ヲ愛シ學界ノ獨立ヲ計ル者ノ爲ス可キ行爲ニ非ス余ハ教授ノ職ヲ辭セズトモ恰モ之ヲ辭シタルト同様ニ言論ヲ縱ニセント欲ス既ニ此ノ決心アル以上ハ教授ノ職焉ゾ辭スルニ足ランヤ此ノ如キ決心ハ此ノ時始メテ生シタルモノニ非スシテ前段既ニ述ベタル如ク明治三十七年十一月十二日余ガ文部大臣ノ干涉ヲ受ケタルノ後ニ於テ余ハ職ヲ辭ス可キヤ否ヤノ問題ヲ掲ケ機ニ觸レ時ニ應シテ之ヲ同志及他ノ友人ニ謀リシニ皆之ヲ辭スルノ不得策ナルヲ説キタレバ余ハ意ヲ決シテ職ヲ辭セサルコト、定メ以テ一方ニ於テハ依然トシテ時局問題ヲ論議シ他ノ一方ニ於テハ言論自由問題ノ衝ニ當ルコト、爲シタルニ由リ今回休職ノ處分ヲ受ケタルニ際シテ違カニ職ヲ辭ス可キヤ否ヤノ問題ハ實ニ再考ノ價值無キモノナリ

此ノ時ニ當リ世人往々余ヲ誤解シ甚シキニ至テハ余休職ノ處分ニ付セラレ忽チ政府ニ屈シタリト考フル者アリシガ如シ余ガ先年來ノ主義ヲ一貫セシニ拘ラズ此ノ如キ誤解ヲ被ムルハ余ノ大ニ意外トセシ所然ルニ幸ニシテ藏

原惟利氏ハ余ノ爲メニ辯護ノ勞ヲ取ルコト最モ勤メタリ氏ノ人タル放膽ニシテ細心大ニ政治家ノ性格ヲ備フ其人情ノ機微ヲ穿チ茫々漠々タル政界ノ事情ヲ髣髴ノ間ニ摸索スル如キハ獨得ノ長所ニシテ其友人ニ接スル甚タ信義ヲ重ンジ友人ノ災ニ罹ルヲ視ルコト恰モ自身ニ之ニ罹ルモノ、如シ故ニ余ガ世人ノ爲ニ誤解セラレシ時ノ如キモ氏ハ其政治的眼識ヲ以テ余ガ不利ノ境遇ニ陷キランコトヲ豫知シ辯解最モ勤メタリ余ガ氏ニ負フ所亦大ナリト謂フベシ

八月三十一日ノ日本新聞ヲ見ルニ左ノ論文ヲ掲グ

○博士連ニ教ユ

博士ハ口ト容體トニテ作り、人ニ教ユル道具ナルニ、我今博士ニ向ツテ教ユル所アラントス、是レ業既ニ冠履顛倒ノ異象ニ屬ス、事ノ咄々亦知ルベカラズヤ、初メ日露交渉ノ艱難ニ陷イル大學教授ニシテ強硬ノ見ヲ持シ、之ヲ掲ゲテ朝野ニ呼號セル者七人アリ、世ニ之ヲ七博士ト稱シ、聞テ以テ空谷ノ響音トナシ、見テ以テ萬綠叢中ノ一點紅ト爲セル者亦或之レアリ、博士等之ヲ見テ竊ニ得

意ノ色アリ、督學其ノ本分ニアラザルノ謂ヲ以テ彼等ニ説キテ其ノ舉ヲ中廢セシメントスレバ、即チ昂然トシテ之ヲ却ケ、揚言シテ曰ク、我等亦國民ノ一部ナリ、國歩今艱難ニ屬ス、乃チ乏ヲ大學ニ承クル者モ義宜シク坐視スベカラズト、或ハ官界ニ論議シ、或ハ江湖ニ呼號スル依然ナリ、政府終ニ意ヲ決シテ其一人ヲ斬ル、而シテ連盟六人瞠乎起タズ、即チ更ニ聲言シテ云フ、我等ノ本分ハ教職ニ在リ、今國事ノ爲ノ故ニ、舉ゲテ其ノ業ヲ棄ツルハ、是レ我等ノ本分ヲ沒却スルモノナリト、是レヨリ政府亦七博士ヲ意トセズ、而シテ江湖終ニ七博士ヲ口ニスル者ナシト云フ。

甚ダシイ哉、博士等ノ前後其ノ勇怯ヲ異ニスルヤ、初メ彼等ノ督學ニ抗言シテ國民ノ義務ヲ説ク、議若シ容レラズンバ官職ヲ一擲シテ亦願ミズ、潔ク國民ノ裁務ニ殉センコトヲ欲シタルハ論ナキナリ、此ノ時ニ當リテ彼等ノ重シトスル所ハ國事ニ在リテ大學教授ニアラズ、若シ督學者ニシテ足下等ノ云フ所ハ本官ノ見ル所ト異ナリ、本官ハ此ノ如キ教授ノ其ノ職ニ在ルヲ好マズ、足下須ラク去就ヲ明ニスベシト謂ハ、彼等ハ快ク大學教授ノ職ヲ擲チタルハ明

ラケシ、今ヤ當局ハ事實ヲ以テ之ヲ博士ニ告ケタリ、戸水氏ノ休職ハ夫レ然ラズヤ、若シ戸水氏ノ休職ト面前ノ告白ト異ナルコトアリトセバ、其ノ休職ノ告白ヨリ一層強硬ナル手段ナル一點ニ在ルノミ、然ルニ博士等ハ面前ノ誠告ニ抗スルニ勇ニシテ事實ノ告白ニ從順ナルハ獨リ何ゾヤ、彼等或ハ戸水氏ノ休職ハ官廳ノ都合ニヨル國事ニ奔走スルガ爲ニアラズト謂ハンカ、則チ國民ハ博士トハ其ノ物カト一笑センノミ、且ツ博士等ハ本分ヲ沒却スト云フ謂ヘラク、我等ノ職ハ教授ニ在リ、學問ヲ子弟ニ授クルヲ以テ本分トス、今他ノ故ヲ以テ教授ノ職ヲ擲ツハ、是レ己レノ職務ヲ忘ル、ニ等シト、智ハ以テ諫ヲ拒グニ足ルトハ是ノ謂乎、此ノ如キ理窟ハ自カラ欺クニ足ルモ以テ江湖ヲ欺クベカラズ、自己ノ職業ヲ以テ本分トスルハ、是レ泰平無事ノ時ニ謂フベク、國家興亡ノ際ニ説クベカラズ、凡ソ人ニハ職業ノ本分アルト共ニ又國民トシテノ本分アリ、職業ノ本分ハ末ニシテ、國民トシテノ本分ハ本ナリ、國家ノ一朝緩急アルニ臨メバ、人ハ皆各個ノ本分ヲ棄テ、須ラク國民タル本分ニ復スベシ、士農工商舉ゲテ兵役ノ義務ニ就クハ、即チ之レガ爲ニシテ博士等ガ督學ニ抗言シ

タル根本義ハ必ズヤ之ニ存シタルベシ故ニ博士等ガ國事ニ容喙シ、督學ノ誠告ニ抗論シタル時彼等ハ少ナクトモ今日ヲ以テ末ノ本分ヨリ本ノ本分ヲ重シトスベキ時期ナリトシタルヲ推斷スルヲ妨ゲズ然ルニ連盟ノ一人ハ官憲ト所見ヲ異ニスルガ爲ニ斬ラレタルニ關セズ他ノ六人ハ本分說ヲ以テ一時ヲ糊塗スルハ獨リ何ゾヤ。

更ニ惡シキハ六博士ガ自己ノ立脚地ヲ發掘セラレテ尙ホ靦然タルニ在リ。教授ニシテ國事ニ容喙スルハ少シモ害ナキノミナラズ、專攻ノ學術ヲ以テ國家ニ貢獻スルハ活學者ノ努ムベキ所トハ、七博士ガ初メ國事ニ容喙スル時ノ素論タリシヲ推想スルヲ得ベシ。戸水氏ノ休職ハ官憲ガ強硬ニ之ヲ否定シタルヲ示スモノニシテ、連盟博士ニシテ自己ノ所見ニ忠實ナラバ、萬之ヲ傍觀スルノ理アルコトナシ。教育家ニシテ政論ニ從フヲ得ルヤ否ヤハ前年曾テ一タビ論セラレタル問題ニシテ、世ノ風潮ハ之ヲ是認スルニ傾キ、政府モ亦甚ダシク干涉シ得ザルハ今日マデノ趨勢ナリシナリ。七博士ノ運動ガ暫ラク官憲ノ看過スル所トナリタルハ、則チ之レガ活キタル證據ニシテ、若シ彼等ニシテ戸水

氏ノ休職ヲ默認セバ當ニ自己ノ所見ニ忠實ナラザルノミナラズ、併セテ世ノ好風潮ヲ打撃シタル罪ヲ甘受セザルベカラズ我等ハ夫ノ六人者ニ誨告ス足下等須ラク督學ノ誠告ニ抗論シタル態度ト戸水氏ノ休職ヲ默過スル一事ト、如何ニシテ一致セシメ得ル乎ヲ熟慮セヨト、空谷ノ恐音、萬綠叢中ノ一點紅、彼ハ仇花ニシテ此ハ狗ノ戯フル、ナリシ乎(塞の倉)

之ニ對スル建部遜吾氏ノ言ハ載セテ九月五日ノ日本ニ在リ即左ノ如シ

○塞ノ倉主人ニ與フル書

『日本』ノ論說記者塞ノ倉主人足下。足下ノ『博士連ニ與フ』ト題スル一篇洵ニ近時痛快ノ文字ナリ。予ハ所謂七博士ノ一人ニアラズト雖モ、近時ノ事務ニ對スル行動ニ於テハ多ク之ト步調ヲ同ジウセル者、乞フ暫ク予ガ親シク觀聞スル所ヲ舉ゲテ足下ノ明教ヲ求メムカ。

足下當局者ヲ以テ言論ノ自由ヲ抑遏スト爲ス、遂ヘリ。曩ニ當局大臣予等ニ對シテ慎重ノ態度ヲ取ルベク忠言セリトノ世評アリシヤ、予ハ其事ノ明世ニア

ルマシキヲ思ヒ其或ハ當局大臣ノ盛徳ヲ傷ケムコトヲ憂ヒ責任アル某先輩ニ面晤ヲ求メ當局ノ真意毫モ學者言論ノ自由ヲ抑遏スルニ在ラザルノ證言ヲ領セリ是レ世ニ風評セル當局先輩ノ予等ニ對スル好意ニ對シテ千載董氏ノ史筆ヨリ明治當局ガアラヌ嚴譴ヲ蒙ムルヲ豫メ拂拭スル先輩ニ對スル予ノ好意ニ外ナラズ而シテ其實證ハ予ガ爾來貴紙及其他ニ於イテ公表セル言説ガ何等ノ奇禍ヲ惹カザリシニモ明確ナリトス。

足下又タ戸水博士ノ休職處分ヲ以テ博士ガ國民トシテノ本分ヲ竭セルヲ曲トセル當局ノ非遠ニ出ヅト爲ス誤レリ博士休職ノ理由トシテ舉ゲラレタル文官分限令ノ正條ハ明ニ官廳ノ都合ニ本ヅク者タルヲ掲ゲテ復他ノ理由ヲ掲ゲズ若シ他ヲ以テ治安ヲ妨害シ若クハ秩序ヲ紊亂スル政治的若クハ類似ノ行動ト爲スカ之ヲ處分スル固ヨリ宜ク正々堂々之ガ罪過ヲ詳明スベキノミ耳ヲ掩ウテ鈴ヲ愉ミ併セテ天下ノ耳目ヲ糊塗スルガ如キ陰險陋劣ナル行動ハ之ヲ明治昭代ノ有司ニ擬スルダニ憚多キコトナラズヤ羅馬法ノ講座ニ任ズルニ堪能ナル戸水博士ニ代フルニ同様堪能ナル宮崎博士ヲ以テスル是

レ所謂官廳ノ都合ナル者ナルベシ予ハ斷ジテ休職理由ノ正解スベクシテ曲解スベキ者ニ非ザルヲ信ズ。

斯ノ如ク自由ナル制度ノ下ニ斯ノ如ク公明ナル有司ノ下ニ聊カ犬馬ヲ君國ニ効スヲ得ルノ國民ハ實ニ多幸ナリ而シテ予ハ予ガ亦這國民ノ一員タルノ光榮ヲ有スルヲ欣ブ唯近時一點ノ陰暗ノ此多幸ノ心情ニ投影セルハ謙和ノ成立其條件ノ極メテ陰性ナリトイフ世評ナリ而モ僻阪ノ地世評ニヨリテ直ニ舉止牽止スルガ如キ世ニ所謂先輩ノ好意的忠言ヲ服膺シテ「慎重ノ態度」ヲ取ル者ノ敢テセザル所若シ夫レ天下ノ爲ニ履霜ヲ警メ未ダ陰雨セザルニ綱繆ノ要ヲ説クハ乃チ是レ予等ノ事時ニ及ビテ寸毫ノ獻替ヲ君國ニ致サハル何ツ多幸ナル國民タルニ在ラムヤ不日病母ヲ奉ジテ京ニ入ルノ日侍養ノ餘閑希クハ足下ノ言ヲ與リ聞カム九月二日北越横雲橋畔ノ村居ニ於イテ水城生再拜

右ノ二論文ハ其論旨孰カ是ニシテ孰カ非ナルカ日本ノ論旨ハ之ヲ一見スレ

遊者曰内慈母
 新アリ父外孫
 極事トスベキ
 當利ノ成立キ
 實ニ甚タ揚氣
 養ノ未タ足ラ
 養ノ切ニ以テ
 天ニ勸事ニ任
 夫ノ器ヲ以テ
 如キ事ヲ行フ
 シノ却テ意ヲ
 揚ケルモ是レ
 余カ器トシテ
 也思スル者ナ
 可ニルヲ適シ

甚ダ是ナルカ如シ然レトモ余休職ニ逢フニ當テ同志諸氏ハ冷然之ヲ雲煙
 過眼視シタルニ非ズ建部氏ノ論旨ハ之ヲ一見スレバ甚ダ當時ノ事情ニ通ゼ
 ザルモノ、如シ然レトモ之ヲ政府ニ對スルノ「アイロニー」ト解釋シ反語ヲ用
 ヒ政府ヲ暗譏シタルモノト解釋スレバ其論旨亦非ナリト謂フ可ラズ何レニ
 モセヨ其當時ニ於ケル余自身ノ感覺ヲ述ブレバ當初余ハ寺尾、金井、建部等ノ
 諸氏ノ意氣果シテ揚レリヤ否ヤニ付テ多少ノ疑問ヲ抱キタルガ故ニ建部氏
 ノ議論ヲ見テ未タ甚ダ満足スルコト能ハザリシモ日本ノ議論ハ少ク酷ニ過
 キタリト考ヘタリ然レトモ是只休職當時ニ於ケル余ノ感覺ニシテ時ヲ經ル
 ニ從ヒ同志諸氏ガ囂々然トシテ益ス政府ノ處置ヲ非難シタルハ天下ノ知ル
 所ナリ
 九月一日寺尾、藏原兩氏ヨリ手紙來ル曰ク九月四日南佐莊ニ於テ城南會ヲ開
 カント余乃チ九月三日ヲ以テ返書シテ曰ク
 拜復講和條件ノ大要日本ニ傳ハリテヨリ明日ニ至ルマデ幾ンド一週間而
 シテ漸ク明日ヲ以テ城南會ヲ開クハ甚ダ緩漫ニ失スルノ感無キ能ハズ此

亭曰予力般
 爲メ憤最モ
 者チハ所ナ
 多ハルカ事
 トモシハ心
 疑子ハ亦不
 ヒ多ハルカ
 中病博士カ
 事件ナシテ
 等寸ニテカ
 シンノ事際
 ラシ解疑ル
 然レタメテ

ノ如クシテ集マル所ノ人物ハ之ヲ稱シテ同志ト謂フ奇モ亦極マレリ諸君
 若シ眞ニ國ヲ愛ヘラレ候ハ、何卒明日ノ會ニ於テ斷乎タル處置ニ出テラ
 レ決然タル意志ヲ示サレ度希望仕候小生ハ諸君ノ決心如何ニ付少シク疑
 ヲ懷キ候ニ由リ明日ハ參上ニ不仕疑問氷釋スルニ至リ候ハ、他日陳謝ノ上
 參上スルヤモ測ラレズ候草々頓首
 九月三日夜
 寺 尾 亨殿
 藏 原 惟 利殿
 戶 水 寬 人

是甚ダ失禮ニシテ物騒ナル手紙ナリ然レトモ試ミニ見ヨ此手紙ニモ記載シ
 タルガ如ク講和條件ハ數日以前ニ業既ニ天下ニ發表セラレ其條件ハ徹頭徹
 尾軟弱ヲ極メ余之ヲ見テ切齒扼腕憤慨裂眦皆瞬時モ坐視スルコト能ハサルカ
 故ニ城南會ノ一刻モ速カニ開カレンコトヲ希望セシニ松浦氏旅行シタルノ
 故ヲ以テカ抑モ亦他ニ相當ノ原因アリテカ漸ク九月四日ヲ以テ城南會ヲ開
 カントノ報ニ接ス余此ニ於テ怒髮冠ヲ衝クノ慨アリテ此ノ手紙ヲ書キタル

ナリ然ルニ幸ナル哉寺尾藏原ノ兩氏洪量ニシテ余ノ無禮ヲ措イテ問ハズ且ツ此ノ時既ニ講和條件ノ甚ダ軟弱ナルヲ見テ憤然慨然斷然決然政府ノ處置ヲ非難シ其意見ヲ世ニ公ニシツ、アリ是ヲ以テ余モ亦一時ノ憤激ヲ忘却シテ兩氏ト一致ノ行動ヲ爲セリ

此ノ時ニ當リ余ハ屢バ新聞記者ニ面會シテ余ノ意見ヲ述ベタルヲ以テ余ノ言ニシテ新聞ニ出タルモノ頗ル多シ試ミニ其二三ヲ舉クレバ
九月二日ノ日本ニ曰ク

○戸水博士ノ評論

樺太分割償金撤回等ノ大讓歩ヲ遺憾トスルハ舉國一致ニシテ予モ亦タ之ヲ残念ト思ハザルニ非ザルモ滿洲撤兵ノ一條ニ至リテハ(若シ世上ニ傳ヘラルル所ノ如シトスレハ)遺憾中ノ大遺憾ナリ露國ト共ニ日本ノ撤兵ヲ約スルハ一見穩當ナルガ如キモ實ハ非常ノ不權衡ニシテ宣戰ノ大目的タル東洋ノ平和ハ再ビ之ガ爲ニ擾亂セラル、ヲ免レズ露國ハ滿洲ニ於テ撤兵スルモ「ニコリスク」其他便宜ノ處ニ於テ其大兵ヲ駐屯シ數時間ニシテ之ヲ滿洲ニ送ルヲ

得ルノミナラズ他方ニ於テ目下計畫サレツ、アル蒙古橫斷鐵道ニ依テ北京ヲ壓迫スルヲ得ベク又タ伊犁甘肅方面ヨリ陝西山西ヲ通シ清國ニ臨ムニ難カラズ斯ノ如ク露國ハ三方ヨリ清國ニ對シ其壓迫ヲ加ヘ東洋ノ平和ヲ擾亂ス可キ便宜アルニ拘ラズ我國ハ滿洲ニ於テ相應ノ兵力ヲ有スル外清國ニ向テ壓力ヲ加フルニ由ナク隨テ東洋ノ平和ヲ支障スルニ由ナシ租借地域ニ於テ若干ノ兵力ヲ有スルコトハ得ト雖ドモ到底東洋全局ノ平和ヲ保障ス可キモノト謂フ可ラズ滿洲ノ防備ノ爲メニ日本ノ武力ヲ借ルハ清國大官ノ輿論ト稱スルモ差支ヘナシ此好機ニ際シ撤兵ヲ約スルガ如キハ何等ノ成算ニ出タルカ頗ル疑フ可シ更ニ之ヲ兩交戰國ノ地位ヨリ見ルモ又タ日本ニシテ前記ノ不權衡ニ満足セザル限り此ノ不權衡ヲ恢復セザルヲ得ズ然ルトキハ再ビ滿洲ニ於テ干戈相見ルノ機再ビ來ル可キハ殆ド疑フ可ラス予ハ此點ニ於テ今回ノ和約ヲ以テ不定期ノ休戰ト見ルヲ却テ真相ヲ得タリトス此ノ滿洲撤兵ノ遺算ニ比スレハ韓國問題モ閑却シテ可ナリ樺太ト償金ノ問題ノ如キモ滑稽ニ近キ失敗トシテ之ヲ看過スルヲ得ン予ハ飽迄モ新聞記事ノ誤謬ニ

シテ滿洲撤兵ノ一項ガ虛報ナランコトヲ望ム云々

九月三日ノ二六新聞ニ曰ク

○戸水寛人氏

國旗ノ上ニ黒イ布ヲ附ケタ位デハイケナイ全然黒布ニシテ、小村ガ歸ル時コレヲ軒頭ニ掲ゲルガ宜シイ、世間デハ批准交換ヲ中止スル云々ノ議モアルガ、コレハ却々容易ニハ出來ナイ、五六名ヲ處分シナイ限りハ……夫レダカラトテ談判ヲ中途ニ拒絕スル事ガ全ク出來ヌト云フ事ハ無イ、ソコガ全權ノ技倆ダ、今日ノ外務省ハ通辯ニ過ギナイ、小村ハ通辯ノ親分ダ、内閣ハ議會前ニ交迭シマセウ、逆モ此内閣デ増税モ何モ有ツタモノデハナイ

九月六日ノ報知新聞ニ曰ク

○戸水博士ノ憤言

イヤオ待タセ申シマシタ、講和ノコトデスカ、オ話シ申シマシヤウ、全體今度ノ

條約ハ眞面目ニ批評スル價值ガ無デスナ、事々物々凡デ非デス、第一償金ガ取レ無イノハ國家ノ大損害デスガ、露國側カラ言ヘバ談判ハ對等ノ形式ヲ取ツタノデ、敢ヘテ請和ヲシタヤウニナツテ居無イカラ或ヒハ當然デアルカモ知レマセン、第二ニ樺太ノ分割デスガ、既ニ軍事的ニ占領シテ居ル土地ヲ返ヘスナドハ滑稽ノ沙汰デス、無論論ズル價值ハアリマセンガ之ハ他日必ズ兩國ノ不和ノ種子トナリマス、第三ニハ沿海州ノ漁業權デスガ、之レハ單ニ有名無實ノ獲得デシヤウ、何故カト云フニ船許リデ漁業ハ出來無イ、漁業ニハ陸上ノ設備モ相當ニ要スル譯デアルカラ彼様條約デハ到底同等ノ權利ハ得ラレナイ、第四ニハ朝鮮境上ノ撤兵問題デス、朝鮮ハ由來事大主義ノ國デアツテ露ヲ怖レ我國ヲ怖レ無イノデアルカラ、到底道理上撤兵ハ出來無イ譯デアアル、之モ大失敗デアアルガ、更ニ我國ニ取ツテ損害ノ最モ大ナルハ滿洲撤兵デス、表面上ハ對等ノ撤兵デアアルガ、露國ハ「ニコリスク」ニ兵ヲ駐屯セシメテ、「グロデコフ」ヲ經テ哈爾濱ニ出ルノニ僅數日ヲ要スルノミデアアルガ、我國ノ狀況ハ大ニ之トハ異ナツテ居ル、又北京ハ常ニ露國ノ壓迫ヲ受ケテ居リ、蒙古橫斷鐵道モ將ニ出

來ントシツ、アル上ニ伊犁地方ニ於ケル勢力モ亦益々盛ニナツテ居ルカラ、山西地方ヲ經テ直隸ヲ歴スルノハ譯ノ無イ事デアアル、又露國ハ北京ノ大官ニ賄賂ヲ使ツテ彼等ヲ自家藥籠中ノ者トシテ居ルカラ、我國ガ滿州ニ割據セシメバ大官カラ大ニ行動ヲ制限セラレルダロウ、此度ノ平和ヲ見テモ既ニ袁世凱ナドハ日人與シ易キノミト言ツテ居ルサウデアアル、東清鐵道ナドモ滿州撤兵ノ曉ニハ殆ド無用ノ長物デアアル一日一哩五圓ノ損害ガアルト云フデハ無イカ左様サ今カラ御批准ヲ拒ムト云フコトハ列國ノ信用ヲ失フ譯ニナルカラ出來マイガ、或場合ニハ此モヨカロウト思フ、即チ其ハ日本全國ヲ沸騰セシメルノデアアル、國論ガ沸騰スレバスル程國家ノ幸福ダ、激烈ナ反對ガアレバアル程國家ノ幸福ダ、内閣ノ諸公モ斯ク國論ノ沸騰スルノヲ見テハ後悔スルダラウ後悔スレバ其代價トシテ宜シク處決スベシダ、退隱ス可シダ、

當時講和條件ノ甚タ軟弱ナルヲ見テ閣下ニ伏シテ批准拒絕ヲ哀願スル者頗ル多ク嚴父戸水信義モ亦他ノ老志士ト共ニ哀願書ヲ奉呈シ其事實ハ九月四

日ノ東京朝日新聞及他ノ諸新聞ニ見ユ東京朝日新聞ノ記事ハ即チ左ノ如シ

○老志士ノ上奏

當代ノ老志士中島錫胤、安倍井磐根、鈴木重遠、本多晋、本多林、學博士嚴父、戸水信義、戸水法學博士嚴父、岡谷繁實等ノ諸氏ハ今回ノ屈辱的講和ニ對シ深ク憤慨スル所アリ、一片ノ赤誠禁ズル能ハズ遂ニ閣下ニ伏シテ講和條約破毀戰爭繼續ノ事ヲ哀願スルニ決シ去三十日細川文事祕書官長ニ宛テ左記ノ願書ヲ呈出シタル所書式ニ違フ所アリシ爲メ一旦下ゲ渡シトナリシヨリ更ニ調製ノ上去二日ヲ以テ改メテ捧呈シ直ニ採納アリタリトイフ因ニ右署名者中中島氏ハ文政十二年生、鈴木氏ハ同十一年生、安倍井氏ハ天保三年生レニテ何レモ七十以上八十二近キ高齡ナルガ其他モ大抵六七十歳以上ノ人々ノミナリ

姑息ナル講和ヲ排斥スルノ請願書

誠意ヲ披瀝シ謹ミテ奉請願候私共幸ニ聖世ニ生レ無疆ノ德澤ニ沐浴シ常ニ皇恩ノ辱キニ感泣罷在候特ニ昨春開戰已來皇師連戰連捷振古無比ノ偉勳ヲ奏シ威武普ク海ノ内外ニ光被致シ候段是レ偏ニ皇室御稜威ノ致ス所ト深ク

威嚴仕候 聖天子上ニ在シマシ輔弼ノ臣亦忠款ヲ致スノ今日軍國ノ政務關外ノ臣民更ニ私議スベキノ限ニ無之候得共熟ラ目今ノ時局ヲ通觀仕候得者眞ニ憂憤慷慨ニ堪ヘザルモノ有之臣子ノ分義之ヲ默視スルニ忍ビス乃チ越俎ノ罪ヲ忘レ敢テ赤誠ヲ披キテ謹ミテ鄙見ヲ上陳仕候間何卒乙夜ノ覽ヲ賜ハラシコトヲ伏テ奉悃願候

抑モ今回開戰ノ目的ハ露國ノ東洋ニ對スル禍心ヲ根本ヨリ絶滅シテ世界永遠ノ平和ヲ確立スルニ有之候事ハ今更嗚々ノ要無之聖詔ノ宣示アラセラレタル所炳トシテ甚ダ明白ニ御座候帝國海陸軍ハ此聖旨ヲ奉體シテ戰鬪ノ事ニ從ヒ一年有餘ノ間ニ於テ絶大ノ偉勳ヲ奏シ國民ハ亦協同一致ノ實ヲ舉ゲ後援ノ責務ヲ果シツ、有之候得共開戰ノ目的ヲ達成スルニ前途尙遼遠ニ屬シ從ツテ今日ハ未ダ講和ノ時機ニ無之候處會々米國大統領ノ友誼アル提議ニ依リテ敵國ト平和談判ヲ開クノ運ト相成候ハ誠ニ無餘儀次第ニ候故此上ハ外交ヲ以テ當初開戰ノ目的ヲ達スルニ努力可致從テ講和條件ヲ按定致候ニ就テモ常ニ此大目的ヲ念頭ヨリ離スベカラザルハ實ニ當然ノ理數ト奉存

候帝國政府ハ果シテ如何ナル講和條件ヲ敵國使臣ノ前ニ提示シタルヤハ明知スルノ限ニ無之候得共外電ノ傳フル所ヲ眞實ト致候得者其條件ハ聊カ輕寛抑損ニ失スルノ憾有之敵ヲシテ悉ク此條件全部ヲ認了セシムルモ恐クハ以テ開戰ノ目的ヲ達スルニ足ラザル様思考仕候加之帝國政府ニ於テハ此輕寛ナル條件スラ勦モスレバ之ヲ讓歩セントスルノ意向有之哉ノ風說往々道路ニ流布致候特ニ傳フル所ニ據レバ元老舊勳者ト稱フル側ニ於テ頻リニ平和ノ早カラシコトヲ冀ヒ假令要求條件ニシテ讓歩スルトモ曲テ平和ノ成立ヲ期セザルベカラズト主張シ殆ト我提出條件ノ主要條項ヲ拋棄シ屈辱的講和ノ局ヲ結バントスルヤニテ人アリ其不可ヲ論スル時ハ或ハ世界列國ノ同情ヲ失ハザルノ程度ニ於テ終結セザルベカラズト強辯シ或ハ軍氣ノ喪亡軍費ノ匱乏ヲ唱ヘテ戰鬪繼續ノ不可能ナルヲ啣テ世人ヲ反駁スルニ於テハ口實ヲ設ケテ人言ヲ箝シ轉々人意ヲ懊惱セシメ國情ヲ逆亂セシメントスルノ杞憂アリト相唱フルノ形勢ニ傳聞仕候私共斷ジテ此事ナキヲ確信仕候得共若シ不幸ニシテ事實ナリト致候テハ開戰ノ理由ハ遂ニ徒爾ト相成可申眞ニ

痛嘆憤慨ノ至リニ不堪候由來露國ハ普通ノ規矩ヲ以テ律スベカラザル國柄ニ有之其傲慢無禮ノ態度ヨリシテ遂ニ今回ノ戰端ヲ啓クニ至リタルハ今更申迄モ無之爾來彼レ連戰連敗ヲ累ス候得共毫モ其非ヲ悔ヒズ其過ヲ悛メズ本國ノ執政モ圖外ノ將帥モ將々講和談判ノ局ニ當レル使臣等モ何レモ皆ナ豪言壯語ヲ逞フシ宛カモ戰勝國タルノ態度ヲ以テ我帝國ニ對シ我ガ賦課スル講和條件ニ接シテ容易ニ了認ノ誠意ヲ現ハサズ却テ巧智ヲ弄シ辭柄ヲ設ケ戰敗ノ損失ヲ樽俎ノ間ニ回復セント試ミ候段其暴慢無禮實ニ切齒痛憤ノ至リニ不堪候此ノ如キ敵國ト共ニ樽俎ノ間ニ折衝シ讓歩又讓歩以テ息姑ナル平和條約ヲ締結仕候ハ、是レ即チ全然戰勝ノ效果ヲ放擲シ開戰ノ理由ヲ沒却シ併セテ至大ノ患害ヲ後日ニ貽スモノニテ帝國ノ前途眞ニ關心ニ堪ヘザル次第ニ御座候五千萬同胞ガ或ハ其生命ヲ擲チ或ハ其資産ヲ散ジ各々其分ニ應ジテ喜ンデ勤務奉公仕候ハ畢竟聖天子ノ大御心ヲ奉體シ露國ノ禍心ヲ根本ヨリ挫折シテ東洋平和ノ保障ヲ永遠ニ確立セントスルノ誠意ニ外ナラズ候多數出征軍人ノ戚族中ニハ倚賴ヲ亡ヒ活路ヲ失シ人生悲惨ノ極ニ陷

ル者尠カラズ此等ハ私情ヨリ論ズレバ實ニ愍然ノ至リニ候得共其人自身ニ於テ深ク之ヲ意ニ介セズ唯々其子弟ノ奉公ニ依リ國恩萬分ノ一ヲ報ヒ奉ルコトヲ得バ本懷ノ至リト覺悟仕居ル次第ニテ國民敵愾ノ公憤ハ極點マデ沸騰致居候場合ニ際シ萬一姑息ナル平和條約ヲ結ビテ戰勝ノ效果ヲ沒却致候ハ、國民ハ從來ノ苦辛空水泡ニ歸シタルニ憤慨シ漏ラスニ道ナク訴フルニ所ナク幽鬱ノ極凶變意外ノ處ニ生ズルヤモ測リ難ク眞ニ痛憂ノ極ニ御座候從來折角舉國一致ノ下ニ偉績ヲ收メタル戰爭ヲ終結スルニ際シ萬一官民反目ノ情態ヲ現出スルコト有之候テハ國家ノ不祥不過之ト杞憂仕候平和固ヨリ喜ブベキ所ニ候得共既ニ平和ノ攪亂者タル露國ニ對シテ戰ヲ宣シ而シテ敵國未ダ反省悔悟致サズ候ニ付テハ戰ヲ繼續スルハ固ヨリ已ムベカラザルノ數ト奉存候國民ハ今後決シテ生命ト資産トヲ吝ムノ情毫モ無之如何ナル犠牲ヲ拂ヒ候テモ交戰ノ大目的ヲ達セズンハ已マザルノ決心ニ御座候仰ギ願クハ當初開戰ノ理由ニ顧念アラセラレ尙又今後東洋ノ形勢ヲ遠觀アラセラレ姑息ナル平和說ヲ斥ケ斷然續戰ノ計ニ出デサセラレンコトヲ爲邦家切

ニ奉悃願候私共布衣ノ民言ヲ國政ニ挾ミ候テハ實ニ恐懼ノ至リニ不堪候得共國民ノ分義トシテ此危急ノ形勢ヲ坐視スルニ忍ビズ候ニ付茲ニ謹デ赤誠ヲ披陳シテ 聖鑒ヲ奉仰誠惶謹言

九月五日全國ノ有志日比谷公園ニ會ス講和條件ニ對シ不滿ノ意ヲ發表シ以テ條約ヲ破壞センガ爲メナリ其事務所ハ公園内ノ松本樓及櫻田俱樂部對露同志會事務所ニ在リ余乃チ櫻田俱樂部及ビ對露同志會事務所ニ行ク櫻田俱樂部ニ於テ邂逅セシ人物ハ河野廣中山田喜之助櫻井一久日野國明藏原惟利本多晉發知庄平田村寬一郎福井三郎大久保不二矢口伊右衛門等ノ諸氏ニシテ對露同志會事務所ニ於テ逢ヒシ人物ハ小川平吉大竹貫一鹽谷恒太郎卜部喜太郎太田資時工藤鐵男等ノ諸氏ナリ
當時余ハ諸處ニ奔走シ食事ノ不規律ナルカ爲メニ腸胃ヲ害シタルニ際シ九月五日ノ暑氣特ニ甚シカリシカ爲メニ頭痛ヲ催シタルニ由リ藏原惟利氏ノ懇切ナル勸誘ニ基キ日比谷公園ニ行カズシテ直チニ家ニ歸レリ稍ヤアリテ

左ノ報知新聞ノ號外相尋テ來ル

○第一號外

殺氣天地ニ滿ツ

平和ナルベキ國民大會ハ政府ノ干涉壓迫ニ據リテ非常ノ紛擾非常ノ混雜ヲ激發セシメ以テ見ルヲ要セザルノ血ヲモ見セシメ神聖ナル帝國ノ首府ヲシテ聖彼得堡タラシメントスルニ至レリ嗚呼是レ何人ノ責任ゾヤ乞フ左ノ記事ヲ見テ其一班ヲ知ラレヨ

巡查日比谷公園ヲ占領ス

本日午後一時ヲ期シテ日比谷公園内ニ開催ノ豫定ナリ國民大會ハ午前四時ヲ以テ其筋ヨリ禁止ヲ命セラレタリ午前十一時ニ至リ警視廳ハ不法ニモ其會場ニ當タル日比谷公園ノ六門ヲ丸太ヲ以テ閉塞シ無數ノ巡查ヲ以テ之ヲ固メ來會者タルト普通ノ周遊者タルトヲ問ハズ一切ノ人ヲ入レシメズ既ニ門内ヲ逍遙シ居ル者ハ悉ク退園ヲ命ジタリ

市參事會ノ激昂

警視廳ノ公園占領ハ市參事會ノ激昂ヲ招キ市參事會ハ直ニ其不法行爲ナルヲ決議シ尾崎市長ハ内務省ニ渡邊助役ハ警視廳ニ山崎庶務課長ハ現場ニ赴キ巡查ノ六門ヲ塞ギタル丸太等ヲ取拂シメタリ

警視廳ノ干渉

媾和問題同志聯合會委員高橋秀臣氏ハ昨夜神田署ニ拘引サレ恒屋盛服氏ハ本日麻布署ニ村松恒一郎大谷誠夫二氏ハ赤坂署ニ細野二郎氏ハ日本橋署ニ同行サレ譴束ヲ命セラレタリ

公園ニ闖入ス

定刻前ヨリ來集シタル媾和同盟會々員ハ斯ル不法ノ通行止メニ公憤數倍ヲ加ヘ大喝怒號潮ノ沸クガ如ク日比谷正門ニ吶喊シ黒塚ヲ築キタル如キ警部巡查ニ向ヒ開門ヲ迫リタルモ之レニ應ゼザルヨリ衆口ヤレト一和スルヤ砂塵土塊ヲ亂打シテ開門ヲ迫リタルモ尙頑トシテ願ミザルヨリ今ハ是非ナシ乘込メト叫ツ、數万ノ人衆薙々ト闖入シ警部巡查ト撲リ合フモアリ揉ミ合ヒノ末終ニ入場シ了リ忽チ中央ニ陣形ヲ作り媾和同盟大會ノ万歳ヲ絶

叫シタリ

河野會長ノ演說

斯ル間ニ轟然タル響キト共ニ花火ハ打揚ゲラレタリ兼テ準備セル大會ノ開會モ之ニテ首尾ヨキヲ市中ニ發表スルヲ得喝采沸クガ如クナリ次イデ設ケラレタル壇上ニ會長河野廣中氏起立シテ大會ノ決議案ヲ演說シ拍手大喝采ヲ博シ山田喜之助大竹貫一等ノ委員諸氏ノ演說モ滞リナク終了ヲ告グルヲ得タリ

警部傷ケラル

斯ノ如キ壓制干渉ニ反抗シタル結果某警部ハ右方ノ面部ヲ何者ニカ傷ケラレ鮮血淋漓トシテ同輩ニ扶ケラレツ、行キタルヲ見タリ其他公衆中ニモ氣絶負傷シタルモノアリタリ斯テ會員ハ新富座ノ演說會ニ赴ケリ

第二號外

警察官人民ヲ斬ル(内務大臣官邸前ノ椿事)

本日午後三時半内務大臣官邸前ニ群集押掛ケ門扉並ビニ門衛家屋ノ窓屋根

等ヲ破壊シタルモ警察官ハ如何シケン鎮撫ニ出張スル者ナク官邸護衛ノ一
 巡查必死トナリテ門内ヨリ防衛シ居タルガ途ニ拔劍シテ門外ニ躍リ出デ並
 ミ居ル群集ヲ追ヒ散ラサントシ白ノ洋服ヲ着タル二十五六歳ノ男ノ逃ゲン
 トセル後ヨリ頭部ヲ目蒐ケテ斬付ケ直チニ官邸内ニ逃ゲ込ミタリ負傷者ハ
 思ハズ電車線路上ニ倒レシヲ群集介抱シテ病院ニ送り治療中ナリ

國民新聞社破壊セラル

群集ノ一隊ハ公園ヨリ二重橋外ニ至リ更ニ引返シテ三菱ノ原ヲ過南鍋町ノ
 通ヲ左ニ日吉町ナル國民新聞社ニ雲霞ノ如ク押寄タリ同社附近ニハ非常警
 戒ノ爲メ警官數名出張シ居リシガ群集ノ勢制シ難ク頗ブル狼狽セリ群集ハ
 同社ノ方ヘ突撃シ石飛ビ瓦飛ビ棒飛ビテ窓ハ破レ硝子ハ飛散スル光景叫喚
 ノ聲破壊ノ響ト相俟ツテ凄然タリ警官憲兵ハ拔劍シテ群集ヲ制セントセシ
 ヨリ群集ハイヨク激シ打チ破レ打チ破レト叫ツ、看板ヲ破棄スルアレバ
 石片瓦片ヲ投ズルアリ群集ハ東西數町ニ亘リテ絶叫シツ、アリコノ時民友
 社員栗原武三太氏先頭ニ拔劍シ出デ飛ビ來ル煉瓦ニ中リテ引返セバ續キテ

阿部美家氏又モヤ拔劍シテ一人ニ一刀ヲ浴セ掛ク續イテ此處ニ一人彼處ニ
 一人警官憲兵ノ拔劍ニテ負傷セシモノ數知レズ入口ニ消火用ノ梯子ハ持チ
 出シテ防ギシニ拍手ノ音萬歳ノ聲ト共ニ國民新聞社ト云ヘル看板ヲ取外サ
 ントスルアリ其他ノ太キ材木竹棒器具ヲ以テ破壊セントスルアリ斯クスル
 中ニ一方ノ群集ハ扉ヲ打破リテ突入シ一臺ノ輪轉機ヲ打チ破リテ萬歳ト叫
 ビタリ頓テ騎馬ノ警官ハ群集中ニ乘廻セバ一度ハ退ケド再ビ打寄セテ何時
 果テズ内外愴然トシテ修羅場ノ如キ觀アリ此群集ハ叫喚ノ聲ト共ニ攻撃中
 ナリ午後三時

第三號外

内務大臣官邸ニ放火ス

本日内務大臣官邸前ニ集マリタル群集中巡查ノ爲メニ斬ラル、モノアリ群
 集ハ血ヲ見テ更ニ激昂シ午後五時半官邸ニ放火シタルモノアリ目下延焼中
 (午後六時十分)

遊事日九月五日
カニ入内閣
露西の政治學
校ノ卒業試験
業論今ハ其卒
休職山ナリ水
ナリ其研究職
余ハ其母ヲ奉
テ上京ニ於テ
此部客舎ニ於
テ此題ノ報ニ
接セリ

余此ニ於テ九月五日ノ騷動ノ概畧ヲ知ルコトヲ得タリ

九月九日余ハ下野新聞ノ影山禎太郎氏及江森泰吉氏ト同行宇都宮ニ行キ余ハ江森氏ト共ニ白木屋本店ニ投宿ス翌十日大川座ニ於テ「二十世紀ノ日本」ト云ヘル題ニ付演説ス而シテ同日藏原惟烈、信岡雄四郎、大谷誠夫、ノ三氏モ亦演説ヲ爲セリ

藏原氏一行ハ福島ニ行キ余ハ翌十一日東京ニ歸ル

宇都宮ニ於テ逢ヒシ人物ハ栃木縣知事白仁武氏、宇都宮市長本多鐸吉氏、及古口長藏、荻野萬太郎、笹川種郎、船田兵吾、鮎澤善太郎、蓼沼丈吉、大村仙助、吉澤淺太郎、岡田泉二郎、村山金平、江原節、矢島中、田代周次郎、菊地利十郎等ノ諸氏ナリ又宇都宮地方裁判所長高橋克親氏及警務長池松時和氏ノ來訪ヲ受ケシモ不在ノ故ヲ以テ面會ノ機ヲ失シ甚々遺憾

九月十五日午前十一時二十分飯田町發ノ流車ニテ余ハ國分寺ニ行キ之ヨリ府中町高安寺ニ於ケルノ演説會ニ出席シ「二十世紀ノ日本」ト題シ演説ス此ノ日高橋秀臣、石山彌平、信岡雄四郎ノ諸氏亦演説ヲ爲セリ余ハ同日夜歸宅ス

九月十八日報知新聞社ノ客員タランコトヲ東京帝國大學總長山川健次郎氏へ出願シ同日其許可ヲ得テ客員ト爲レリ報知新聞ノ論說欄ニ於テ意見ヲ發表スルノ件ハ之ヲ友人及先輩ニ謀リシニ當初反對論者頗ル多カリキ其然ル所以ノモノハ他無シ休職教授ト雖服務規律ノ支配ヲ受クルノ點ニ於テハ現職教授ト毫モ異ナル所無キカ故ニ若シ大學總長ノ許可ヲ得ズシテ縱マニ報知新聞社ノ社員トナルトキハ服務規律ニ照ラシテ處分セラル、ノ恐アリ而シテ若シ此ノ如キ一小事件ノ爲メニ教授ノ職ヲ去ルトキハ之ガ爲メニ教授言論ノ自由ト云ヘル大問題ノ衝ニ當ルコトヲ得ザルニ至ル可シ故ニ報知新聞社ニ入ラント欲セバ先ヅ充分ノ手續ヲ盡シテ總長ノ許可ヲ得而シテ入社ノ後ニ於テハ時局ニ關シテ己ノ欲スル所ヲ述ブルハ得策ナリ然ルニ當初余ハ總長ノ許可ヲ得ルノ一事ニ思到ラザリシガ爲メニ余ニ對シ報知社ニ入ルコト勿レト言ヒタル者頗ル多カリキ然ルニ先輩及友人ト屢バ相談ヲ經タル結果終ニ穂積陳重氏、土方寧氏、及笈克彦氏ノ懇切ナル談話ニ基キ總長ノ許可ヲ得テ報知社ノ客員ト爲ルコト、定メ漸ク九月十八日ニ至リ之ヲ決行シタ

然ラバ穂積、土方、筧等ノ諸氏ハ何故ニ右ノ點ニ關シ屢バ余ニ諭ス所アリシヤト云フニ是等ノ諸氏ハ教授言論ノ自由ヲ重ンズルコト頗ル大ニシテ而シテ之ト同時ニ余ニ對シテ多大ノ同情ヲ寄セタル者故ヲ以テ感謝ノ情ハ今尙余ノ腦中ニ充ツ

九月二十二日ニ至リ報知新聞主筆上島長久氏バ「我社同人トシテノ戸水博士ヲ紹介ス」ト云ヘル文章ヲ掲ク即チ左ノ如シ

○我社同人トシテノ戸水博士ヲ紹介ス

所謂ル七博士ノ隨一人トシテ、世論尙ホ向背ニ迷フノ明治三十三年ニ當リ、敢然露國ノ伐ツベキヲ唱へ、遂ニ國論揆一ノ端ヲ開キタル帝國活躍ノ最先頭ニ立テル急先鋒トシテ、皇軍大勝ノ戰果ヲ完ウスベキ長計ヲ畫シ、將來ノ經綸ニ貢獻スル憂國者トシテ權威ニ屈セズ、黨論ヲ主張スル近時稀有ノ硬骨家トシテ、將タ其主張ノ爲メニ、當局ニ忌マレ、東京帝國大學ノ講座ヲ奪ハレタル教授界ノ一大異彩トシテ、法學博士戸水寛人氏其人アルハ、吾人ノ紹介ヲ待タズ、世

間ノ廣ク深ク記憶スル所ナルベシ

然リ、國士トシテノ戸水博士ハ、總テノ點ニ於テ、毫モ吾人ノ紹介ヲ要セズ、帝國全社會ノ熟識スル名士タリ、而シテ吾人ハ今ヤ此名士ガ我社ノ同人トシテ、我社ノ論壇ニ其主張ヲ發揮スル事ト爲レルヲ社會ニ紹介スルハ、讀者諸君ノ満足ヲ喚ブベキヲ信ズルト共ニ、亦タ吾人ノ誇リトスル所ナリ蓋シ外軟政策ハ内硬ヲ事トスル藩閥政家遺傳ノ病患タリ、其膏肓ノ深キニ入ルヤ、此至大偉絶ノ戰勝ヲ没却シ、屈辱ヲ和約ニ取ルニ至リテ亦タ極マレリト謂フベシ、而モ吾人ノ號呼スル外硬主義ハ、決シテ攘夷ノ陋見ニ出デズ、帝國正當ノ權利ヲ自主的ニ主張スベシト云フニ在ルノミ、曩ニ和議ノ開始ニ際シ、大隈伯ハ其引率スル進歩黨ノ會議ニ演說シテ曰ク「帝國ノ主張ハ之ヲ正義ト權利トノ基礎ニ置ケ、是レ實ニ帝國ノ隣友タル米國ガ其ノ建國ノ大綱領トシテ宣言スル所ニ係ル、曰ク此權利ヤ己レ之ヲ捨ツル能ハズ、人之ヲ奪フ能ハズト、此意義ニ適應スル、帝國主張ノ基礎ハ、隣友ノ最モ同情ヲ寄セザル可ラザル所ナリ、然ルニ政府者動モスレバ列國ノ感情ヲ云々シ、自家主張ノ基礎ヲ他人ノ鼻息ニ置カント

ス危イ哉、岌々乎タリ」下、今ニシテ其知言タルヲ回想セザル可ラザルト共ニ、外
 軟主義ノ大弊ハ、今ニ於テ截然之ヲ一洗セザル可ラザルヤ益々明カナリ
 而シテ戸水博士ノ懷抱スル所、亦タ深ク此外軟主義ヲ排シ、帝國ノ自主的活動
 ヲ作興スルニ在リ、然ルニ當局者之ヲ忌ミ、博士ニ律スルニ休職ヲ以テス、當時
 吾人ハ論ジテ曰ク、是レ外軟病發作ノ惡徵タリ、必ズヤ更ニ大ナル内硬症ノ併
 發ヲ見シ下、而モ其外軟病ノ激甚ニシテ、内硬症ノ絶大ナル、共ニ實ニ吾人ガ豫
 想ノ外ニ在リ、吾人ガ帝國ノ爲ニ、其根治ヲ望ムノ信念ハ、今ヤ益々痛切ナラザ
 ルヲ得ズ

吾人ノ信念右ノ如キト共ニ、吾人ガ戸水博士ニ對スル當局ノ處置ニ慨スルヤ
 深シ、乃チ博士ニ請フニ、公々然トシテ我社ノ論壇ニ其清議ヲ主張センコトヲ
 以テス、博士慨然トシテ之ニ應諾シ、此ニ其抱負ヲ發揮シテ社會ニ見ヘントス
 ルニ至レリ、思フニ帝國ノ前途益々多事ニ、財政、軍事、經濟、教育其他百般ノ事、悉
 ク外交ノ影響ヲ受ケザルコト無シ、而シテ戸水博士夙ニ經世ノ志ヲ抱キテ、其
 歐洲ニ遊學スルヤ、專攻科目以外ニ涉リテ、研究シ討尋セル外交及ビ世界ノ大

勢ニ關スル蘊蓄甚ダ多シ、我社ノ論壇ガ帝國ノ爲ニ貢獻スル所益々大ナルヲ
 致シ得ベキハ、深ク吾人ノ自信スル所ナリ、讀者乞フ刮目シテ吾人ノ將來ニ熟
 視セヨ

此後余ハ屢バ報知新聞紙上ニ於テ余ノ意見ヲ發表セリ

九月十九日余ハ衆議院議員鈴木久次郎氏トノ談話ニ基キ同氏及關直彦氏ト
 同行、木更津ニ行キ旅館石井ニ投宿シ同日夕刻鈴木座ニ於テ二十世紀ノ日本
 ト題シ演説ス其趣旨ハ宇都宮ニ於ケルノ演説ト大同小異

同日吉田銀治、藤代市之進、高橋秀臣、寺島信之、上島長久、信岡雄四郎、關直彦、鈴木
 久次郎ノ諸氏モ亦演説ヲ爲セリ

之ヲ聞ク此ノ演説會ハ木更津町長香々見儀助氏及辯護士邑居一正氏ノ催ニ
 係リタルモノナリト

木更津ニ於テハ余ハ安部遜氏其他種々ノ人物ニ逢ヘリ

九月二十日余關直彦氏ト共ニ東京ニ歸ル

確復タ一點ノ疑ヲ存セズ而シテ此事毫モ元首ガ豫メ條約ノ内容ヲ熟知セルト否トヲ問ハザルナリ唯夫レ批准拒絕ノ事濫ニ之ヲ尋常ノ時局ニ施スハ固ヨリ不可ナリト雖モ苟クモ國家ノ存亡禍福ニ關スル重大ノ事態ニ際シテハ斷ジテ之ガ適用ニ躊躇スベキニアラズ臣等謹ミテ按ズルニ帝國縱令今次ノ條約ヲ不成立ニ歸セシメ更ニ戰爭ヲ繼續スルモ經營苟クモ其宜ヲ失ハズンバ我經濟上ノ實力ハ戰費ヲ辨ジテ練々トシテ餘裕アラム而シテ環視列國必ズ亦陛下公明ノ聖旨ヲ仰ギ臣民愛國ノ衷情ヲ諒トシ帝國ノ威信ニ於イテ特ニ損益スル所ナカルベシ之ニ反シテ帝國若シ今次ノ條約ヲ甘諾シ苟安姑息ノ平和ヲ招徠セバ人心沮喪シ財力萎靡シ風教弛廢シ名節地ニ墮チ其弊必ズ續戰ニ倍スルモノアラム況ヤ或ハ自ラ自國ノ防備ヲ制限シテ以テ獨立國ノ體面ヲ損シ或ハ數歲ナラズシテ再ビ敵國ト難ヲ構フルノ已ムヲ得ザルニ至ルアラバ臣等恐ラクハ帝國國運ノ發展永ヘニ望ミナキニ了ラムコトヲ臣等生レテ盛時ニ遭ヒ聖恩ニ感激シ夙ニ宣戰ノ大詔ヲ捧讀シテ聖意ヲ奉體ス今敢テ天威ヲ冒シ微衷ヲ縷陳シテ聖鑑ヲ仰ギ奉ル斧鉞ノ罪固ヨリ

逃ル、ニ所ナシト雖モ抑亦國家ノ大事ニ臨ミ知リテ言ハザルノ却テ臣民ノ大義ヲ害セムコトヲ恐ルレバナリ仰ギ願ハクバ赤子仰望ノ至情ヲ垂憐セサセ給ハムコトヲ誠恐誠惶謹ミテ奏ス

講和條件世人ノ爲メニ知ラレテヨリ吾輩ノ請願書ヲ宮内省ニ捧呈スルニ至ルマデニ諸處ヨリ同省ニ達シタルノ請願書類ル多シ是ヲ以テ世人或ハ吾輩ヲ以テ後レ馳セニ上奏ヲ爲シタルモノト爲シテ吾輩ヲ非難セリ特ニ讀賣新聞ニ於テ執筆ノ勞ヲ取レル法學士河上肇氏ノ如キハ十月二日ヲ以テ社會主義評論ニ於テ吾輩ノ行爲ヲ論シテ曰ク其上奏ナル者ハ時期最モ後レタリ人ヲ教フベキ地位ニ在リテ恰モ人ニ教ヘラレタルノ觀アルヲ免レズト河上肇氏ハ匿名ヲ以テ此ノ批評ヲ公ニシタルノミナラズ尙ホ吾輩ノ他ノ行動ニ對シ野鄙ナル言語ヲ用ヒテ誹謗ヲ逞シクシタルハ同氏ノ爲メニ之ヲ惜マザルヲ得ズ然リト雖吾輩ノ請願書ガ豫想外ニ遲延シタルノ一事ニ付テハ吾輩其責ニ任セザル可ラズ然レトモ此ニ尙ホ一言ス可キモノアリ余ハ始メ事ノ此

ニ至ランコトヲ恐レタルヲ以テ夙トニ南佐莊ノ會合ヲ促シ且ツ同志諸氏モ亦熱心ニ請願書ヲ捧呈ス可キヲ決議シタルモ其内容ニ關シテハ議論百出シ之カ爲メニ決議ノ遅延セシハ亦已ムヲ得サル結果ニシテ之ヲ以テ吾輩ヲ尤ムルハ畢竟學者間ノ事情ニ通セサルノ言ト謂フ可キノミ特ニ吾輩ノ請願書遅延セシノ故ヲ以テ吾輩ニ誠意無シト論スル者ノ如キハ吾輩ヲ誣ユルノ甚シキ者ナリ尙ホ此ニ述ブ可キ事アリ學藝ニ從事スル者ハ一旦互ニ相議論ヲ異ニスルニ當テハ巍々乎トシテ相下ラズ是即チ一方ヨリ見レバ學者ノ短所タルコト疑ヲ容レズト雖他方ヨリ見レバ是即チ學者ノ長所タルコトヲ知ラサル可ラズ夫レ斯ノ如ク互ニ相辯難シテ相下ラズ此ニ於テ學者ノ面目ヲ見ル滔々タル俗流焉ゾ學者ノ面目ヲ知ラン尙ホ此ニ述ブ可キコトアリ世人或ハ吾輩ノ請願書ニ記スル所ヲ以テ甚タ拙ナリト爲シ瑣細ノ點ニ對シテ攻撃ヲ加フ然リト雖試ミニ見ヨ請願書ノ内容ニ關シテ互ニ相議論ヲ異ニシタルノ後ニ於テハ瑣細ノ點ニ至ルマデ吾輩ノ全數ヲシテ満足セシム可キ決議ヲ得ルコト頗ル困難ナリ故ニ議論ノ瑣細ナル點ニ關シテハ互ニ相讓歩ヲ爲シ

進午日荷ケモ誠
他ノ攻撃ノ如キ
足ラズニ介スルニ

テ終ニ此ノ如キ請願書ヲ作ルコト、爲シタルナリ此ノ如キ消息ヲ知ラザル者ト請願書ノ内容ヲ論スルハ甚ダ困難ナリト謂フ可シ
九月二十七日日英協約世ニ公ニセラル即チ左ノ如シ

○日英協約

協約前文

日本國政府及大不列顛國政府ハ一千九百二年一月三十日兩國政府間ニ締結セル協約ニ代フルニ新約款ヲ以テセムコトヲ希望シ
(イ) 東亞及印度ノ地域ニ於ケル全局ノ平和ヲ確保スルコト
(ロ) 清帝國ノ獨立及領土保全並清國ニ於ケル列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ヲ確實ニシ以テ清國ニ於ケル列國ノ共通利益ヲ維持スルコト
(ハ) 東亞及ビ印度ノ地域ニ於ケル兩締盟國ノ領土權ヲ保持シ並該地域ニ於ケル兩締盟國ノ特殊利益ヲ防護スルコト
ヲ目的トスル左ノ各條ヲ約定セリ

第一條

日本國又ハ大不列顛國ニ於テ本協約前文ニ記述セル權利及利益ノ中何レカ危殆ニ迫ルモノアルヲ認ムルトキハ兩國政府ハ相互ニ充分且留意ナク通告シ其ノ侵迫セラレタル權利又ハ利益ヲ擁護センガ爲ニ執ルベキ措置ヲ協同ニ考量スベシ

第二條

兩締盟國ノ一方ガ挑發スコトナクシテ一國若クハ數國ヨリ攻撃ヲ受ケタルニ因リ又ハ一國若クハ數國ノ侵略的行動ニ因リ該締盟國ニ於テ本協約前文ニ記述セル其ノ領土權又ハ特殊利益ヲ防護セムガ爲メ交戦スルニ至リタルトキハ前記ノ攻撃又ハ侵略的行動ガ何レノ地ニ於テ發生スルヲ問ハズ他ノ一方ノ締盟國ハ直ニ來リテ其ノ同盟國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スベシ

第三條

日本國ハ韓國ニ於テ政事上軍事上及ビ經濟上ノ卓絶ナル利益ヲ有スルヲ以テ大不列顛國ハ日本國ガ該利益ヲ擁護増進セムガ爲正當且必要ト認ムル指

導監視及ビ保護ノ措置ヲ韓國ニ於テ執ルノ權利ヲ承認ス但シ該措置ハ常ニ列國ノ商工業ニ對スル機會均等主義ニ反セサルコトヲ要ス

第四條

大不列顛國ハ印度國境ノ安全ニ繫ル一切ノ事項ニ關シ特殊利益ヲ有スルヲ以テ日本國ハ前記國境ノ附近ニ於テ大不列顛國ガ其ノ印度領地ヲ擁護セムガ爲必要ト認ムル措置ヲ執ルノ權利ヲ承認ス

第五條

兩締盟國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經ズシテ他國ト本協約前文ニ記述セル目的ヲ害スベキ別約ヲ爲サザルベキコトヲ約定ス

第六條

現時ノ日露戰爭ニ對シテハ大不列顛國ハ引續キ嚴正中立ヲ維持シ若シ他ノ一國若ハ數國カ日本國ニ對シ交戦ニ加ハルトキハ大不列顛國ハ來リテ日本國ニ援助ヲ與ヘ協同戰闘ニ當リ講和モ亦雙方合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スベシ

第七條

兩締盟國ノ一方ガ本協約中ニ規定スル場合ニ際シ他ノ一方ニ兵力的援助ヲ與フベキ條件及該援助ノ實行方法ハ再締盟國陸海軍當局者ニ於テ協定スベク又該當局者ハ相互利害ノ問題ニ關シ相互ニ充分ニ且隔意ナク隨時協議スベシ

第八條

本協約ハ第六條ノ規定ト牴觸セザル限り調印ノ日ヨリ直ニ實施シ十箇年間效力ヲ有ス右十箇年ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ兩締盟國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢棄スルノ意思ヲ通告セザルトキハ本協約ハ兩締盟國ノ一方ガ廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一箇年ノ終了ニ至ルマデ引續キ效力ヲ有ス然レドモ若シ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方ガ現ニ交戰中ナルトキハ本同盟ハ講和ノ成立ニ至ルマデ當然繼續スベシ
右證據トシテ下名ハ各其ノ政府ノ委任ヲ受ケ本協約ニ記名調印スルモノナリ
一千九百五年八月十二日倫敦ニ於テ本書ニ通テ作ル

大不列顛國駐劄日本國皇帝陛下ノ特命全權公使 林 董印

大不列顛國皇帝陛下ノ外務大臣 ランスダウン印

九月三十日午前十時四十分上野發ノ汽車ニテ二本松ニ行キ大宗樓ニ投宿ス余ヲ二本松ニ招キタル人物ハ學德齡ノ三者共ニ高キ安部非磐根翁及法學士田倉孝雄氏等ナリ

十月一日雙松座ニ於テ「二十世紀ノ日本」ト題シ演説ス

同日山田修氏ノ製絲場ヲ見ル丹羽氏ノ舊城ニ據リ其規模廣大自ラ是東北ノ雄鎮間ク所ニヨレバ山田氏維新前後ニ於テ米國ニ行キ其製造所ノ盛ナルヲ見テ之ヲ羨ミ歸朝ノ後拮据匪勉終ニ此ノ如キ有益ノ工場ヲ二本松ニ設立シタルナリト云フ

二本松ニ於テ余ハ安部井田倉山田三氏ノ外後藤良介平島松尾田村玄泰齋藤喜兵衛園岡撰樹水野好三朝河正澄安藤新八佐藤獎伊藤武壽國分久寺田一郎等ノ諸氏ニ逢ヘリ

郡山ノ「ステーション」ニ於テ余ハ同町燈田ノ鯨岡寅吉氏ニ逢フ氏曰ク願クハ郡山ニ於テモ亦演說セヨト余餘暇無キノ故ヲ以テ應スルコト能ハザリシハ甚タ遺憾ナリ

十月二日午前四時四十一分二本松發ノ汽車ニテ福島ニ行キ藤金本店ニ投宿ス田倉孝雄及齋藤喜兵衛ノ兩氏亦余ヲ送リテ福島ニ來リ同處ニ投宿ス同日公會堂ニ於テ「二十世紀ノ日本」ニ付演說ス公會堂ナル者ハ公衆ノ會合ヲ催フスニ適スル特別ノ建築物ナリ夫レ福島ハ四走八達ノ地ナルヲ以テ現今ニ在リテハ實ニ仙臺ト繁榮ヲ競ハント欲スル者故ニ公會堂ノ存在スル如キハ毫モ異トスルニ足ラズト雖兎ニ角此ノ一事ヲ見テモ福島ノ繁榮ガ如何ニ日進月歩ノ状態ニ在ルカヲ知ルニ足ルナリ

福島ニ於テ逢ヒタル人物ハ警務長大味久五郎氏、事務官亥角仲藏氏、及鐸木三郎兵衛、野木善三郎、櫻岡隆藏、堀江九郎、西田由之助、新田貞橘、川田敬三、三輪林之助、氏家清、青木銃四郎、星與市、寺澤元良、丹野潔、鈴木謙、久保和三郎、伊藤武壽等ノ諸氏ナリ十月三日午前八時三十六分福島發ノ汽車ニテ歸途ニ就キ午後四時

二十分頃上野ニ着ス

前段既ニ述ベタルガ如ク余ハ休職ト爲リタル後ニ於テ種々ノ場所ニ於テ演說ヲ爲シ又報知社ノ客員ト爲リ同社新聞紙ニ屢バ余ノ議論ヲ載セタルコトアリシガ余ハ此ノ外ニ尙ホ法科大學ノ講師ト爲リ依然トシテ羅馬法ノ講義ヲ擔當シタリ依テ其講師ト爲リタル顛末ノ概略ヲ記セン

土方寧氏ハ一面ニ於テハ法科大學教授會ニ於テ余ヲ以テ講師ト爲サンコトヲ發議シ他ノ一面ニ於テ余ニ向テ講師ト爲ランコトヲ勸告シタリ之ヲ聞ク教授會ニ於テ殆ンド一人ノ異議者無ク總長ノ同意ヲ得テ余ヲ講師ト爲サントノ事ヲ決議シタリト云フ然ルニ余ハ此ノ時ニ於テ甚ダ講師ト爲ルコトヲ好マザリキ如何トナレバ余ハ文官分限令第一條第四項ニ基キ官廳ノ都合ニヨリ休職ノ處分ニ付セラレタルモノナリ若シ之ガ爲メニ法科大學ニ於テ羅馬法ノ講座ヲ擔當スル者無キニ至ラバ是其責ハ文部大臣ニ在リテ余ニ在ラズ故ニ余ハ德義上ニ於テモ毫モ講師ト爲リテ羅馬法ヲ講ス可キ義務無キモノナリ余ハ當時此ノ如キ考ヲ抱キタルカ故ニ土方氏ノ來訪ヲ受ケ其勸告ヲ

蒙ムルニ及ンデ頑トシテ其言ニ從ハズ折角余ニ同情ヲ寄スル所ノ土方氏モ余ノ頑鈍ナルヲ見テ憤然席ヲ蹶リテ起チ勃然色ヲ爲シテ余ノ家ヲ去レリ此ノ如キコト實ニ前後二回然レトモ余ハ未タ土方氏ノ言ニ從ハズ然ルニ第一回ニ土方氏ガ余ノ家ニ來リタル後ニ於テ穂積陳重氏、篁克彥氏、其他友人數名交ルカハル余ニ向テ講師ト爲ランコトヲ勸告シテ曰ク貴君休職ト爲リテ後ハ好ンデ羅馬法ノ講座ヲ擔當セント欲スル者無シ強イテ之ヲ依頼スレバ或ハ其依頼ニ應シテ羅馬法ヲ講スル者アルヤモ知ル可ラズト雖目今ノ事情貴君以外ニ此ノ講座ヲ擔當スルハ衆人ノ意嚮ニ反ス此際ニ於テ貴君宜シク衆人ノ輿望ニ從ヒ講師ト爲リテ講座ヲ擔當ス可シ文部大臣ハ不當ノ處分ヲ行ヒタリトスルモ大學何ノ失策カアル學生何ノ罪カアル貴君出テ大學ノ爲メニ學生ノ爲メニ講義ヲ爲ス可シ貴君若シ出デズンバ或ハ羅馬法ノ講座ヲ曠廢スルニ至ルヤモ測リ難シ是我輩ノ見ルニ忍ヒザル所ナリト

是大體ニ於テ土方氏ノ述ブル所ト其趣旨ヲ同クス余ハ土方氏及他ノ諸氏ヨリ屢バ此ノ如キ言ヲ聞クニ及ンデ之ニモ亦一理アリト考ヘタルノミナラズ

諸氏ヨリ余ニ對シテ多大ノ同情ヲ寄セラレタルヲ見テ心大ニ動キ遂ニ講師ト爲ルニ決セリ

當時余ハ某々氏ヨリ左ノ手紙ヲ得タリ

今朝は御邪魔仕候扱其節御内談申上候報知社との御關係之義は確定次第小生迄御垂示被下候御約束に有之候所小生義明朝より二泊にて一の宮迄旅行いたし候に付甚た恐縮の至りに候得共右の件は土方君まで御報知相願仕度候定めて都合能く相運ひ候事とは確信致候得共萬一報知社との御關係に於て豫期の如く相運ひ不申事あるとも何卒貴臺に於ては充分同僚の微衷を容れ學生等の不幸を憐み先以て講師囑託の件都合能く相運ひ候様御諒諾希望の至に耐へす候右御依頼旁艸々呈翰候

十五日夜

戸水尊兄梧下

追て土方君には今朝會見の結果を相話し貴兄よりの報告あり次第可成速に總長に交渉相運ひ候様依頼致置候是れは小生一個の意見に候得共報知社客

員の義先つ發表し講師囑託後に相成候方或は面白きかと存し候尊慮如何尤
是は御考次第孰れにてもよろしくと存候講師囑託の時期方法等は土方君と
御話相願度候

御書面拜承講師問題は實踐的抗議の第一歩とも看做すへきものに候間復職
問題を等閑に付する事は決して無之候間此義は御承知被下度候兎に角貴臺
の御承諾により直接に書生は大に仕合を致す事と存候艸々御返事不悉
十九日

戸水學兄机下

前者ハ九月十五日即チ余ガ報知社ノ客員ト爲リタルヨリ以前ニ入手シタル
モノニシテ後者ハ報知社ノ客員ト爲ルノ許可ヲ大學總長ヨリ得タルノ翌日
即チ十九日落掌シタルモノナリ
余ニ向テ講師タランコトヲ勸メタル手紙此外數通アリ

遜昔曰山川總長
ノ識量下材幹先
シ不常後者ノ回
リ復救濟ノ第一歩
ヲ茲ニ起セルナ

余既ニ法科大學講師ト爲ルニ決ス然レトモ尙世人ノ余ヲ誤解センコトヲ恐
レ其誤解ヲ去ラシムルノ術ヲ友人ニ謀ル友人曰ク貴君法科大學ノ講師ト爲
ル其心公明正大世人焉ゾ之ヲ疑ハン若シ之ヲ疑フモノアリトスレハ我輩書
ヲ數箇ノ新聞紙ニ寄セテ其疑ヲ解カン余曰ク多謝ト此ニ於テ余ハ愈ヨ講師
ト爲ル可キコトヲ土方氏及他ノ諸氏ニ告ケ且ツ其實行ニ關シテ數日ノ猶豫
ヲ求メタリシニ幸ニシテ諸氏悉ク之ヲ諾セリ
稍アリテ新聞社ハ是等内情ヲ知り記事ヲ掲ケテ文部大臣戸水ヲ休職ノ處分
ニ付シタルモ帝國大學總長ハ戸水ヲ以テ講師ト爲シ事實ニ於テ休職處分ヲ
取消サントスト

此報世間ニ傳ハリ其機ノ漸ク熟スルヲ待テ余ハ法科大學講師ト爲レリ時ニ
十月二日即チ余ガ福島公會堂ニ於テ演説ヲ爲シタル日ナリ
十月六日ニ至リ東京朝日新聞ヲ見ルニ左ノ社説ヲ掲ク

○教授休職事件

久保田文部大臣ガ休職ヲ命ゼシ東京帝國大學教授戸水博士ヲ山川大學總長

ハ直ニ擧ゲテ囑託講師ニ任ジ、事實上ソノ職ニ復セシメタリ。表面ヨリイヘバ、大臣ト總長ト各其ノ權内ノ事ヲ行ヒシニ止マレドモ、ソノ結果ハ隨分奇怪ナラザルニアラズ。文部大臣ガ文官分限令第十一條第一項第四號ヲ以テ戸水博士ヲ律シタル點ヨリイヘバ、博士ノ在職ハ其屬スル官廳即チ帝國大學ニ必要ナラザル等ナルニ、事實ノ正ニ相反スルハ博士ノ同僚擧テ之ヲ證明スルノミナラズ此官廳ノ最上司タル總長ガ事實上ノ復職ヲ斷行シタルニ依リ、明瞭ナリ。而シテ自然ノ結論トシテ、文部大臣ガ配下官廳ノ事務ニ明カナラズ、事實ヲ誤認シタル責任如何ノ問題ヲ生ズ。況ンヤ此事件ノ本人タル、所信ヲ斷言シテ侃諤憚ル所ヲ知ラザル戸水寛人君タルニ於テヤ。文部大臣如何ニ事實誤認ノ最小責任ヲ以テ免レント欲スルモ、世人ハ到底之ヲ許サズ。而シテ彼ガ分限令ニ假託シテ、或目的ノ爲メニ此處分ヲ行ヒタルモノト推定スル、亦殆ド已ム可ラズ蓋シ吾人ノ知ル限リニテハ、文官分限令ニ保障トイフモノ、本來頗ル曖昧ナリ。而シテ其濫用妄用ハ今始マリタルコトニアラズ。久保田文部大臣タルモノ只從來ノ慣行ニ遵ツテ濫用妄用ヲ試ミ、偶部下及ビ世上ノ物議ヲ招キタ

ルニ外ナラザルナリ。分限令ソノモノ、必要不必要ハサテ置キ、假ニモ國家ノ法令ヲ濫用妄用スル如キハ寬假シ難キ所ナレバ、吾人モ亦此點ニ於テ謂ハユル教授連ノ抗議書中

若シ政府ノ都合ノ爲メ必要ナリト認ムル一切ノ場合ニ於テ任意ニ休職ヲ命ズルコトヲ得ベシトセバ、是レ分限令以前ノ状態ニ復歸セシムルモノニシテ、全ク法ノ精神ヲ滅却スルモノナリ、且ツ第四號(第一項)ノ主義ヲシテ若シ解スル者ノ言ノ如クナラシメバ、是レ政府ハ何時ニテモ休職ヲ命スルコトヲ得トイフニ外ナラズ、其第一號乃至第三號ニ特ニ休職ヲ命ジ得ベキ場合ヲ列記セルハ全ク無意義ノ冗文タルベキナリ、

トイフニ賛成セザルヲ得ズ。文部大臣ハ果シテ此ク開キ直リタル理屈ニ對抗スルヲ得ルヤ否ヤ、恐ラクハ難シ。宜シク戸水博士ヲ復職セシメテ天下ニ謝スベシ、若シ之ヲ敢テスルニ堪ヘズトセバ他ニ相當ノ方法モアル可シ。サテ此マデハ文官分限令ニヨリ、一文官ノ躑躅ヲ可否シタル次第ナルガ更ニ學者トシテ大學諸教授ノ爲シタル所ノ可否何如ヲ見ルニ、吾人モ同業『日本』『時事』ガ云

々シタル如ク、聊カ慊焉タラザルモノ有リ。彼等ノ或者ガ開戦ノ前後ヨリ屢次時務ニ對スル所信ヲ發動シ、ノ身分ノ官吏タルニ拘ラザリシハ、吾人ノ初ヨリ壯トシタル所。國事ヲ憂ヘテ、懷抱ヲ披クハ、固ヨリ學者ノ一大任務、事急ナルニ際會シテ、官吏タル身分ニ拘ラザリシモ、亦其意氣ノ烈ナルヲ見ル。吾人竊ニ思ヘラク、諸博士ハ其官ヲ抛ツテ其意思ニ殉スルモノト。然ルニ彼ノ抗議書ヲ見ルニ、彼等並ニ彼等ノ同僚ハ一方ニ於テ官吏タルヲ自信シ、同時ニ他方ニ於テハ一身ノ進止ニ對スル特例ヲ要求ス、ソノ一節ニ曰ク、

教授ノ進退ハ專ラ果シテ其擔任スル所ノ學術ニ堪能ナリヤ否ヤ、其品行性格ノ一世ノ師表タルニ足ルベキヤ否ヤニ依ルベク、其學術上ノ研究ニ基ク言論ガ時ノ政府ノ爲メニ有利ナルヤ否ヤニ依リテ決スベキニアラズ、若シ之ニ反シテ其言論ガ政府ノ政策ニ背馳スルノ故ヲ以テ、猥ニ教授ノ地位ヲ奪ヒ之ニ休職ヲ命ズル如キ事アラバ、是レ教授ヲシテ政府ノ願使スル所タラシムルモノニシテ、學術ノ獨立ヲ妨ゲ大學ノ本能ヲ滅却スルモノナリ。其言至理アリ。而モ此理ハ今日ノ大學ニ充テ符ラズ。今日ノ大學ハ猶純然タル

官學ニシテ、形式上ニ於テハ文部省管下ノ一官廳タリ、而シテ其教授ハ文部省ニ屬スル官吏ニシテ他ノ一般官吏ト共ニ分限令ノ保障ヲ有スルノミ、分限令ノ保障ニ學問ノ獨立ヲ託シ、而シテ聊カ特殊ノ待遇ヲ希望スルノミトハ心細シ。學問ノタメニ之ヲ言フ、學者ノタメニ之ヲ言フ。

其他八月二十五日以來余カ休職ト爲リタルノ件及講師ト爲リタルノ件ニ付テ諸種ノ新聞ニ記事又ハ論說ヲ掲ケ文部大臣ノ處置ヲ非難セリ。十月九日ニ至リ在馬尼拉飯塚氏ヨリ送リタル千九百五年(明治三十八年)九月二十七日ノ *Manila times* 余ノ手ニ着ス之ヲ見ルニ左ノ言アリ

THE PROTEST AGAINST RATIFICATION.

From late Japanese exchanges a clearer and more comprehensive view may now be obtained of the disturbance in the empire consequent on the signing of the peace treaty. From these it appears that sentiment against the treaty expressed itself very generally, and that the attitude of the press, which, with one exception, the *Kokumin*, a government

organ, protested against the terms which Japan had imposed, fairly represented the feelings of the people as a whole.

Nor is the opposition to the treaty apparently, confined to the lower classes of the people. Among those who openly expressed their disapproval are many men prominent in Japan, most, of them, it must be admitted, however, belonging to the ranks of the radicals.

Included in these are what are known as the *Seven Professors*, who prior to the outbreak of the war offended the government especially the Elder Statesmen, by their open agitation for the commencement of hostilities.

As a result of his noisy demonstrations against the government, the fiercest and most outspoken of these fire-eating savants, *Professor Yonizu*, was dismissed by the government, which he served in his capacity of professor.

His dismissal, which was meant as a warning, does not, however, appear to have accomplished its intended effect, and he and his friends, termed by one paper "The Chauvinists," have not abated the extremity of their harangues to the common people calling upon them never to consent to such a humiliating peace.

Whether the opposition manifested to the treaty will exercise any effect on its ratification, which takes place October 24, is doubtful.

Even in spite of the memorials, which, according to a recent dispatch, are pouring in

upon the government praying that the treaty be not ratified, it is not likely that the ministry will recant from its covenant.

Such a step would, at least in its results, be as disastrous as it is inconceivable. Moreover, there seems no reason to believe that Japan would profit by such action or secure more advantageous terms than already arranged.

It may safely be predicted, therefore, that when the hour of ratification arrives the terms which were agreed upon at that memorable conference at Portsmouth will be affirmed.

然ラバ余ノ休職ニ關スル同志及他ノ教授諸氏ノ態度如何前段既ニ述ベタルガ如ク諸氏ハ囂々然トシテ政府ノ處置ヲ非難シタルハ天下ノ知ル所而シテ余ハ休職ト爲リタルノ結果トシテ法科大學教授會ニ出席スルノ資格ヲ失ヒタルヲ以テ諸氏ノ行動ノ詳細ハ之ヲ知ルニ由無シト雖此ニ余ノ聞知スル所ノ大要ヲ記スレバ余ガ休職トナリタルヨリ七日ヲ經テ八月三十一日ニ至リ東京帝國大學法科大學ハ教授會ヲ催フシ尋テ九月四日ニモ之ヲ開キ九月八日ニモ之ヲ開キ其ノ以後頗ル頻繁ニ之ヲ開キ教授言論ノ自由ニ關シ大ニ討

議スル所アリタリト云フ而シテ時々相談ノ結果トシテ教授中ヨリ委員ヲ設ケ或ハ大學總長ニ質問シ或ハ文部大臣ニ質問シテ余ノ休職ノ理由其他種々ノ件ヲ知ラント欲センモ概シテ之ヲ言ハハ表向ニハ充分ニ満足ス可キ答ヲ得ルニト能ハザリシガ如シ

此ニ於テ教授ノ大部分ハ連名ノ書ヲ認メテ之ヲ文部大臣ニ送り以テ其猛省ヲ促シタリ九月二十四日ノ諸新聞ヲ見ルニ右連名ノ書ニ關シテ左ノ記事ヲ掲載シタリ

○各教授ノ抗議

(戸水博士休職ニ關スル)

戸水博士休職ニ關シ穂積、梅、金井、土方、岡野、寺尾、岡田、松波、山田、小野塚、志田、美濃部、高野、箕、中川、立、山崎、河津、中田、上杉等ノ教授助教授ガ連署ノ上文部大臣ニ差出シタル抗議書ハ左ノ如シト云フ

某等謹デ書ヲ文部大臣閣下ニ呈ス屢ニ小官等ノ同僚東京帝國大學法科大學教授法學博士戸人寛人ノ休職ノ命ヲ受クルヤ法科大學教授會ハ法科大學ノ

事務ノ都合カ切ニ同人ノ在職スルコトヲ必要ト認メ即チ代表者ヲ選ビテ閣下ニ請ハシメ以テ速ニ同人復職ノ命アランコトヲ請ヘリ然レドモ不幸ニシテ閣下ノ容ル、所トナラズ小官等深ク之ヲ遺憾ト爲ス爰ニ再ビ情ヲ陳シテ閣下ノ省慮ヲ仰カント欲スルモノ敢テ一戸水氏ノ爲ニスルニアラズ事大學ノ爲ニ默シテ止ムベカラザルモノアレバナリ抑今回ノ事タル之ヲ事ノ形式ヨリ見レバ一官吏官廳事務ノ都合ニ依リテ休職ヲ命ゼラレタルノミ其果シテ事務ノ都合ノ爲ニ必要ナリヤ否ヤハ本屬長官ノ認定ニ在リ小官等固ヨリ之ニ對シテ異議ヲ陳ズベキニアラザルニ似タリ

然レ共願ミテ其實質ヲ見レバ其處分ハ果シテ適法ナリト云フヲ得ベキカ假ニ之ヲ適法ナリトスルモ能ク之ヲ正當ナリト言フヲ得ベキカ小官等竊ニ之ヲ疑フ

夫レ大學ノ目的トスル處ハ學術技藝ヲ教授シ及ビ其濫與ヲ攻究スルニアリ大學教授ノ任トスル處ハ講座ヲ擔任シ學生ヲ教授シ兼ネテ學術ノ進步ヲ寄與スルニ在リ故ニ教授ノ進退ハ專ラ果シテ其擔任スル處ノ學科ニ堪能ナリ

ヤ否ヤ其性行品格ノ一世ノ師表タルニ足ル可キヤ否ヤニ依ルベク其學術上ノ研究ニ基ク言論ガ時ノ政府ノ爲ニ有利ナリ否ヤニ依リテ決スベキニアラズ若シ之ニ反シテ其言論ガ政府ノ政策ニ背馳スルノ故ヲ以テ猥リニ教授ノ地位ヲ奪ヒ之レニ休職ヲ命ズルガ如キ事アラハ是レ教授ヲシテ政府ノ願使スル所タラシムルモノニシテ學術ノ獨立ヲ妨グ大學ノ本能ヲ滅却スルモノナリ若シ此ノ如クンハ學術ノ進歩豈得テ期スベケンヤ

戸水博士ノ羅馬法ニ於ケル其造詣ノ深キ能ク人ノ知ル處ニシテ又小官等同僚ノ保證スル處ナリ其性行品格ノ如何ニ至リテハ閣下個人トシテ久シク彼ト友タリト稱セラル閣下必ラズ能ク之ヲ知ラン

即チ其ノ休職ノ命アリシ所以ハ其學術及ビ性行ノ如何ニ依ルモノニアラザルハ明ナリ果シテ而ラバ其理由ハ知ルベキノミ曰ク彼ノ日露戰役及ビ其ノ非講和條件ニ關シテ公ニシタル意見ガ時ノ政府ノ政策ト相反スルモノアリシガ爲ナルノミト

然レドモ此ノ如キ理由ヲ以テ教授ノ地位ヲ奪フニ至リテハ其不當ノ處分ナ

ルコト小官等ノ言ヲ待タズシテ明ナリ

豈當ニ不當ナルノミナランヤ又實ニ違法ノ處分タリ文官分限令第十一條第一項第四號ハ「官廳事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキ」ニノミ休職ヲ命ジ得ベキコトヲ許ス其所謂「官廳ノ事務」トハ其官吏ノ在職スル官廳ノ事務ヲ意味スルモノナルコトハ言ヲ俟タズ而シテ戸水氏ノ在職セル法科大學ノ事務ノ都合ハ當ニ彼休職ヲ必要トセザルノミナラズ却テ切ニ彼ガ在職ヲ必要トスルナリ彼ノ休職ノ爲ニ法科大學ハ勅令ノ命ズル所ノ講座ノ擔任者ヲ欠キ規則ノ定ムル所ノ試験ヲ行フヲ得ズ授業ヲ廢スルノ止ムヲ得ザルニ至レリ是レ豈分限令ノ適用ヲ誤レルモノニアラズシテ何ゾヤ

解スル者或ハ曰ク「事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキ」トハ實ハ事務ノ都合ノミヲ意味スルニアラズ廣ク政府ノ都合ノ爲ニ必要ナル一切ノ場合ヲ包含スルナリ戸水氏ノ言動ハ政府ノ政策ノ實行ヲ妨グルモノニシテ其在職ハ政府ノ爲ニ有害ナリ之ニ休職ヲ命ズルハ違法ニアラズ小官等ハ閣下ガ此ノ如キ解釋ヲ取ラル、コトヲ信ズル能ハズト雖モ若シ之ヲ以テ其違法ノ跡ヲ掩フヲ

得ベシトスルモノアラバ是レ甚シキ誤謬ナリ文官分限令ハ官吏ノ分限ヲ保障シ一定ノ場合ノ外ハ其意ニ反シテ其地位ヲ奪ハル、コトナキヲ規定セルモノナリ

分限令ノ以前ニ於テハ官吏ハ地位ノ保證ヲ有セズ政府任意ニ之ヲ解職スルコトヲ得タリ分限令ハ此ノ如キ状態ヲ以テ國家ノ爲ニ不利益ナリト爲シ即チ其地位ヲ保障シテ政府ヲシテ安ニ解職スルコトヲ得ザラシメ以テ官吏ヲシテ安ジテ其職ニ盡クスコトヲ得シメタルナリ若シ解スル者ノ云フ所ノ如ク政府ノ都合ノ爲メ必要ナリト認ムル一切ノ場合ニ於テ任意ニ休職ヲ命ズルコトヲ得ベシトセバ是レ分限令以前ノ状態ニ復歸セシムルモノニシテ全ク法ノ精神ヲ滅却ノルモノナリ且ツ第四號ノ意義ヲシテ若シ解スルモノ、言ノ如クナラシメバ是レ政府ハ何時ニテモ休職ヲ命ズル事ヲ得ト言フニ異ナラズ其第一號乃至第三號ニ特ニ休職ヲ命ジ得ベキ場合ヲ列記セル全クハ無意味ノ冗文タルベキナリ

此ノ故ニ小官等ハ戸水氏ノ休職處分ハ文官分限令ヲ不法ニ適用シタルモノ

ナルコトヲ確信ス閣下若シ小官等ノ言ヲ以テ理アリト爲サバ願クバ速ニ往日ノ處分ヲ改メ復職ノ命アラシムコトヲ云々

松崎藏之助氏ノ姓名ハ右連名中ニ見エズト雖聞クトコロニヨレバ同氏ハ實際右ノ書面ニ名ヲ署シタルニモ拘ハラズ右提出ノ事ヲ新聞ニ知ラシムルニ當テ特更ニ其名ヲ記セシメザリシモノナリト云フ其眞否固ヨリ余ノ知ル所ニ非ズト雖假リニ此ノ如キ事實アリタリトスレバ是同氏ノ立場ヨリシテ已ムヲ得ザル事情アリシニ由ルモノト解釋セザル可ラズ宮崎道三郎氏ノ姓名ハ連名中ニ見エズ是同氏ガ主義トシテ學術研究以外ニ手ヲ出ササルニ由ルナラン而シテ加藤正治氏ノ姓名ノ連名中ニ見エサル亦蓋シ之ト同様ノ理由ニ基クモノナラン

十月一日ノ國家學會雜誌ヲ見ルニ美濃部氏ノ小引アリ金井氏ノ學者ノ言論ニ壓迫ヲ加フルノ不可ナルヲ説クアリ寺尾氏ノ學說ト政論アリ岡田氏ノ分限令ノ解釋ト教授ノ言論アリ小野塚氏ノ學問ノ獨立ト學者ノ責任アリ高野

氏ノ大學教授ノ言論ノ自由アリ姉崎氏ノ大學教授ノ自由ト其制裁アリ中川氏ノ學術上ノ言論ニ付テアリ河津氏ノ學問ノ獨立ニ付テアリ上杉氏ノ循吏傳アリ志田氏ノ帝國大學教授ノ地位アリ山田氏ノ大學教授ノ職責アリ美濃部氏ノ權力ノ濫用ト之ニ對スル反抗アリ笈氏ノ學者ノ國家ニ於ケル地位ヲ論ズアリ高橋氏ノ國際法學者ノ言論アリ一冊ノ雜誌ニ記スル所悉ク是大學教授言論ノ自由ニ關スル正論讜議ナリ

嗚呼諸氏ガ堂々トシテ文部大臣ノ處置ヲ攻撃スル亦壯ナリト謂フ可キナリ文部大臣並ニ他ノ内閣員ハ國家學會雜誌ヲ見テ必ズ局々然トシテ驚駭ノ色ヲ顯ハシタルナラン之ヲ聞ク當時法制局長官ノ地位ニ在リシ一木教授ハ教授會當日ニ於テ國家學會雜誌ノ配付ヲ受ケ其表紙ニ記スルノ論題ヲ見テ國家學會ノ評議員タルコトヲ辭セント欲スルノ意ヲ洩シタルコトアリト云フ兎ニ角國家學會雜誌ハ大ニ天下ノ耳目ヲ引キタリ如何トナレバ是マデノ慣行ニ照ラスニ國家學會雜誌ハ殆ンド未タ嘗テ政府ノ處置ヲ非難シタルコトアラザルニ今回ニ限リテ有力ノ教授筆ヲ揃ヘテ政府ヲ攻撃ス平常此ノ雜誌

亨曰聞ク美濃部氏懲戒問題ハ濱田總長就職ノ際トマテ存續シタリ

ノ性質ヲ知ルモノ焉ゾ之ヲ見テ意外ノ感無キヲ得ンヤ且ツ余ノ聞ク所ヲ以テスレバ國家學會雜誌ノ編輯主任ハ名義ノミナラズ事實ニ於テモ亦美濃部教授ナリ美濃部教授温厚ニシテ篤實故ヲ以テ同輩間頗ル人望アリ而シテ局外者モ亦温厚篤實ノ君子ヲ以テ氏ヲ待ツ然ルニ氏ハ國家學會雜誌ヲ編輯スルニ當テ徹頭徹尾政府ヲ攻撃スルノ論文ヲ以テ其紙面ヲ埋ム如何ナル人物モ之ヲ見テ痛快ノ感ニ打タレタリト云フ

國家學會雜誌ノ紙面此ノ如キ有様ナルヲ以テ政府ハ大ニ美濃部氏ヲ嫌惡シ何等カノ方法ヲ以テ同氏ヲ困シマシメント欲シ懲戒委員ノ議ニ付ス可シトノ議論モ閑談ニ上リタリト云フ然ルニ其後帝國大學騒動ノ生シタルカ爲メニ美濃部氏ノ處分問題モ自然ニ消滅シタリ

十月二十二日雜誌明義ノ號外出ヅ之ヲ見ルニ國家學會雜誌ニ掲載シタル十二博士二學士ノ論文ニ對シ瀧本誠一氏ノ名義ヲ以テ駁撃ヲ加ヘタルモノナリ知ラズ之ヲ讀ム者多カリシヤ否ヤ

翻テ京都帝國大學ノ方面ヲ見レバ余ノ休職ニ逢フヤ否ヤ千賀春木仁井田高

根等ノ諸教授ヨリ懇篤ナル手紙來リタルノミナラズ同大學教授助教授ハ舉ケテ連名ヲ以テ書ヲ文部大臣ニ送リタリ其顛末ハ明治三十八年十月十五日ノ教育時論ニ記スルヲ以テ此ニ之ヲ轉載セン

○京都大學教授ノ抗議

戸水教授休職問題ニ關シ京都帝國大學法科大學長織田博士以下教授助教授ハ、巽キニ左ノ意見書ヲ文部大臣ニ提出シタリ

東京帝國大學法科大學教授法學博士戸水寛人ニ對スル休職處分ハ左ノ理由ニ因リ官吏ノ分限ヲ害シタル不當處分ト認ム

一處分ノ原因若シ單ニ文官分限令第十一條第一項第四號ニ從ヒ官廳事務ノ都合ニ依ル必要ニ在リトスレバ該規定ハ畢竟當該官廳事務ノ都合ニ付テ云フモノニシテ本問ノ事實ハ全ク之ニ反ス本人ハ俄ニ他人ヲシテ代ヘ難キ職務ニ在リテ其休職ハ却テ事務ノ進行ヲ阻害スルノミ毫モ該規定ノ豫想スルガ如キ事實ナシ

一處分ノ原因若シ本人ガ時局ニ關シテ爲シタル言動ニ在リトスレバ官吏

服務規律ニ違反シタルモノトシテ文官懲戒令ニ依ル手續ヲ採ルハ別論ナレドモ文官分限令ヲ適用シテ休職ヲ命ズベキ限ニ在ラズ

要スルニ本人ノ言動ノ是非ハ姑ク舍キ文部大臣ガ右ノ如ク法令ノ適用ヲ誤リテ官吏ノ分限ヲ害シ又更ニ學務ヲ弛廢セシメントスル利害ノ最モ直接ナル京都帝國大學法科大學ノ默過スルコト能ハザル處ナリ茲ニ理由ヲ開陳シテ速ニ不當處分ノ取消アラシムコトヲ望ム

然ルニ文部大臣ハ之レヲ以テ教授會ノ決議ト誤認シ其權限ニ屬セズトノ理由ヲ以テ意見書ヲ差戻シタルニヨリ織田學長ヨリ教授會ノ議決ニ非ザル旨ヲ辯明シテ其儘更ニ差出シタルバ文部大臣ハ一覽ノ上返附スルトノ事ニテ復々差戻シタリ依ツテ去月二十九日又モ臨時集會ヲ學士會事務所ニ開キ左ノ勸告書ヲ提出スルニ決シ一同連署ノ上本月三日之ヲ文相ニ發送シタリ
某等謹デ久保田文部大臣閣下ニ白ス巽ニ東京帝國大學法科大學教授法學博士戸水寛人ガ休職ヲ命ゼラル、ヤ書ヲ裁シテ閣下ニ呈シ其處分ノ速ニ裁撤セラレンコトヲ望メリ閣下初メハ見テ以テ越權ノ所爲ト爲シ再ビニ

シテ幸ニ一覽ヲ經ルコトヲ得タルモ遂ニ答ヘラレズ夫レ處分ノ不當ニシテ且違法ナルコトハ某等既ニ之ヲ指斥セリ殊ニ頃ロ新聞紙報ズル所ノ東京諸同僚ノ上書義理明白情至リ意盡ク閣下ノ明敏ニ事理ニ通ズルヲ以テシテ豈此ニ察セザランヤ閣下嘗テ長ク職ニ文部ニ在リ桂冠ノ後モ常ニ意ヲ學制ノ改善ニ用ヒ其貴族院ニ在テ爲セル侃諤ノ議論ノ如キハ世人ノ喜テ傾聽セシ所ニ非ズヤ而シテ今ハ即チ此不當不法ノ處分ヲ敢テス某等竊ニ閣下ノ爲メニ之ヲ惜ム然レドモ想フニ斯ノ如キハ素ト閣下ノ心事ニ非ズ蓋シ止ムコトヲ得ズシテ此ニ至レルナラン唯閣下ノ職ハ宜シク毅然トシテ學問ノ獨立ヲ保障シ以テ官權ノ逼害ヲ防グベカリシニ事茲ニ出デズ却テ漫然トシテ附和シ法令ヲ曲解シテ官吏ノ分限ヲ侵犯シ大學ノ教務ヲ荒廢セシム閣下安ゾ其責ヲ辭スベケンヤ願クハ速ニ戸水寛人ノ復職ヲ命ジ以テ閣下ノ心事ヲ明ニシ且過ヲ改ムルニ憚ラザルノ雅量ヲ示セ敢テ三タビ進言シテ閣下ノ反省ヲ仰グ頓首

右教育時論ニ記スル所當時ノ新聞ニ記スル所ト着々符合スルガ故ニ大體ニ於テ誤謬無キコト、信ズ余ハ京都帝國大學ノ諸氏ガ余ニ對シテ多大ノ同情ヲ寄セラレタルヲ知ルガ故ニ心ニ於テ大ニ感謝スル所アリタリ

余ガ休職ノ處分ニ付セラレタルノ件、余ガ報知新聞ノ客員ト爲リタルノ件、余ガ法科大學講師ト爲リタルノ件、余ガ宇都宮府中、木更津、二本松、福島ニ於テ演説シタルノ件、及六博士ガ請願書ヲ宮内省ニ捧呈シタルノ件ハ前段既ニ之ヲ述ベタリ是等ノ事件ハ前後錯綜シテ生シタル者ニシテ一事ノ結末アリタル後ニ於テ他ノ事件ヲ生ジタルニ非ズ而シテ之ト同時ニ生ジタル他ノ事件ヲ述ブレバ余及余ノ同志ハ時局ニ關シテ屢ハ論議スル所アリタリ此ニ於テ十月三日ノ國民新聞ニ於テ左ノ論文ヲ掲ク

○學者ノ本分

學者ニ責ムルニ普通人以上ノ義務ヲ以テスルハ較々刻ニ失スルノ嫌アレドモ其ヲシテ學者ノ本分ニ屬スルモノナラシメバ刻ナリトテ其責任ヲ免カレシムベカラズ吾人ノ此ニ學者ニ向テ語ラムト欲スル所ハ彼等ハ其研究上知

リ得ルコトヲ知ルノ義務アルト同時ニ知ラザルヲ知ラズト爲スノ義務アルコト是レナリ普通人ナラバ知ラザルヲ知レリト爲シ強テ臆説ヲ逞クシタリトテ是レ素人ノ事トシテ寛恕モスベケレ、學者専門家ヲ標榜シツ、知ラザルヲ知レリト爲シ強テ臆説ヲ爲サバ單ニ其説ノ可否ヲ議スルノミナラズ更ニ其人ノ學殖ノ有無ヲモ議セザル可ラザルニ至ラムトス是レ強チ學者ニ刻ナルニアラズシテ社會ノ過誤ヲ防グガ爲メナリ學者専門家ノ名ヲ售ツテ人ノ子ヲ賊フヲ憂フルガ爲メナリ

此頃戸水博士休職トナリテ大學ニ羅馬法ノ教授ヲ缺クト云フヤ世間往々大學教授ガ故意ニ講座擔當者ヲ缺ケルナリ講座ニ當ルベキモノ固ヨリ多シト雖モ彼等ハ文部大臣ニ反抗スルガ爲メニ戸水博士ナラデハ其人ナシト稱スルナリト説クモノアリ然レドモ吾人ハ寧ロ他人皆羅馬法講座ニ立ツヲ躊躇スルヲ諒トスルモノ也羅馬法ハ法科大学ノ必修科目也苟モ法科大学ニ在リタルモノ誰カ之ヲ學バザルモノアラム特ニ比較法學法制史等ヲ研究スルモノハ常ニ手ヲ羅馬法ヨリ離スコトナキ也何ツ戸水博士獨リ之ヲ學ビタリト

云ハムヤ現ニ戸水博士以前ニ於テ此講座ニ立タル人モアリ戸水博士以後ニ於テ之ヲ研究シタルモノモアレバ我法科大学ハ決シテ其人ナキニ苦マザルベシト雖モ學者ノ情トシテハ精ノ上ニ精深奥ノ上ニ深奥ヲ望ムベク一日ノ長アリトモ讓リテ其ノ教ヲ聽クノ襟懷ナカルベカラズ

然ルニ此ノ法科大学ノ教授ニシテ時ニ意外ノ失誤ニ陥ルモノアリ乃チ嘗テ學ビタルコトモナキ戰略ヲ説キ嘗テ修メタルコトモナキ外交術ヲ語り甚ダシキハ十分ノ研究ヲモ爲サズシテ放言漫語シ一たび破綻ヲ起セバ自ラ收集スベカラザルノ窮ニ陥ルコトアルハ何ゾヤ單ニ之レヲ語リ之レヲ説クノミナラバ未ダシモ、此ノ粗笨杜撰ナル言説ヲ以テ之ヲ世間ニ誇衒シ時トシテハ之ヲ以テ至尊ヲモ冒干セムトスルモノアルニ至リテハ誰カ其ノ行動ノ矛盾撞著ニ驚カザラムヤ

法科大学教授ノ上奏中我が經濟上ノ實力ハ將來無限ノ軍費ヲ辨ジテ綽々トシテ餘裕アルコトヲ證言シタルモノアリ此ノ上奏者中財政、經濟ノ智識アルモノトテハ蓋シ金井博士一人ナルベク此ノ人ハ當年ノ主戰論者ニシテ我が

露國ト戰ヒ陸軍費ハ一箇年一億九千萬圓ニテ足レリト斷言シテ人ヲ驚ロカシタルコトアリタレバ此ニ軍費ヲ云々スルモ亦タ同一骨法ニ出デタルモノナラザラムヤ吾人トテモ不幸ニシテ戰爭繼續スルトモ立ロニ財源ニ窮スベシトハ思ハザレドモ二億圓ニ足ラヌ陸軍費ニテ一箇年戰フベシト云ガ如キ大膽不敵ナル妄斷ヲ下スノ勇氣ナキナリ

且彼等ノ戰略論外交論皆此類ナルヲ以テ一々批評スルノ要ナシト雖モ條約ノ解釋又ハ國家ノ組織ニ就テハ彼等ハ所謂專門家ナルベケレバ必ラズヤ責任アルノ説ヲ爲サザルベカラザルナリ然ルニ上奏者ハ曰ク講和條約ノ條項一トシテ開戰ノ目的ヲ達スルモノナク(中畧)萬世不雪ノ辱ヲ取ルト然ルニ條約ノ條項ハ即チ一々開戰ノ目的ト相一致スルモノナルコトハ宣戰ノ詔勅ト此條約トヲ對照セバ明白ナリ且條約ノ如何ナル條項ガ日本ノ辱タルカ彼等遂ニ之ヲ舉示スル能ハザルニ於テ其言復一顧ニダモ値セザルナリ且彼等ハ條約中獨立國ノ體面ヲ損スルモノアリト云ヘリ若シ不幸ニシテ之アラバ實ニ一大事ナリ知ラズ何ヲ指シテ爾カ云フカ誣妄モ亦甚シカラズヤ若シ退イ

テ少ク沈思スル所アラバ蓋シ此ノ如キ妄語ヲ爲ス能ハザルベシ

惟ルニ 聖德乾行赫々トシテ天日ノ如キアリ今ノ閣臣ノ如キハ惕然トシテ大命ヲ奉ズ只其ノ輔弼ノ責ノ重キヲ是レ懼ル、ノミ彼等乃チ漫ニ外國衰亡史中ノ文字ヲ假リ來リテ今次ノ條約ヲ以テ萬已ムヲ得ザルニ出ヅト爲シ以テ 陛下ノ聰明ヲ壅蔽シ奉ラムト擬スナド、放言ス事體ヲ解セザルモ亦タ甚シカラズヤ特ニ彼等カ國務大臣帝國議會等ノ憲法上ノ國家機關ヲ眼中ニ置カズシテ希臘時代ノ昔ニモ行ハレタラム國民ノ總意ヲ以テ政治ヲ行フヲ以テ立憲ノ美制ナリト爲スニ至リテハ其立言ノ幼稚ナル洵ニ憫ムベキモノアリ知ラズヤ立憲政治ナルモノハ政體中最モ複雜ナル機關最モ窮屈ナル體制ヲ以テ行フモノタルコトヲ若シ夫レ一部民衆ノ喧囂ヲ以テ憲法上ノ民意機關ヲ壓シ下級官吏ヲシテ輔弼ノ閣臣ヲ凌ガシムルガ如キアラバ立憲政治ハ愚尋常ノ法制サヘモ維持スベカラザルナリ斯ル明白且單簡ナル事理ヲモ辨ズル能ハザルモノガ能クモ學者專門家ヲ標榜トシテ世間ニ呼號シ得タルモノナレ

此ク言ヘバトテ吾人ハ決シテ既往ニ溯リテ上奏者ヲ是非スルモノニアラズ
 要ハ只學者トアルカラニハ常ニ其本分ヲ守ルコトヲ心掛ケ荷モ動カズ荷モ
 語ラズ以テ天下ノ儀表トナルコトヲ要求スルニアリテ學者ハ其知リ得ル所
 ノモノハ飽マデ知ラムト欲シ其ノ研究ヲ進メ其ノ知ラザル所ハ知ラズトシ
 決シテ知リ得タル爲シテ世間ヲ欺クガ如キコトアルベカラズ此ノ如クシテ
 初メテ世間ヨリモ尊敬セラル、道理ナリ學問ニハ國境ナシ彼等ニシテ克ク
 其ノ本分ヲ守リテ造詣スル所アラバ我が國民ハ勿論全世界ノ國民亦之レヲ
 尊敬シテ無冠ノ帝王トモ心界ノ覇者トモ仰グニ至ルベキナリ

此ノ如キ論文ノ出ヅルヲ見レバ其當時政府ハ吾輩ノ處分並ニ吾輩ノ議論ニ
 關シテ如何ニ困却シタルカラ知ルニ足ル

是ヨリ先キ九月三十日學習院教授中村進午氏論旨免官ト爲ル同氏宮内省ノ
 管轄ノ下ニ在リナガラ或ハ長官ノ許可ヲ得ズシテ講和條約ニ關シテ請願書
 ヲ宮内省ニ捧呈シ或ハ新聞ニ雜誌ニ其議論ヲ公ニシタルヲ以テ終ニ此ノ如

遊者ノ如キ御用
 記者ノ有ルハ
 實ニ其内閣ヲ
 何ニシテ以テ
 善クシテ以テ
 リシテ以テ以
 足ルモノニ
 士シテ以テ以
 能ハシテ以テ
 ニ足ルナリ

遊者ノ如キ御用
 記者ノ有ルハ
 實ニ其内閣ヲ
 何ニシテ以テ
 善クシテ以テ
 リシテ以テ以
 足ルモノニ
 士シテ以テ以
 能ハシテ以テ
 ニ足ルナリ

キ處分ニ逢ヒタルナリ是中村氏ニ取リテハ甚ク恐縮ス可キ事件ナリト謂ハ
 ザル可ラズ世人或ハ學習院教授ノ言論ノ自由ト大學教授言論ノ自由ト同
 一視シテ議論ヲ立ツルモ是甚シキ誤謬ナリ中村氏ヲ以テ論旨免官ト爲シタ
 ルハ果シテ適當ノ處置ナリヤ否ヤハ余ハ此ニ之ヲ論スルヲ要セズ然レドモ
 コハ決シテ不法ノ處分ニ非ズ如何トナレバ學習院教授ハ大學教授ホド言論
 ノ自由ヲ有スルモノニ非ズシテ其職掌上稍ヤ嚴格ナル制度ノ下ニ立ツモノ
 ナリ故ニ中村氏論旨免官ト爲リタルハ甚ク恐縮ス可キ事件ナルコト論ヲ待
 タズ然リト雖此ノ如キ地位ニ在リナガラ一國ノ大事ニ關シテ謬々ノ言ヲ爲
 シ遂ニ一身ノ前途ヲ犠牲ニ供スルニ至テハ吾輩ノ大ニ同情ヲ寄スル所ナリ
 其後中村氏ハ兼職タル東京高等商業學校教授ヲモ辭セリ

十月六日高橋中村岡田建部寺尾金井ノ諸氏余ヲ併セテ七人紅葉館ニ會合ス
 是眞ノ七博士ト謂フ可キナリ然レトモ昔時ノ七博士ト其數ヲ同シクスルモ
 必ズシモ其人ヲ同シクセズ明治三十六年六月及七月頃ノ所謂七博士ナル者
 ハ富井金井寺尾中村高橋小野塚戸水ノ七人ナリシガ今ヤ富井小野塚ノ兩氏

吾輩ト事ヲ共ニセズ高橋氏モ亦吾輩ノ團體ノ中心ヲ離レ岡田建部ノ兩氏ハ
吾輩ト共ニ會合スルノ機會頗ル多ク且ツ常ニ事ヲ共ニシツ、アルモノアリ
十月六日紅葉館ニ會合シタルノ博士其數偶マ七人はヲ以テ吾輩今昔ノ感ニ
堪ヘズ

暑中休暇ノ頃松浦厚氏郷里平戸ニ行キ中村進午氏琉球ニ遊ビ建部遯吾氏モ
亦郷里ニ歸省シ余亦石川富山兩縣ニ行ケリ其後講和條件ニ關シ閣下ニ伏シ
テ請願書ヲ捧呈セントスルニ當テ既ニ歸京シタルノ同志ハ南佐莊ニ會合ヲ
催シタルコト無キニ非ズト雖同莊ノ主人公タル松浦氏不在ノ故ヲ以テ自ラ
寂寞蕭條ノ感無キ能ハズ然ルニ十月ノ初松浦氏東京ニ歸リタルニ由リ十日
余ハ藏原寺尾ノ兩氏ト共ニ南佐莊ニ於テ松浦氏ト會合セリ
十月十六日日露條約愈ヨ世ニ公ニセラル即チ左ノ如シ

●日露兩國講和條約及追加約款

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ハ兩國及其人民ニ平和ノ幸福ヲ回復
セムコトヲ欲シ講和條約ヲ締結スルコトニ決定シ之ガ爲ニ日本國皇帝陛下

ハ外務大臣從三位勳一等男爵小村壽太郎閣下及亞米利加合衆國駐劄特命全
權公使從三位勳一等高平小五郎閣下ヲ全露西亞國皇帝陛下ハ「ブレシデント、
オヴ、ゼ、コムミツチー、オヴ、ミニスター、オヴ、ゼ、エムバイア、オヴ、ロシア」セクレ
タリー、オヴ、ステート「セルジ、ウキツテ閣下及亞米利加合衆國駐劄特命全權大
使「マスタ、オヴ、ゼ、イムピリアル、コールト、オヴ、ロシア」男爵「ローマン、ローゼン」
閣下ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ
其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議決定セリ

第一條 日本國皇帝陛下ト全露西亞國皇帝陛下トノ間及兩國並兩國臣民ノ
間ニ將來平和及親睦アルベシ

第二條 露西亞帝國政府ハ日本國ガ韓國ニ於テ政事上、軍事上及經濟上ノ卓
絶ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本帝國政府ガ韓國ニ於テ必要ト認ム
ル指導保護及監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙シ又ハ之ニ干涉セザルコ
トヲ約ス

韓國ニ於ケル露西亞國臣民ハ他ノ外國ノ臣民又ハ人民ト全然同様ニ待遇

セラレベク之ヲ換言スレバ最惠國ノ臣民又ハ人民ト同一ノ地位ニ置カルベキモノト知ルベシ

兩締約國ハ一切誤解ノ原因ヲ避ケムガ爲露韓國ノ國境ニ於テ露西亞國又ハ韓國ノ領土ノ安全ヲ侵迫スルコトアルベキ何等ノ軍事上措置ヲ執ラザルコトニ同意ス

第三條 日本國及露西亞國ハ互ニ左ノ事ヲ約ス

- 一 本條約ニ附屬スル追加約款第一ノ規定ニ從ヒ遼東半島租借權ガ其效カヲ及ボス地域以外ノ滿洲ヨリ全然且同時ニ撤兵スルコト
- 二 前記地域ヲ除クノ外現ニ日本國又ハ露西亞國ノ軍隊ニ於テ占領シ又ハ其ノ監理ノ下ニ在ル滿洲全部ヲ舉ゲテ全然清國專屬ノ行政ニ還附スルコト

露西亞帝國政府ハ清國ノ主義ヲ侵害シ又ハ機會均等主義ト相容レザル何等ノ領土上利益又ハ優先的若ハ專屬的讓與ヲ滿洲ニ於テ有セザルコトヲ聲明ス

第四條 日本國及露西亞國ハ清國ガ滿洲ノ商工業ヲ發達セシメムガ爲列國ニ共通スル一般ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙セザルコトヲ互ニ約ス

第五條 露西亞帝國政府ハ清國政府ノ承諾ヲ以テ旅順口、大連並其ノ附近ノ領土及領水ノ租借權及該租借權ニ關聯シ又ハ其ノ一部ヲ組成スル一切ノ權利特權及讓與ヲ日本帝國政府ニ移轉讓渡ス露西亞帝國政府ハ又前記租借權ガ其ノ效力ヲ及ボス地域ニ於ケル一切ノ公共營造物及財産ヲ日本帝國政府ニ移轉讓渡ス

兩締約國ハ前記規定ニ係ル清國政府ノ承諾ヲ得ベキコトヲ互ニ約ス
日本帝國政府ニ於テハ前記地域ニ於ケル露西亞國民ノ財産權ガ完全ニ尊重セラレベキコトヲ約ス

第六條 露西亞帝國政府ハ長春(寬城子)旅順口間ノ鐵道及其ノ一切ノ支線並同地方ニ於テ之ニ附屬スル一切ノ權利特權及財産及同地方ニ於テ該鐵道ニ屬シ又ハ其ノ利益ノ爲ニ經營セラレ、一切ノ炭坑ヲ補償ヲ受クルコトナク且清國政府ノ承諾ヲ以テ日本帝國政府ニ移轉讓渡スベキコトヲ約ス

兩締約國ハ前記規定ニ係ル清國政府ノ承諾ヲ得ベキコトヲ互ニ約ス

第七條 日本國及露西亞國ハ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道ヲ全ク商工業ノ目的ニ限リ經營シ決シテ軍略ノ目的ヲ以テ之ヲ經營セザルコトヲ約ス
該制限ハ遼東半島租借權ガ其ノ效力ヲ及ボス地域ニ於ケル鐵道ニ適用セサルモノト知ルヘシ

第八條 日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ交通及運輸ヲ增進シ且之ヲ便易ナラシムルノ目的ヲ以テ滿洲ニ於ケル其ノ接續鐵道業務ヲ規定セムカ爲成ルベク速ニ別約ヲ締結スベシ

第九條 露西亞帝國政府ハ薩哈噠島南部及其ノ附近ニ於ケル一切ノ島嶼並該地方ニ於ケル一切ノ公共營造物及財産ヲ完全ナル主權ト共ニ永遠日本帝國政府ニ讓與ス其ノ讓與地域ノ北方境界ハ北緯五十度ト定ム該地域ノ正確ナル經界線ハ本條約ニ附屬スル追加約款第二ノ規定ニ從ヒ之ヲ決定スベシ

日本國及露西亞國ハ薩哈噠島又ハ其ノ附近ノ島嶼ニ於ケル各自ノ領地内

ニ堡壘其ノ他之ニ類スル軍事上工作物ヲ築造セサルコトニ互ニ同意ス又兩國ハ各宗谷海峽及韃靼海峽ノ自由航海ヲ妨礙スルコトアルヘキ何等ノ軍事上措置ヲ執ラサルコトヲ約ス

第十條 日本國ニ讓與セラレタル地域ノ住民タル露西亞國臣民ニ付テハ其ノ不動産ヲ賣却シテ本國ニ退去スルノ自由ヲ留保ス但シ該露西亞國臣民ニ於テ讓與地域ニ在留セムト欲スルトキハ日本國ノ法律及管轄權ニ服従スルコトヲ條件トシテ完全ニ其ノ職業ニ從事シ且財産權ヲ行使スルニ於テ支持保護セラレベシ日本國ハ政事上又ハ行政上ノ權能ヲ失ヒタル住民ニ對シ前記地域ニ於ケル居住權ヲ撤回シ又ハ之ヲ該地域ヨリ放逐スベキ充分ノ自由ヲ有ス但シ日本國ハ前記住民ノ財産權ガ完全ニ尊重セラレベキコトヲ約ス

第十一條 露西亞國ハ日本海「オホーツク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國領地ノ沿岸ニ於ケル漁業權ヲ日本國臣民ニ許與セムガ爲日本國ト協定ヲナスベキコトヲ約ス

前項ノ約束ハ前記方面ニ於テ既ニ露西亞國又ハ外國ノ臣民ニ屬スル所ノ

權利ニ影響ヲ及サハルコトニ雙方同意ス

第十二條 日露通商航海條約ハ戰爭ノ爲廢止セラレタルヲ以テ日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ現下ノ戰爭以前ニ效力ヲ有シタル條約ヲ基礎トシテ新ニ通商航海條約ヲ締結スルニ至ルマデノ間兩國通商關係ノ基礎トシテ相互ニ最惠國ノ地位ニ於ケル待遇ヲ與フルノ方法ヲ採用スベキコトヲ約ス而シテ輸入税及輸出税、税關手續、通過税及噸税並一方ノ代辦者、臣民及船舶ニ對スル他ノ一方ノ領土ニ於ケル入國ノ許可及待遇ハ何レモ前記ノ方法ニ依ル

第十三條 本條約實施ノ後成ルヘク速ニ一切ノ俘虜ハ互ニ之ヲ還附スベシ日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ各俘虜ヲ引受クベキ一名ノ特別委員ヲ任命スベシ一方ノ政府ノ收容ニ係ル一切ノ俘虜ハ他ノ一方ノ政府ノ特別委員又ハ正當ニ其ノ委任ヲ受ケタル代表者ニ引渡シ同委員又ハ其ノ代表者ニ於テ之ヲ受領スベク而シテ其ノ引渡及受領ハ引渡國ヨリ豫メ受領國ノ特別委員ニ通知スベキ便宜ノ人員及引渡國ニ於ケル便宜ノ出入地ニ於

テ之ヲ行フベシ

日本國政府及露西亞國政府ハ俘虜引渡完了ノ後成ルヘク速ニ俘虜ノ捕獲又ハ投降ノ日ヨリ死亡又ハ引渡ノ時ニ至ルマデ之ガ保護給養ノ爲ニ各負擔シタル直接費用ノ計算書ヲ互ニ提出スベシ同計算書交換ノ後露西亞國ハ成ルヘク速ニ日本國ガ前記ノ用途ニ支出シタル實際ノ金額ト露西亞國ガ同様ニ支出シタル實際ノ金額トノ差額ヲ日本國ニ拂戻スベキコトヲ約ス

第十四條 本條約ハ日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下ニ於テ批准セラレベシ該批准ハ成ルヘク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ本條約調印ノ日ヨリ五十日以内ニ東京駐劄佛蘭西國公使及聖彼得堡駐劄亞米利加合衆國大使ヲ經テ日本帝國政府及露西亞帝國政府ニ各之ヲ通告スベシ而シテ其ノ終ノ通告ノ日ヨリ本條約ハ全部ヲ通ジテ完全ノ效力ヲ生スベシ正式ノ批准交換ハ成ルヘク速ニ華盛頓ニ於テ之ヲ行フベシ

第十五條 本條約ハ英吉利文及佛蘭西文ヲ以テ各二通ヲ作り之ニ調印スベシ其ノ各本文ハ全然符合スト雖モ其ノ解釋ニ差異アル場合ニハ佛蘭西文

ニ據ルベシ

右證據トシテ兩帝國全權委員ハ茲ニ本講和條約ニ記名調印スルモノナリ
明治三十八年九月五日即一千九百五年八月二十三日(九月五日)「ボーツマス」
(「ニュー・ハムプシア」州)ニ於テ之ヲ作ル

三五六

小村 壽太郎(記名)印

高平 小五郎(記名)印

セルジ、ツキッテ(記名)印

ローゼン(記名)印

本日附日本國及露西亞國間講和條約第三條及第九條ノ規定ニ從ヒ下名ノ
全權委員ハ左ノ追加約款ヲ締結セリ

第一 第三條ニ付

日本帝國政府及露西亞帝國政府ハ同時ニ且講和條約ノ實施後直ニ滿洲ノ
地域ヨリ各其ノ軍隊ノ撤退ヲ開始スベキコトヲ互ニ約ス而シテ講和條約
實施ノ日ヨリ十八箇月ノ期間内ニ兩國ノ軍隊ハ遼東半島租借地以外ノ滿

洲ヨリ全然撤退スベシ

前面陣地ヲ占領スル兩國軍隊ハ最先ニ撤退スベシ

兩締約國ハ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道線路ヲ保護セムガ爲守備兵ヲ置クノ
權利ヲ留保ス該守備兵ノ數ハ「キロメートル」毎ニ十五名ヲ超過スルコト
ヲ得ズ而シテ日本國及露西亞國軍司令官ハ前記最大數以内ニ於テ實際ノ
必要ニ願ミ之ニ使用セラルベキ守備兵ノ數ヲ雙方ノ合意ヲ以テ成ルベク
少數ニ限定スベシ

滿洲ニ於ケル日本國及露西亞國軍司令官ハ前記ノ原則ニ從ヒ撤兵ノ細目
ヲ協定シ成ルベク速ニ且如何ナル場合ニ於テモ十八箇月ヲ超ヘザル期間
内ニ撤兵ヲ實行セムガ爲雙方ノ合意ヲ以テ必要ナル措置ヲ執ルベシ

第二 第九條ニ付

兩締約國ニ於テ各任命スベキ同數ノ人員ヨリ成ル境界劃定委員ハ本條約
實施後成ルベク速ニ薩哈噠島ニ於ケル日本國及露西亞國領地間ノ正確ナ
ル境界ヲ永久ノ方法ヲ以テ實地ニ就キ畫定スベシ該委員ハ地形ノ許ス限

三五七

リ北緯五十度ヲ以テ境界線トナスコトヲ要ス若シ何レカノ地點ニ於テ同緯度ヨリ偏倚スルノ必要ヲ認ムルトキハ他ノ地點ニ於ケル對當ノ偏倚ニ依リテ之ヲ填補スベシ該委員ハ讓與中ニ包含セラレル附近島嶼ノ表及明細書ヲ調製スルノ任ニ當リ且讓與地域ノ境界ヲ示ス地圖ヲ調製シ之ニ署名スベシ該委員ノ事業ハ兩締約國ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス前記追加約款ハ其ノ附屬スル講和條約ノ批准ト共ニ批准セラレタルモノト看做サルベシ

明治三十八年九月五日即一千九百五年八月二十三日(九月五日)「ポーツマ」スニ於テ

小村 壽 太 郎(記名)
高 平 小 五 郎(記名)
セルジ、ウキ、ツテ(記名)
ロ ー ゼ ン(記名)

遊音日日本人ハ
是ヨリ更ニ此新
局面ニ對スル新
ナル可カラサル
地位ニ立テリ

遊音日當時余ハ
病母ヲ奉シテ餘
倉ニ在リ會スル
ヲ果サハリキ

荷モ日本人ト稱ス可キ者ハ此ノ條約ヲ見テ不快ノ念ニ堪ヘズ察スルニ桂伯小村男モ此ノ條約ニ對シテ長大息セザラント欲スルモ得可ラズ
十月二十日松浦寺尾中村藏原ノ諸氏ト共ニ復南佐莊ニ會シ尋テ夕刻ニ至リ圓城寺大谷上島繁野福田村松下部細野石山川尻坂本藏原花岡中村彌高橋秀臣川上英一郎及羽仁ノ諸氏ト共ニ偕樂園ニ會ス後此團體ヲ稱シテ維新俱樂部ト謂フ此俱樂部ノ會合頻繁ナラズ其後十二月二十六日ニ至リ之ヲ開キタルコトアリ
十月二十三日觀艦式ヲ行ハル余差支有リ行イテ陪觀スルコト能ハズ
十一月十三日松浦藏原建部寺尾余ヲ併セテ五人南佐莊ニ會合ス此日松浦氏ハ十一月限り南佐莊ヲ閉鎖ス可キ事ヲ報告シ吾輩亦城南會ヲ廢スルノ決議ヲ爲ス而シテ十一月二十七日ニ至リ余及松浦寺尾中村ノ諸氏南佐莊ニ會ス是南佐莊ニ於ケル最終ノ會合ナリ噫
十月三十一日露國大動亂ノ報ニ接シ十一月十八日又之ニ似タルノ報ニ接シ其後此ノ如キ報ヲ得タルコト數回終ニ明治三十九年五月十五日(火曜)ニ至リ

露國ニ於テハ愈ヨ土曜日(十二日)ニ國會ヲ開設シタリトノ事諸新聞ニ見ユ
十一月二十三日日韓新協約ハ載セテ官報號外ニ在リ即チ左ノ如シ

●日韓協約

日本帝國政府及韓國政府ハ兩帝國ニ結合スル利害共通ノ主義ヲ鞏固ナラシ
メンコトヲ欲シ韓國ノ富強ノ實ヲ認ムル時ニ至ル迄此目的ヲ以テ左ノ條款
ヲ約定セリ

第一條 日本國政府ハ在東京外務省ニヨリ今後韓國ノ外國ニ對スル關係及
ビ事務ヲ監理指揮スベキ日本國ノ外交代表者及ビ領事ハ外國ニ於ル韓國
ノ臣民及利益ヲ保護スベシ

第二條 日本國政府ハ韓國ト他國トノ間ニ現存スル條約ノ實行ヲ全フスル
ノ任ニ當リ韓國政府ハ今後日本國政府ノ仲介ニヨラズシテ國際的性質ヲ
有スル何等ノ條約若クハ約束ヲナサルコトヲ約ス

第三條 日本國政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ闕下ニ一名ノ統監(レ
ジデント、ゼネラル)ヲ置ク統監ハ専ラ外交ニ關スル事項ヲ管理スル爲メ京

城ニ駐在シ親シク韓國皇帝陛下ニ内謁スルノ權利ヲ有ス日本國政府ハ又
韓國ノ各開港場及其他日本國政府ノ必要ト認ムル地ニ理事官(レジデント)
ヲ置クノ權利ヲ有ス理事官ハ統監ノ指揮ノ下ニ從來在韓國日本領事ニ屬
シタル一切ノ職權ヲ執行シ并本協約ノ條款ヲ完全ニ實行スル爲メ必要ト
スベキ一切ノ事務ヲ處理スベシ

第四條 日本國ト韓國トノ間ニ現存スル條約及約束ハ本協約ノ條款ニ牴觸
セザル限り都テ其効力ヲ繼續スルモノトス

第五條 日本國政府ハ韓國皇室ノ安寧ト尊嚴ヲ維持スルコトヲ保證ス

依テ二十六日韓國ノ經營ト題スル論文ヲ草シ之ヲ十二月十日ノ外交時報ニ
掲ク即チ左ノ如シ

●韓國ノ經營

本月二十三日官報號外ヲ以テ日韓協約愈ヨ發表セラレ其第三條ニヨレバ日
本政府ハ其代表者トシテ韓國皇帝陛下ノ闕下ニ統監ヲ駐在セシメ専ラ外交

ニ關スル事項ヲ管理セシメ且ツ親シク皇帝陛下ニ内謁スルヲ得セシムルコト、爲リタリ是舊來ノ條約ニ比スレバ日本國ノ利益ノ爲メニ大ニ步武ヲ進メタルモノナレバ欣々然トシテ一大白ヲ擧ケテ之ヲ祝セサル可ラズ我政府ハ此ノ如キ新協約ヲ締結セザル可ラズトハ久シキ以前ヨリ吾人ガ熱心ニ主張セシ所、何故ニ我政府ハ英斷ヲ以テ韓國ニ臨マサリシヤハ有識者ガ夙ニ訝カリシ所ナレハ今更遲々緩々トシテ締結セラレタル此新協約ニ對シテ敢テ我政府ヲ賞揚スルヲ得ザルガ如キモ兎ニ角此新協約ニ基イテ日本ノ勢力ハ大ニ韓國ニ發展ス可キハ疑ヲ容レザル所、吾人ガ此協約ヲ見テ欣々然タル亦故無キニ非サルナリ

統監ガ韓國ノ内政ニ干與スルノ權利アルコトヲ此新協約ニ記載セズ是余ノ以テ遺憾ト爲ス所ナリ然レドモ統監ノ人物如何ニヨリテハ大ニ内政ニ干與シ以テ日本ヨリノ移住民及韓國ノ人民此兩者ノ利益ヲ計畫シ得可キハ論ヲ待タザル所ナレバ統監ノ手腕如何ニヨリテハ遺憾無ク新協約ノ條項ノ不備ヲ補フコトヲ得可キナリ此上ハ充分ニ手腕アル人物ノ撰バレテ統監ノ椅子

ニ憑ランコトヲ希望ス臺灣ノ治績ヲ見ルニ兒玉男總督ト爲リ後藤氏民政ノ長官ト爲リタル以來其治績大ニ揚レルハ衆目ノ視ル所韓國ニ派遣センカ爲メニ之ヨリ以上ノ人物ヲ撰ブコト目下ノ事情甚々困難ナラン特ニ種々ノ情實ノ纏綿スル現内閣ヲシテ人撰ヲ爲サシムルモ適當ノ人物ヲ得ルコト至難ノ業ナラン然レトモ韓國經營ハ國家ノ大事ナレハ私情ヲ抛テ適當ノ人物ヲ統監ニ任スルコト今日ノ急務ニ非スシテ何ゾヤ

統監ト爲リテ成功スルニ道アリ日本人民ノ利益ノミナラズ韓國人民ノ利益ヲモ商量シ以テ内政ヲ施サシムルコト是ナリ若シ日本人民ノ利益ノミヲ考ヘ韓國人民ノ利益ヲ度外ニ措クトキハ韓國人民間ニ怨嗟ノ聲絶エルコト無ク姦邪ノ徒之ニ乘シテ暴民ヲ煽動シ讒誣ノ輩之ヲ見テ虚報ヲ四方ニ傳播シ以テ大ニ日本ノ利益ヲ傷ケント欲ス可キハ之ヲ想像スルニ難カラズ且ツ之ヲ歴史ニ徵スルニ殖民地ノ經營ニ從事シ本國民ノミノ利益ヲ計ルモノハ失敗シ殖民地ノ土民ノ利益ヲ併セテ之ヲ増進シタルモノハ成功セリ西班牙及英國ノ事跡之ヲ證シテ餘アリ

千五百十三年西班牙人「ブスコ」
 ル以來西班牙ノ權勢隆々トシテ旭日ノ昇ルカ如ク新世界ニ於テ廣大ノ領土ヲ有シ太平洋ノ霸權ヲモ其一手ニ握ラントスルノ狀勢ヲ來タセリ而シテ羅馬法皇ハ形式上西班牙及葡萄牙ノ兩國ニ世界ノ大部分ヲ分與スルコト、爲シタリ然ルニ西班牙政府ハ其後到處殖民地ノ土民ヲ奴隸視シ且ツ殖民地ニ滞在スル本國民ヲ冷遇シ其結果殖民地ノ商業モ悉ク隆盛ノ域ニ達セズ之ヲ英國ノ殖民地ニ比シ益ス遜色ヲ呈セリ而シテ殖民地ニヨリテ利益ヲ得シモノハ政府ト「ゼスト」宗ノ僧侶ノミニシテ人民一般ハ其利益ニ與カルコトヲ得ズ唯殖民地ヲ支持スルノ義務アリシノミ西班牙ノ殖民地ハ此ノ如キ狀態ニ陥キリタルカ爲メニ人民ハ殖民地ヲ失フモ敢テ意ト爲サズ反テ之ヲ悦ブガ如キ事情無キニ非ズ千八百九十八年米西戰爭ノ結果トシテ西班牙ハ「キューバ」ト比律賓トヲ失ヒタルモ西班牙ノ人民ハ之ヲ悲マズ其之ヲ失フヲ視ルコト恰モ對岸ノ火災ノ如ク然リ而シテ其原因ニ溯レバ西班牙政府ガ曩時殖民地經營ノ方法ヲ誤リタルニ職トシテ之由ルナリ英國モ亦殖民地ノ經營

ニ付テ失策ヲ爲シタルコトアリ之カ爲メニ千七百七十六年ニ米國ハ獨立ノ宣言ヲ爲シ千八百五十七年ニ印度ニ内亂起リタリ然レトモ之ヲ要スルニ英國ハ殖民地ヲ統御スルノ妙理ヲ會得シタルカ爲メ其殖民地ハ北米ニ在ルモノモ濠洲ニ在ルモノモ悉ク盛況ヲ呈シ今ヤ是等殖民地ト英國トヲ合併シテ一大帝國ヲ作ル可シト唱道スルモノアルニ至ル其印度ニ對スルノ政策ハ未タ善ヲ盡シ美ヲ盡スモノニ非ズト雖之ヲ西班牙ノ殖民地經營ニ比スレバ其優劣固ヨリ同日ノ談ニ非サルナリ
 夫レ韓國ノ事情ハ印度、濠洲、北米ト異ナリ又「キューバ」及比律賓ト同視ス可キニ非ズト雖韓國ノ内政ヲ調理セント欲セバ日本人民ノ利益ノミナラス又併セテ韓國人民ノ利益ニモ着目セザル可ラズ元來韓國人民ハ久シク虐政ノ下ニ呻吟セシモノ商業モ之カ爲メニ興コラズ工業モ之カ爲メニ衰へ農業モ之カ爲メニ盛ナラズ偶々奮勵シテ是等實業ニ於テ大ニ爲スアラント欲スルモノアラバ其未タ成功セサルニ先チ暴君汚吏ノ誅求ニ逢フテ其產ヲ失フト云フ今ヤ韓國ニ日本ノ統監ヲ置ク以上ハ其統監ハ管ニ外交ノ事項ヲ管理スル

ノミナラズ又韓國ノ内政ヲ調理スルヲ得策ト爲ス而シテ其内政ヲ調理スルニ當テハ從來ノ虐政ヲ廢シ之ニ易ユルニ善政ヲ以テスレバ韓國人民ハ奮勵次第ニヨリテ大ニ其富ヲ増スコトヲ得可ク隨テ大ニ日本ニ悅服ス可キハ火ヲ覩ルヨリモ明カナリ饑エタルモノハ食ヲ爲シ易ク餓ケルモノハ飲ヲ爲シ易シ善政ヲ施シテ韓國人民日本ニ悅服シ日本ヨリノ移住民亦韓國ニ於テ實業ニ成功スレハ韓國ハ誠ニ日本ノ内地ノ如キノミ余ハ韓國ヲシテ此ノ如キ状態ニ至ラシメンコトヲ希望ス知ラズ如何ナル人物ガ統監ト爲リテ此ノ事ヲ實行スルヤヲ

(明治三十八年十一月二十六日之ヲ記ス)

後統監府ヲ置カル、ニ及ンデ十二月三十日統監府ト題スル論文ヲ草シ之ヲ明治三十九年一月十日ノ外交時報ニ掲ク即チ左ノ如シ

統監府

昨年十二月ノ論說欄ニ於テ韓國ノ經營ト題スル論文ヲ掲グ之ヲ草シタルノ

當時韓國ニ統監ヲ置クコトハ既ニ定マリタルモ如何ナル人物ガ統監ニ任ゼラルベキヤハ未定ノ問題ニ屬シ道聽途說ニヨレバ高等武官中ニ統監ニ任ゼラル、モノアルベシト云ヘリ此ニ於テ余ハ以爲ク此クノ如キ統監ハ或ハ韓國ニ於テ威ヲ示スコト多キニ過ギ恩ヲ示スコト少キニ過グルノ虞アラント乃チ敢テ統監トナリテ成功スルニ道アリト論ジ日本人ノ利益ノミナラズ韓國人民ノ利益ヲモ商量シ以テ内政ヲ施サシムベシト説キタリ
其後伊藤侯愈々統監トナリタルヲ以テ韓國ニ於テ威ヲ示スコト多キニ過グルナラントノ懸念ハ忽チニシテ漸盡灰滅シ其代リニ恩ヲ示スコト多キニ過グルナラントノ憂懼ハ忽チニシテ腦裏ニ生ズルハ是亦必然ノ勢ト謂フ可キナリ
之ヲ聞ク欲使韓山草木蘇トハ伊藤侯ガ曩ニ韓國ニ向ヒシ時ノ詩ナリト其口先ノ意氣ト抱負トハ賞揚ノ價值アリト雖モ伊藤侯ガ果シテ眞實ニ韓山ノ草木ヲシテ蘇ラシムル氣力ト勇斷トアリヤ否ヤハ吾人ノ竊ニ疑フ所ナリ伊藤侯ハ觀兵式ノ大將ノ如クニシテ戰場ノ大將ニ似ズトハ現代ノ定論ニシテ此

ノ如キ政治家ガ韓國ニ行クモ果シテ日本ノ爲メニ韓國ヲ威壓シ得ルヤ否ヤハ多ク之ヲ論ズルヲ要セズ

元來殖民地ヲ經營スルニ恩ト威トヲ並セ用フルヲ要ス臺灣ノ始メテ我版圖ニ歸セントスルニ當テ我軍隊ハ清國人ヲ殺スコト少キニ過ギタリ是ヲ以テ臺灣ノ土民ハ久シク我ニ懾服セサリシガ兒玉男總督トナリ後藤氏民政長官ト爲ルニ逮デ恩ト威トヲ示シ臺灣ノ治績大ニ揚レリ其威ヲ示スヤ濫リニ人ヲ殺スノ方法ヲ用ヒズト雖モ亦必ズシモ毫モ之ヲ殺サズト言ヒ難ク先ヅ適度ニ其威ヲ示シタリト謂フベキナリ

露西亞人ハ其殖民地ヲ經營スルニ當リテハ先ヅ大ニ其威ヲ用フ「ブラゴエスチエンスク」ニ於テ清國人ヲ虐殺シタルガ如キハ清國人及ビ日本人ノ憤慨措クコト能ハサル所ニシテ且輓近ニ生ジタルノ事實ナルガ故ニ吾人之ヲ忘レント欲スルモ得ベカラズ然レドモ少シク既往ニ遡リテ西比利亞侵害史ヲ閱スルニ露西亞人ハ大ニ土民ヲ虐殺シ暴威ヲ逞シクシテ之ヲ屈セシメ其露西亞人ノ前ニ匍匐膝行スルヲ待テ始テ少ク恩ヲ施シテ之ヲ懷柔スルノ方策ヲ

用フ是ヲ以テ其恩ヲ施スコト頗ル少ナキニモ拘ハラズ其効果至テ大ナリ露西亞人ガ西比利亞ヲ侵害シ之ヲ統治スルニ此ノ如キ方法ヲ用ヒタルノ事實ニ照ス時ハ「ブラゴエスチエンスク」ノ虐殺ノ如キハ毫モ怪ムニ足ラズ加之露西亞人ハ中央亞細亞ヲ征服スルニ當リテモ「テツケトルコマンス」族ニ對スル籌略ヲ閱シテモ露西亞人ガ先ヅ暴威ヲ以テ之ニ臨ミ然ル後微恩ヲ以テ之ヲ懷柔スルノ事跡ヲ發見シ得ベキナリ

我日本人ガ韓國人ニ對スル必ズシモ露西亞人ノ如キ暴威ヲ奮フヲ要セズト雖モ亦必ズ適當ナル程度ニ於テ韓國人ヲ威壓スルヲ要スルナリ然ルニ之ヲ伊藤侯ノ舊來ノ事跡ニ徵スルニ恐ラクハ伊藤侯ハ之ヲ威壓スルノ氣力ト勇斷トヲ缺クモノナリ韓山ノ草木ヲ枯ラスノ勇氣アリテ而シテ後韓山ノ草木ヲ蘇セシムルコトヲ得ベシ既ニ之ヲ枯ラスノ勇氣ナシ焉之ヲ蘇セシムルコトヲ得ンヤ余ハ韓國ニ於テ伊藤侯ノ失敗スルヲ願ハス然レドモ若シ伊藤侯ノ施政ニ缺點アリトセバソハ必ズ威ヲ用フルノ少ナキニ由ルナラン伊藤侯ノ下ニ鶴原氏アリ木内氏アリ丸山氏アリ皆現代ノ能吏ナリ此ノ如キ能吏

ヲ舉ゲテ之ヲ用フ是レ伊藤侯ノ長所ナリ願クハ是等諸氏伊藤侯ノ缺點ニ鑑ミテ之ヲ補フノ方策ヲ講ゼンコトヲ之ヲ聞ク伊藤侯ハ人ニ謂テ曰ク吾韓國ニ行カバ先ヅ無頼日本人ヲ韓國ヨリ放逐セント若シ口先ノミニテ韓國皇帝ヲ安心セシメントノ目的ヲ以テ此ノ言ヲ發セシナラバ多ク之ヲ尤メズシテ可ナリ然レドモ若シ眞ニ日本人ヲ排斥スルトセバ或ハ伊藤侯ハ此ノ如キ原因ヨリシテ大ニ失敗スルヤモ知ルベカラズ如何トナレバコハ唯韓國人ニ恩ヲ賣ルノ方法タルニ過ギズシテ威ヲ示ス所以ニアラザルナリ恩ト威此ノ兩者ハ韓國ニ臨ムニ必要ノ具ナリ而シテ伊藤侯ニ説クニハ恩ノ字ヲ廢シテ可ナリ

(明治三十八年十二月三十日之ヲ記ス)

第三節 大學事件、著者ノ復職、周圍ノ狀

况

十二月四日東京帝國大學總長山川健次郎氏依願免官ノ件官報及新聞ニヨリテ傳ヘラレ吾輩一驚ヲ喫セリ如何トナレバ吾輩ハ山川氏ガ辭表ヲ提出シタルコトヲ未ダ嘗テ聞キタルコトアラザレバナリ後聞ク所ニヨレバ余ガ休職ノ處分ニ付セラレタル後山川氏ハ八月三十一日頃ニ突然辭表ヲ提出シタルモノナリト云フ

余ハ山川氏辭職ノ事ヲ知リテ間モナク同氏ヲ其私邸ニ訪ヒ辭職ノ理由ヲ問フ氏曰ク貴君休職トナリタル當時余ハ多少ノ失策ヲ行ヒタレバ速ニ責任ヲ負フベキモノト考ヘタルノミナラズ總長トナリタル當初ヨリ己レノ總長タルニ適セサルコトヲ覺リタルガ故ニ辭表ヲ提出シタルナリト山川氏ガ總長タルニ最モ適當ナル人物ナルコト天下ノ輿論ニシテ余ハ之ニ付テ喋々ノ辯ヲ費スヲ要セズ唯余ガ休職ト爲リタル當時山川氏ニ如何ナル

失策アリタルヤハ余ノ知ラント欲スル所ニシテ同氏モ亦余ニ語ルニ巨細ノ事實ヲ以テス然レトモ余ハ其説明ヲ反復鄭重ニ聽クモ毫末モ山川氏ノ失策ヲ認ムルコト能ハズ何レニモセヨ此ノ時余ハ以爲ク山川氏余ノ事ニ關シテ職ヲ辭シタルモノ余モ亦之ニ殉セザル可ラズト

山川氏ノ言ニヨレバ寺尾岡田ノ兩氏ハ余ヨリ前ニ同氏ニ逢ヒタリト云フ余歸宅ノ後兩氏ノ名義ヲ以テ端書來ル曰ク本日夕刻一橋學士會ニ於テ山川氏ノ事ニ關シテ會合セント

此ノ日午後一時ヨリ余ハ法科大學教室ニ於テ羅馬法ヲ講セント欲シ晝食後直ニ同大學ニ行キ講義前ニ穂積陳重氏ニ邂逅セシニ氏曰ク山川氏ノ事ニ關シテ余ハ既ニ昨日辭表ヲ提出セリ然レドモ是特別ノ事情ニ基クモノナリ他ノ諸氏モ辭表ヲ提出スルナラントノ事ヲ聞クモ是決シテ得策ニアラズト余曰ク余ハ諸氏ト立場ヲ異ニスルモノナレバ余ハ必ズ辭表ヲ提出ス可シ然レトモ是マデ時局ニ關シテ寺尾岡田等ノ諸氏ト行動ヲ共ニシタルカ故ニ先ツ是等諸氏ニ告ケズシテ辭表ヲ提出スルハ義ニ於テ非ナリ故ニ今夕一橋學士

亭曰兄寺尾此
 席ニ在リタルハ
 大學ノ集會前食
 事ヲ爲サシメ
 來リタルモノニ
 シテ席上ノ集
 會ニ關シテ
 至リタルノ趣
 キニ述ベタルニ
 過

會ノ會合ヲ機トシテ余ノ決心ヲ諸氏ニ告ゲント欲ス然レトモ諸氏ニ對シテ辭表ノ提出ヲ勸メント欲スルモノニ非ラズ余ノ考フル所ヲ以テスレバ余一人辭表ヲ提出ス可キ地位ニ在ルモノニシテ他ノ諸氏ハ必ズシモ此ノ如キ地位ニ在ルモノニ非ズト穂積氏又曰ク後刻山ノ上ニ帝國大學ノ教授助教悉ク會合スルナラント

少焉余ハ教室ニ行キ常刻ヨリ少ク早ク講義ヲ終リ將サニ歸宅セントスルニ當テ學生ニ告ケテ曰ク山川總長辭職シタルニ由リ大學或ハ騒然タラン諸君可成慎重ノ態度ヲ取リテ可ナリト

夕刻一橋學士會ニ行ク集會スル者寺尾兄弟岡田金井高橋建部ノ諸氏余ヲ併セテ七人余諸氏ニ謂テ曰ク山川氏余ノ事件ニ關シテ辭職シタリ故ニ余ハ辭表ヲ提出セント欲ス然レトモ諸君ノ立場余ト異ナリ諸君願クハ辭表ヲ提出スル勿レト寺尾亨氏肯ンセズシテ曰ク余ノ意既ニ決セリ請フ諸君干涉スル勿レト依テ懷ヨリ辭表ヲ出シテ余ニ示ス勢既ニ成レリ余之ヲ如何トモスルコト能ハズ乃チ亦辭表ヲ作リテ之ヲ同氏ニ託ス之ト前後シテ他ノ諸氏モ亦

辭表ヲ作リテ之ヲ懷ニス唯寺尾壽氏ハ從來吾輩ト行動ヲ共ニシタルモノニ
 非サルヲ以テ辭表ヲ作ラザルハ勿論ナリトス
 此ノ時ニ於テ余ハ大勢ヲ左右センコトヲ企ツルノ無益ナルヲ知ルガ故ニ諸
 氏ノ爲サント欲スル所ヲ默視シ敢テ辯論ヲ費スノ愚ヲ爲サズ然レドモ心ニ
 於テ諸氏ノ辭表ヲ提出スルヲ以テ最良無上ノ行動ト爲シタルニ非ズ但シ寺
 尾亨氏及金井延氏ハ明治三十三年以來六年ノ久シキ時局ヲ論シテ山川總長
 ニ迷惑ヲ掛ケタルモノナレバ此際山川氏ニ同情ヲ表シテ辭表ヲ提出スルハ
 適當ノ處置ナリト謂ハザル可ラズ且ツ此兩氏ガ余ト共ニ辭表ヲ提出スルモ
 余ガ氣ノ毒ニ感スルノ分量ハ比較的大ナラズト雖他ノ諸氏ガ余ノ休職事件
 ニ牽聯シテ辭表ヲ提出スルハ余ノ私情ニ訴ヘテ大ニ氣ノ毒ニ感スル所ナリ
 キ山川氏既ニ余ノ事件ニ關シテ職ヲ辭シタルバ余ハ義ニ於テ之ニ殉セサル
 可ラズ然レドモ是唯私人トシテ德義ヲ重ンズルノ行爲タルニ過キズ若シ夫
 レ公人トシテ之ヲ考フルトキハ甚タ遺憾トス可キ點無キニ非ズ前段ニモ屢
 バ述べタル如ク余ハ時局ニ關シテ議論ヲ公ニシ以テ輿論ヲ動サント欲スル

者而シテ之ト同時ニ大學教授言論ノ自由ヲ主張セント欲スル者ナリ此ノ如
 キ決意ヲ爲シタルノ來歴ヲ記センニ余ハ明治三十七年十一月頃教授職ヲ去
 リテ後時局ヲ論スルノ得策ナルヤ否ヤヲ同志及他ノ友人ニ謀リシニ皆其不
 得策ナルヲ論シタルニ由リ余ハ熟考ノ末教授職ヲ去ラサルニ決セリ如何ト
 ナレバ余ハ教授職ヲ去ルモ亦之ヲ去ラサルモ時局ヲ論スル上ニ於テ毫モ損
 益スル所無シ若シ教授職ニ在ルノ故ヲ以テ言論ヲ爲スヲ得サルナラバ寧ロ
 教授ヲ辭スルヲ以テ得策ト爲ス可シト雖余ハ元來教授ニ言論ノ自由アリト
 考フルヲ以テ教授職ニ在ルモ縱マニ言論ヲ爲サント欲スル者ナレバ教授ヲ
 辭スルノ必要ヲ認メズ且ツ大學教授言論ノ自由ヲ主張セント欲セバ教授職
 ヲ去ル可ラズ若シ之ヲ去ルトキハ一私人トシテ言論ノ自由ヲ得可シト雖教
 授トシテ言論ノ自由ヲ得ルニ非ズ余ハ諸氏ト談話シ尙熟考ノ末ニ右ノ如キ
 結論ヲ得タルヲ以テ休職ト爲リタル前ニ於テモ其後ニ於テモ忌憚無ク時局
 ヲ論ジ且ツ特更ニ辭職ヲ爲サザリシナリ然ルニ今山川氏職ヲ辭シタルノ結
 果トシテ余モ亦職ヲ辭スルトキハ教授トシテ言論ノ自由ヲ主張セント欲ス

ルノ素志ハ事實上之ヲ拋棄スルコトト爲ル可ク是余ガ公人トシテノ地位ニ鑑ミテ聊カ遺憾トスル所ナリキ然レトモ私人トシテ山川氏ニ對スルノ徳義モ亦甚ダ重ンズ可キモノナレバ山川氏ノ辭職シタルコトヲ知ルニ及ンデ余モ亦斷然辭職スルコトニ決定シタルナリ

夫レ此ノ如ク余ノ立場ハ諸氏ト大ニ相異ナル所アリ而シテ余ノ立場ヨリ言ハバ直ニ辭表ヲ提出スルハ適當ノ所爲ナリト考ヘラルルモ寺尾金井兩氏ヲ除キ他ノ諸氏ノ立場ヨリ言ハバ辭表ヲ提出スルヨリモ寧ロ依然トシテ教授ノ地位ニアリテ大學ノ爲メニ學界ノ獨立及言論ノ自由ヲ主張スルハ最モ適當ノ所爲ナルカ如シ是余ガ十二月四日一橋學士會ニ於テ他ノ諸氏ト會合シタルニ當テ余ハ獨リ辭表ヲ提出ス可キモ他ノ諸氏ハ辭表ヲ提出スル勿レト勸告シタル所以ナリ然ルニ諸氏皆余ノ言ヲ用ヒズシテ辭表ヲ提出スルニ決ス是其心底何處ニ在ルヤ余ノ知ル所ニ非ズ建部氏既ニ出處録ヲ公ニシ自ラ其辭表ヲ提出シタル所以ヲ述ブ他ノ諸氏ハ果シテ建部氏ト意見ヲ同シクスルヤ否ヤ余ハ諸氏ノ所見ガ那邊ニ在ルヤヲ知ルヲ得ズト雖蓋シ始ヨリ余ト

遊音曰出處録ハ當時之ヲ公ニセラルニ非ズ公トナレナリ

所見ヲ異ニシ且ツ建部氏トモ所見ヲ異ニスル者ナラント思ハル且ツ建部氏ノ出處録ニ對シ論評ヲ加フルノ必要無キハ論ヲ待タズト雖余モ亦始ヨリ建部氏ト所見ヲ異ニシタルモノナルコトヲ一言セサル可ラズ

然リト雖余ハ固ヨリ諸氏ノ行動ヲ非難スルモノニ非ズ此ノ如キ不意ノ出來事ニ際シ身ヲ處スルニハ種々ノ方法アリ必ズシモ一ノ方法ノミ是ニシテ他ノ方法ハ悉ク非ナリト謂フ可ラズ且ツ諸氏皆一片ノ私心無ク必ス公明正大ノ心ヲ以テ身ヲ處セント欲スルモノナレバ余ガ諸氏ノ行動ヲ非難ス可キ理由無キハ勿論ナリトス

余ハ既ニ辭表ヲ寺尾亨氏ニ託シ他ノ諸氏モ亦辭表ヲ懷ニシ今後ノ方策ヲ談シ且ツ共ニ晚餐ヲ喫ス此時打合セテ爲シタル事項ノ一ツヲ舉グレバ吾輩一同辭表ヲ提出スルトシテモ職工ノ同盟罷工ノ如クニ一同打揃フテ講義ヲ廢スルハ面白カラズ故ニ舊ニ依リ講義ヲ續ケルコトト爲サント既ニシテ諸氏悉ク帝國大學山ノ上、俗稱御殿即チ集會所ニ行キ辭表ヲ帝國大學新總長松井直言氏ニ託シ之ヲ文部大臣ニ提出センコトヲ求メタリ而ルニ余ハ帝國大學

ニ行クコトヲ爲サズシテ直チニ獨リ家ニ歸レリ如何トナレバ余ハ休職教授ナルノ故ヲ以テ現職教授及助教ノ總集會ニ出席スルヲ欲セサレバナリ世人或ハ余ヲ以テ山ノ上ノ會合ニ出席シタルモノト爲ス是甚ダシキ誤謬ニシテ余ハ此ノ如キ場所ニ行クヲ好マズ且ツ之ヲ好ムトスルモ此ノ如キ場所ニ行クノ資格ヲ有セザルモノナリ大學部内ノ人々ハ皆此ノ事實ヲ知ル然レトモ余ハ他ノ讀者諸子ニ向テハ此點ニ付テ特ニ注目ヲ加ヘラレンコトヲ希望スルモノナリ如何トナレバ余ガ此ノ集會ニ出席セサルコトヲ知ルニ非ザレバ余ノ出處進退ノ趣意ノ存スル所ヲ誤解スルノ恐アレバナリ之ヲ聞ク此ノ際ニ辭表ヲ提出シタル者ハ吾輩六人即チ寺尾岡田金井高橋建部ノ諸氏及戸水ノ外ニ尙穂積兄弟小野塚ノ三氏アリ穂積陳重氏ハ文部大臣及山川氏ニ對スル特別ノ關係ニ基キ辭表ヲ提出シ穂積八束氏ハ法科大學長ニシテ事務上ノ關係ヨリシテ之ヲ提出シ小野塚氏ハ法科大學教授會ニ於ケル同氏ノ議論ニ基キ之ヲ提出シタルモノナリト云フ余ノ休職ニ關シテ山川氏先ツ職ヲ辭シ尋テ是等八氏モ辭表ヲ提出ス是余ニ取リテハ甚タ恐縮ス可

キ事件ナリト謂ハサル可ラズ

右述ヘタルカ如ク四日山ノ上ノ會議ニハ余自ラ出席セサルノ故ヲ以テ其真相ノ詳細ヲ知ルニ由無ク唯其翌々六日報知新聞及其他ノ新聞ニ出タル所ヲ讀ミタルニ過キズ六日ノ新聞中報知新聞ニ記スル所最モ詳細ヲ極ム余報知新聞ノ客員タルノ故ヲ以テ世人或ハ余ガ此ノ記事ヲ出サシメタルモノナリトノ疑ヲ抱キタルカ如キモ是余ニ取テハ甚シキ冤ナリト謂ハサル可ラズ此ノ記事ノ出タル當時ニハ余ハ誰ガ此ノ事實ヲ洩セシヤヲ知ラザリシモ後ニ確聞スル所ニヨリテ之ヲ觀レバ此ノ記事ハ岡野敬次郎氏ノ言ニ基キタルモノナリシト云フ岡野氏會議ノ事實ヲ洩ラシテ人ハ余之ヲ洩ラシタリト思フ余ハ誠ニ割ノ惡キ地位ニ立チタルモノナリ余ハ特更ニ此ノ如キ言ヲ此ニ附記ス如何トナレバ會議ノ模様ヲ人ニ知ラシムルヲ以テ必ズシモ惡事ト考フルニ非ズト雖新聞ノ記事中心ニハ甚タ人ノ名譽ニ關スル者アリ故ニ余ハ此ニ一言ヲ加ヘ以テ世人ノ誤想ヲ指摘セザル可ラズ

何ニモセヨ新聞ニ記載シタル事項ト余ノ聞キタル所ノ事柄トヲ取交セテ之

ヲ言ハ、四日山ノ上ノ會議ニ於テハ理科大學ノ寺尾、田中館ノ兩氏ハ大ニ學界ノ獨立ト大學ノ神聖トヲ論ジ文部大臣ガ濫リニ大學總長ヲ交迭セシメタルノ非ナルヲ攻撃シタレバ滿坐肅然トシテ兩教授ノ意見ヲ聽キ慨然トシテ決心スル所アリタリト云フ而シテ此ノ會議ノ終リニ於テ文部大臣及總理大臣ニ書ヲ送リテ之ヲ難詰スルニ決シ梅謙次郎、三上參次、及高橋作衛ノ三氏ヲ起草委員ト爲シ脱稿ノ後六日ヨリ七日マデニ百九十餘名ノ教授助教ノ調印ヲ終リ之ヲ兩大臣ニ提出シタリト云フ尙此ノ事ニ關スルノ記事ハ六月九日ノ諸新聞ニ在リ而シテ東京朝日新聞ニ記スル所左ノ如シ

●大學ノ抗議書

去ル四日大學教授百餘名ノ決議ハ(第一)教授ヨリ抗議書ヲ文部大臣ニ出シ又總理大臣ニ警告スルコト(第二)各大學學長評議員ヨリ文部大臣ニ辭職ヲ勸告スルコト(第三)之ニテモ目的ヲ達セザレバ自ラ辭職スト云フノ三點ニシテ抗議起草委員三名ヲ選出シ其結果、高橋博士筆ヲ執リ梅博士實質ヲ審査シ三上博士文字ヲ潤色スト云フ鄭重ナル手續ヲ經六日ヨリ七日迄ニ百九十餘名教

授助教全體ノ調印ヲ終リタリ提出委員ニ關シテハ恰モ首相ニ於テ大學各部ノ實情ヲ親シク聞クノ希望アリシ由ニテ(穗積兩博士ト首相トノ會見モ首相ヨリ招キタルモノト傳聞ス)各大學ヨリ二名ノ委員ヲ出シ青山、入澤、土方、岡野、渡邊、三好、箕作、藤澤、坪井、上田ノ諸博士等之ニ當リ昨朝ソノ主張ヲ首相ニ述べタリト云フ提出セラレタル抗議書ノ本文ハ左ノ如シ

○文部大臣ニ對スルモノ

謹テ久保田文部大臣閣下ニ白ス本年八月二十五日東京帝國大學法科大學教授法學博士戸水寛人氏休職ヲ命ゼラレ越エテ五日即チ八月末日前東京帝國大學總長理學博士山川健次郎氏辭表ヲ閣下ニ呈セリ閣下ハ之ニ關シテ一方ニハ懲勸ニ其辭意ヲ翻サシメシメコトヲ勉メテ其熟考ヲ要求シ他方ニハ其辭表ヲ留置セラレタリ、爾來五閱月民情炎涼遞變シテ英艦ノ來航觀艦ノ盛典猛將ノ歡迎等ヲ經今ヤ父兄ノ心ハ子弟ノ凱旋ニ傾注シ都下戒嚴ヲ解クノ曉ニ至リ閣下ハ去ル十二月一日ヲ以テ突如トシテ山川前總長ヲ東京帝國大學ニ訪ヒ九十餘日以前而カモ再考ヲ要求セラレタル舊辭表ニ對シ急遽ニ聽許ノ

旨ヲ傳ヘラレ茲ニ山川總長ハ命名好評ノ噴噴タルニモ關ラズ俄カニ其職ヲ去ラル、コト、ナリタルハ小官等ノ深ク遺憾トスル所ナリ

閣下ハ嘗テ戸水教授ニ休職ヲ命ゼラレタルハ大學ノ獨立ヲ侵害シ學問ノ自由ヲ拘束シタルモノニシテ東西兩帝國大學法科大學ノ抗議スルトコロトナリ天下皆責ヲ閣下ニ歸セリ閣下ノ賢明ヲ以テシテ文教首腦ノ地ニ居リ而カモ此ノ如キ行動ヲ敢テセラレシハ閣下平素ノ抱負自任ニ反スルヲ思ヒ又閣下ノ英敏ヲ以テシテ迷ウテ復ルヲ知ラザルガ如キコトアラザルヲ考ヘ小官等ハ竊ニ閣下ガ列國ノ環視ニ願ミ後世ノ非議ヲ慮リテ其過ヲ改ムルニ吝ナラザルベキヲ信ジタリ然ルニ今ヤ其非ヲ遂ゲ急轉一下直チニ山川總長ノ職ヲ免ゼラレタルハ怪訝ニ堪ヘザルナリ閣下或ハ云ハン前總長ノ免官ハ其情願ニ出ヅ事決シテ戸水教授ノ問題ト關聯スル所ナシト然レドモ十目ノ視ル所十手ノ指ス所嚴トシテ揜フベカラズ山川總長ニ願意アリシトスルモ其辭表ハ嘗テ閣下ガ熟考ヲ要求セラレシ所ナリ閣下ハ何故ニ熟議ヲ遂ゲズ直ニ之ヲ免官セラレシカ是レ單ニ常識ニ訴ヘ士道ニ照スモ慊焉タルナキ能ハズ

閣下又或ハ說ヲ爲シテ云ハン山川前總長ハ戸水教授ノ休職セラレントスルニ際シ文官分限令ノ規定ヲ誤解シ閣下ノ要求ニ應ジテ休職ヲ申請セリ是ニ於テ法科大學ノ質問ヲ受ケ之ニ對シテ責ヲ引キタルモノナリト小官等姑ラク山川前總長ヲシテ此誤解ヲ惹起セシメタル者果シテ那邊ニ在ルカヲ追究セズタゞ此問題ハ戸水氏ヲ更ニ講師トシテ囑託シ講座ノ曠廢ヲ防ギ得タルニヨリテ大半解決セラレタリ今日ニ在テハ山川氏ハ法科大學ノ質問ニ對シテ責ヲ引クノ必要ナキヲ斷言スベシ閣下若シ辭表ノ文字ニ據リ山川前總長ノ辭職ハ貴族院議員トシテ事務ノ多端ナルニ基クト云ハンカ山川氏ノ貴族院議員タリシハ昨今ノ事ニ非ズ何ヲ以テ山川氏ハ今日ニ至ル迄重職ヲ曠ウセズシテ其命名ヲ博シ而カモ貴族院議員ニ於テ其職責ヲ完ウスルヲ得タルカ

之ヲ要スルニ辭表ノ形式ト事件ノ真相ト相異ナルコトハ例證甚ダ多シ山川總長ノ辭表ノ文字ヲ以テ其免官ヲ強辯セントスルモ事件ノ真相ハ遂ニ之ヲ蔽フ能ハズ小官等ハ事ノ顛末ヲ聞キ曲折ヲ審ニスルニ及ビ彌々怪訝ヲ脱ス

ルコト能ハズ山川前總長ノ辭表提出ノ時期ハ教授ノ上奏並ニ閣下ニ對スル抗議言論自由ノ述名起稿戸水講師囑託等ノ前ニ在リト雖モ其免官ノ理由トシテハ到底此等ノ諸現象ヲ聯想セザル能ハザルナリ

サレバ山川前總長ノ免官事件ハ單純ナルニ官吏ノ免官問題ニアラズシテ其根底ニ於テ重大ナル國家的並ニ世界的ノ問題ヲ包含ス即チ大學ノ獨立學問ノ自由是レナリ職ヲ學問至高ノ府ニ奉ジ超卓高潔ナルベキ者ニシテ行政官ノ不法若クハ不當ナル行爲ニヨリテ漫ニ進退黜陟セラル、ガ如キコトアラバ何ヲ以テカ大學ノ威嚴ヲ維持スルヲ得ン又何ヲ以テカ學問ノ自由ヲ擁護スルコトヲ得ン小官等モト専心講學ニ從事シ以テ國家ニ盡スヲ本分トス然レドモ終ニ緘黙ヲ守ル能ハザルハ一ニハ大學ノ威嚴ヲ維持シ一ニハ公平無私ニシテ統轄ノ材アル山川前總長ノ免官ヲ見ルニ忍ビズ又進ンデ我帝國ヲシテ學問蹂躪ノ汚名ヲ海外諸國ヨリ受ケシムルコトナク退テハ小官等ノ俗累ヲ忘レテ神聖ナル學術ニ専心一意ナルヲ欲スルガ故ナリ竊カニ謂フニ學政ノ振張ハ閣下積年ノ希望ナリ文教ノ隆興ハ閣下終生ノ企圖ナリ此希望ヲ

有スルノ閣下ヲシテ學問蹂躪ノ汚名ヲ蒙ムラシムルコトモ小官等ノ大ニ遺憾トスル所ナリ是ヲ以テ閣下ニ對シテ猛然反省セラレンコトヲ切望シ尊嚴ヲ冒瀆スルノ罪ヲ願ミズ敢テ所信ヲ進言ス頓首再拜

明治三十八年十二月七日

青山胤 通外百九十名

○總理大臣ニ對スルモノ

謹テ内閣總理大臣桂伯爵閣下ニ白ス頃者東京帝國大學總長山川健次郎ハ願ニ依リ其本官ヲ免ゼラレタリ其表面ノ理由ハ常人ノ情願ニ基クガ如クナレドモ事ノ真相ハ由來スル所甚ダ深ク事態重大ニシテ大學ノ獨立ト學問ノ自由トニ關スルモノアリ其責文部大臣ニ在ルハ云フヲ待タズ而シテ文部大臣ヲシテ此ノ如キ行動ニ出デシメタル者アリトセバ亦責ヲ明ニスベキハ當然ナリト思惟ス故ニ別紙ノ覺書ヲ文部大臣ニ呈シタルコトヲ謹ンデ閣下ニ報告ス且ツ夫レ此事タル國家的并ニ世界的ノ大問題ニシテ處置其宜ヲ得ザルトキハ汚名ヲ海外ニ表白スルニ至ルベキヲ以テ慎重ニ且ツ敏速ニ善後ノ策

ヲ講ゼラレンコトヲ希望ス頓首再拜

之ヲ聞ク前記總集會ノ日ヲ以テ松井新總長ハ直ニ辭表ヲ提出スルニ決シ其翌五日朝愈ヨ之ヲ提出シタリト云フ十二月六日金井延氏ヨリ手紙來ル曰ク今後大學ニ於テ休講セン四日一橋ニ於テ續講ノ約束ヲ爲シタレドモ之ヲ守ルヲ欲セズト同氏ハ其後果シテ休講シタルヤ否ヤヲ知ラズト雖休講モ亦或目的ヲ達スルニハ頗ル妙手段ナルモ知ラズ余自身ハ騷動ノ起リタル當時ヨリ復職ニ至ルマデ引續キ講義ニ從事シタリト雖此ノ時ニ當テ法科大學教授中講義ヲ休ミタルモノ蓋シ甚ダ少カラズ特更ニストライキヲ爲サント欲シテ休講シタルニ非ザルコト論ヲ待タズト雖教授モ學生モ心中甚タ騷然タルノ際ニ於テ此ノ如キ事ノ生スルハ決シテ怪シムニ足ラズ

又文科大學ノ建部遜吾氏ノ休講ニ關シテ十二月十一日ノ報知新聞ハ左ノ如ク記セリ

○建部博士ノ休講

建部博士ハ一昨日限リ其講座ヲ休止シ學生ニ對シテ諸君ニ對シテ今日講座ヲ休止スルハ情ニ於テ忍ブ能ハザル所ナリト雖モ義ニ於テ如何トモスル能ハズ諸君宜シク余ノ心事ヲ諒セラレタシ且ツ諸君ノ行動ハ諸外國人ノ最モ注目スル所ナルヲ以テ慎重ノ態度ヲ執ラレンコトヲ望ムト訓諭セリト

之ヲ聞ク十二月九日帝國大學教授助教授ハ再ヒ山ノ上ニ於テ總集會ヲ催シ而シテ此ノ時左ノ事項ニ關シテ會合者ノ意嚮畧一致シタリト云フ

- 一、學界ノ獨立ヲ圖ルニ適當ノ方法ヲ設クルコト
- 二、速カニ山川前總長ノ再任及戸水教授ノ復職ヲ見ル可キコト
- 三、今後必スシモ總集會ヲ開クコトヲ爲サズシテ今回相談セル萬般ノ事ヲ帝國大學評議會員諸氏ニ一任スルコト

然ルニ此第三項ニ付テ一言セン十一日ニ至リ文部大臣辭職シタリトノ報知吾人ノ耳朶ニ達シ是レヨリ以後帝國大學評議會員諸氏ハ今回ノ事件ヲ拋棄シテ顧ミルコト無シト云フ而シテ之カ爲メニヤ法科大學以外ノ諸分科大學

連日此三項提出
ハテニ一途致セリ
ヤハ中途陪聽ヨリ
詳知セサル所ナ
リ

水問題然リ唯戸
 山川問題ハ
 共同抽象的ナ
 自由獨立問題
 形體ニシテ容
 ノ毀損ヲ忍サ
 精神ノ後直サ
 受カスル所以
 余カ當時大ニ
 志力ニ以テ有
 存スル所以然
 選者曰然リ然
 ルカ然則戸水復

ニ於テハ再ヒ此ノ事ニ付テ心ヲ勞スルモノ無カリシガ如シ
 夫レ大學事件ハ同大學ノ真相ヲ知ラサル人ヨリ之ヲ見レバ頗ル不可思議ナ
 リ教授及助教教授ガ二回マデモ山ノ上ニ於テ總集會ヲ開キ百九十餘人ノ連名
 ヲ以テ書ヲ總理大臣及文部大臣ニ呈シタルニモ拘ハラズ一旦文部大臣ノ辭
 職ヲ見ルニ及ンデ昔日ノ殺氣ハ忽ニシテ雲散霧消シ同大學一小部分ヲ除ク
 ノ外ハ悉ク無事平穩ニ歸シタリ然レドモ余ヨリ之ヲ見レバ此ノ如キコトハ
 毫モ怪シムニ足ラズ文部大臣辭職當時ニ於テ大抵ノ問題ハ業既ニ解決セラ
 レタリ學界ノ獨立ハ適當ノ方法ヲ設ケテ後始メテ期シ得可キ事柄ニシテ僅
 々ノ歳月中ニ成就シ得可キ事ニ非ズ又山川前總長ハ當分再任セサル可シト
 ノ決意ヲ示シタルヲ以テ殘ル所ノ問題ハ唯戸水復職問題ノ一アルノミ然ル
 ニ戸水復職ハ法科大學以外ノ諸分科大學ニ直接ニ關係無キ問題ナルカ故ニ
 是等諸分科大學ノ學長及評議員諸氏ハ此問題ニ熱中セザルハ毫モ怪シムニ
 足ラズ又法科大學ノ學長ハ穗積八束氏ニシテ評議員ハ岡野敬次郎氏ナリ此
 二氏ガ戸水復職問題ニ熱中ス可シトハ世間何人モ期待シ得ザル所ナリ然ラ

職問題ニ熱中シ
 得サリシモノノ
 全大學部内ニ多
 ムナル復何ソ怪
 ムニ足ラムヤ

ハ則チ文部大臣ノ辭職ニヨリテ大學騒動ガ忽チニ平穩ニ歸シタルハ毫モ怪
 シムニ足ラス世間其平穩ニ歸シタルノ罪ヲ以テ吾輩數名ノ者ニ嫁セントシ
 タルハ亦思ハザルノ甚シキ者ナリ乞フ第一項及第二項ニ關シテ余ノ記スル
 所ヲ讀メ余及法科大學諸教授ニ果シテ不都合ノ行爲アリヤ否ヤ
 第一項學界ノ獨立ニ關シテハ今尙法科大學ニ於テ委員ヲ設ケテ之ヲ研究シ
 ツハアリ
 又第二項ニ關シテ生シタルノ事實ヲ記センニ
 余ノ聞ク所ヲ以テスレバ是ヨリ先キ大學ニ於テ騒動ノ起リシヤ否ヤ男爵菊
 池大麓氏ハ倉皇桂伯ヲ訪ヒ濱尾新氏ヲ以テ總長ト爲スノ得策ナルヲ説キ且
 ツ既ニ辭表ヲ提出シタル諸教授ニ對シ何等ノ處分ヲ行ハズシテ單ニ辭表ヲ
 返ス可キコトヲ勸告シ尙氏ノ説ノ當否ヲ確メンガ爲メニ穗積氏兄弟ヲ呼ヒ
 大學ノ事情ヲ問ハレ度ト述ヘタリト云フ此ノ事固ヨリ秘密ニ屬スルヲ以テ
 事實果シテ余ノ聞ク所ノ如クナルヤ否ヤ余ハ之ヲ確知スルコト能ハズ何ニ
 モセヨ菊池男爵第一ニ桂伯ニ逢ヒタルハ事實ナルカ如ク又穗積氏兄弟ガ其

後桂伯ヲ訪ヒタルモ亦事實ナルカ如シ

之カ爲メニヤ聞ク所ニヨレバ山川氏菊池男穂積氏兄弟、富井政章氏及岡野敬次郎氏ハ相前後シテ濱尾氏ニ逢ヒ松井氏ニ代リテ總長トナランコトヲ乞ヒタリト云フ又聞ク所ニヨレバ當時農商務大臣清浦子爵ハ自ラ濱尾氏ノ邸ヲ訪ヒ内閣ヲ代表シテ商議スル所アリタリト云フ而シテ桂伯モ亦屢バ濱尾氏ニ面會ヲ求メシニ當初濱尾氏ハ未タ面會ス可キ時機ニ非ズトシテ之ヲ拒ミタルニモ拘ハラズ後終ニ時機至レリト爲シ桂伯ニ面會シタリト云ヒ傳フ此ノ時ニ當リ濱尾氏ノ女ニシテ理科大學教授渡瀬庄三郎氏ノ夫人病ンデ將サニ死ニ頻セントシ病室ノ光景悲絶哀絶ナリ然ルニ濱尾氏ハ私事ノ故ヲ以テ公事ヲ棄ツ可ラズト爲シ泰然悠然逍遙トシテ迫マラサルノ態度ヲ以テ是等諸氏ニ面會シ終ニ總長タルコトヲ諾スルニ傾キタリト云フ是余ガ後ニ至リ聞キタルノ事實ニシテ此ノ事實ノ生シツ、アリタルノ當時ニ於テ毫末モ之ヲ與カリ知ラザリキ

十月十日法科大學ノ教授會アリ此教授會ハ夕刻六時ヨリ始マリ深夜ニ終リ

遊音曰濱尾氏ノ
心事實ニ悲壯ナ
リト謂フベシ亦
門幾萬ノ子弟如
ノ風ニ向フカ如
キモノアル如
偶然ニアラズ

タリト聞ク而シテ山川前總長モ亦此ノ會ニ參加シタルモノ、如シ教授會終リテ後篁克彦氏余ノ家ニ來リ門ヲ敲ク時ニ余寢ニ就キタルヨリ既ニ一時間餘ヲ經タリ篁氏ノ聲ヲ聞テ夢始メテ覺メ起テ時計ヲ見レバ方サニ一時半正確ニ言ハバ既ニ十一日トナリタルナリ篁氏ト相見ルニ及ンデ氏慎重ナル態度ヲ以テ余ニ謂テ曰ク濱尾氏總長ト爲ルコトニ畧ホ決定シタリ之ニ關シテ山川前々總長ハ明日(十一日)貴君ノ家ニ來ルナラン山川氏若シ貴君ニ向ヒ辭表ノ撤回ヲ求ムルナラバ貴君之ヲ諾セラレ度是法科大學教授一同ノ希望ナリト余答テ曰ク余焉ソ辭表ヲ撤回スル者ナランヤト余ハ此ノ事ニ關シテ篁氏ト論争シ刻ヲ移ス其去ルニ及ンデ時計ヲ見レバ既ニ三時ヲ過ク篁氏深ク余ニ同情ヲ寄スルノ人ナリ余此人ト論争スル甚タ本意ニ非ズ圖ラザリキ其言ニ服セズシテ深更應接室ニ於テ相論争セントハ篁氏去リテ余ハ一身ノ前途ニ付再考スル所アリ以爲ク山川氏宜シク再ビ總長ノ職ニ就ク可シ然ルニ濱尾氏總長ト爲ラントスルハ甚タ非ナリト余ガ此ノ如ク思ヒシ所以ノモノハ他無シ其前日及前々日等ニ於テ濱尾氏ガ山川氏菊池男穂積氏兄弟、富井氏

岡野氏及桂伯等ヨリ種々ノ交渉ヲ受ケタリトノ事實ヲ知ラザリシニ由リ唯一概ニ山川氏ヲシテ再ビ總長ノ職ニ就カシメンコトヲ希望シタルバナリ余ハ其當時此ノ如キ考ヲ懷抱シタルガ故ニ即刻濱尾氏ニ宛タルノ書ヲ認メ必ズ總長ト爲ルコト勿レト記シ且ツ曰ク山川氏ノ再任ヲ計ラズシテ閣下自ラ總長タラントノ意アラバ請フ先ヅ余ノ辭職ヲ許可セラル、様取計ハレ度ト余ハ此ノ書ヲ認メ天ヲ睨ンデ其明クルヲ待テリ事情斯ノ如シ故ヲ以テ固ヨリ眠ルコトヲ欲セズ意氣凛々トシテ腕鳴リ肉飛ブノ慨アリ十一日早朝使ヲシテ此ノ書ヲ携ヘテ濱尾氏ノ邸ニ行カシム既ニシテ日本大學ノ事務員高井計之助氏來リ曰ク穂積八束氏ヨリ電話アリ山川前々總長ハ本日十二時半ヨリ一時マデニ貴家ニ來ルナラント依テ高井氏ニ托シ返辭ヲ爲セリ

十二時前ニ至リ篋志田ノ二氏余ノ家ニ來リ尋テ岡田、山田、上杉、中田、中川、高野立等ノ諸氏期セズシテ余ノ家ニ會シ曰ク辭意ヲ翻スモ亦可ナラズヤト余曰ク先ツ山川氏ノ言ヲ聽イテ而ル後余ノ決意ヲ述ベン遺憾ナガラ未ダ貴君等ノ言ニ同意スルコト能ハズト諸氏曰ク然ラバ一橋ノ學士會ニ於テ集會ヲ催

遊目録
 而目録
 人ニ追々
 フ文王ル
 スモ文王
 ニ於テカ
 見ルイテ
 氏チ

フス可キニ由リ貴君モ亦來リ會セヨト余曰ク諾余ハ山川氏ノ來ルヲ待タズシテ自ラ山川氏ヲ訪ヒ其答ヲ得テ而シテ後一橋ニ會セント余ハ此時ニ於テ山川氏ヨリ如何ナル答ヲ得ント欲セシヤ再ビ總長ノ職ニ就カントノ答是ナリ此ノ如キ談話ヲ終リテ後諸氏ハ余ノ家ヲ辭シテ學士會ニ行キ余ハ急ニ晝食シテ山川氏ヲ訪フ氏曰ク願クハ余ニ對シテ特ニ「フエーヴオル」ヲ與ヘヨ貴君一人教授ヲ辭スレバ他ノ諸氏モ勢必ズ辭職ノ意ヲ固セン而シテ大學ハ或ハ之ガ爲メニ瓦解スルヤモ知ル可ラズ大學ノ安危罹リテ貴君一人ニ在リ故ニ庶幾クハ辭意ヲ翻セヨト其言語頗ル懇勸余曰ク辭意違カニ翻シ難シ余ハ充分ニ熟考ノ末ニ辭表ヲ提出シタルヲ以テナリ余ニ對シ留任ヲ諭サル、ヨリモ寧ロ閣下再ヒ總長ト爲レ是余ノ願ナリト山川氏曰ク余ハ今總長ト爲リ難シ士ノ出處進退ハ此ノ如ク輕々シキモノニ非ズト余曰ク然ラバ余自身モ輕々シク辭意ヲ翻ス可ラズト氏曰ク貴君ノ言一理無キニ非ズト雖此ノ如ク辭意ヲ固ク執ラル、トキハ余ハ甚ク困却スルカ故ニ願クハ辭意ヲ翻セヨト余モ亦頻リニ氏ニ向テ再ヒ總長ト爲ランコトヲ勸メテ已マズ而シテ氏之ヲ